

371.2  
I96  
⑤



2

0041998-000

371.2-196ウ

ペスタロッチー研究

岩崎喜一・著

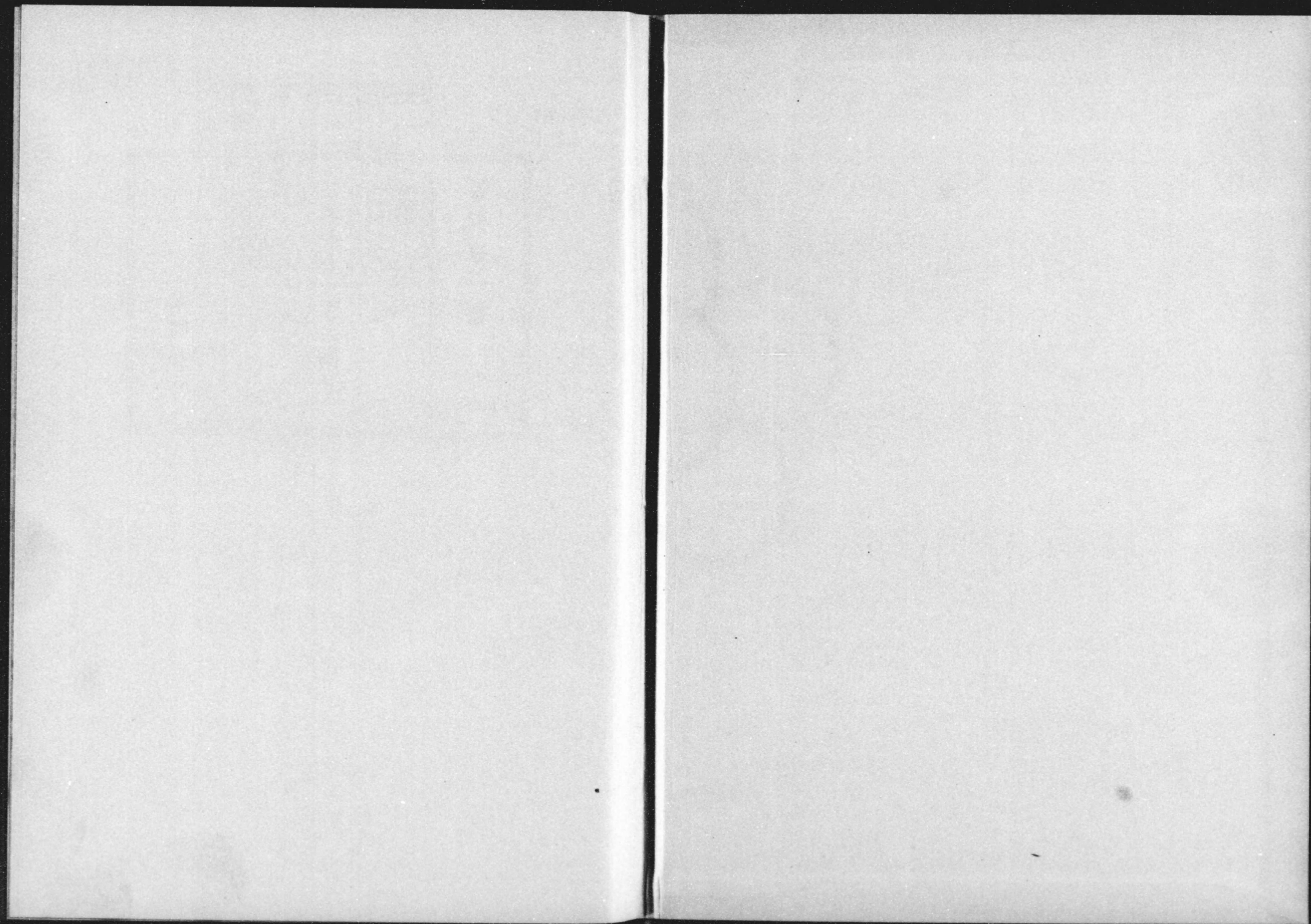
大日本雄弁会講談社

昭和22

AHB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。







外7912

371.2  
I.96



岩崎喜一著

子一研究

講談社刊

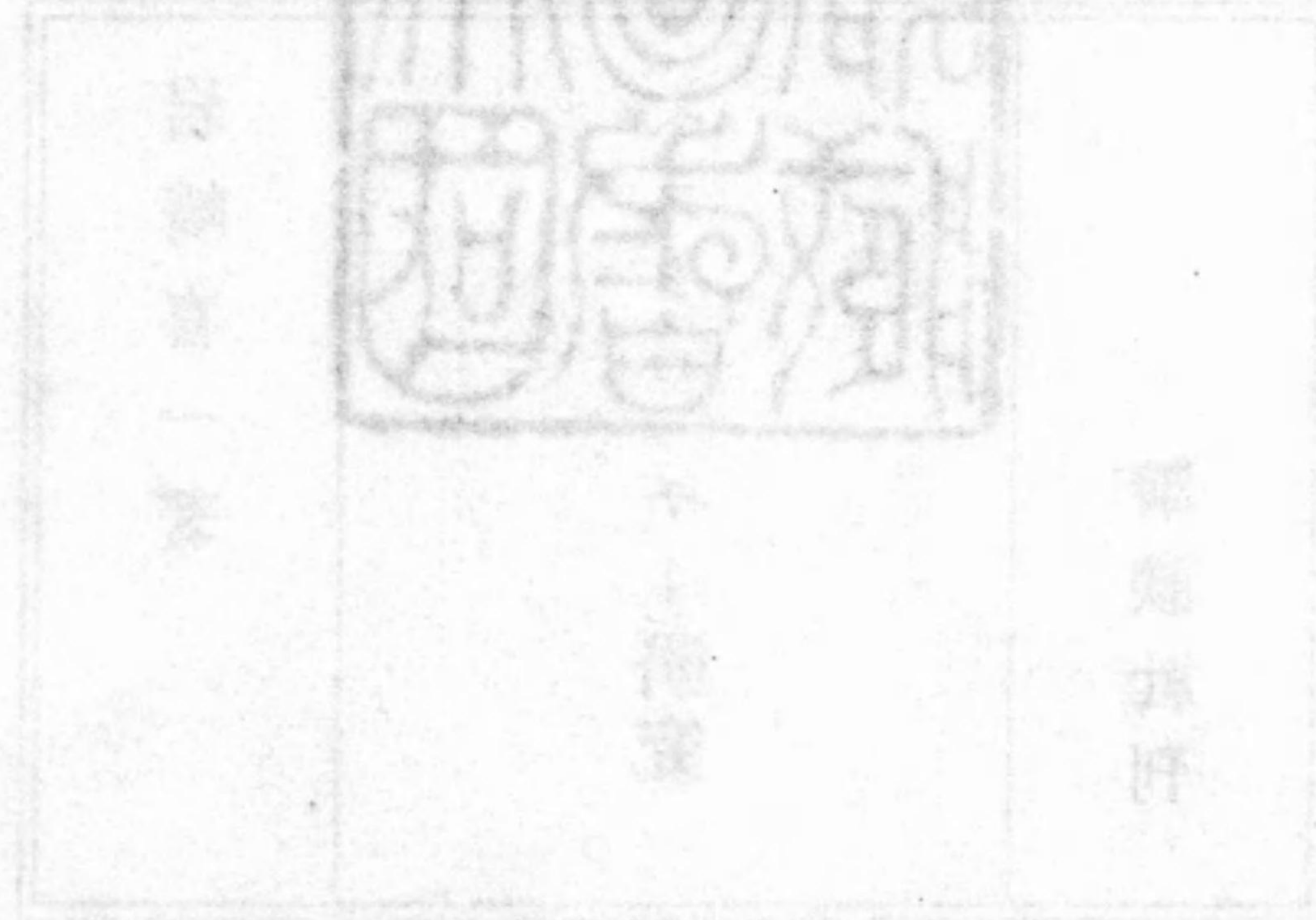






Johann Heinrich Pestalozzi  
(1746-1827)

S. 178  
80. 1





1010  
91

序

本書の主要内容は数年前雑誌「教育學研究」に載せた論文「ペスタロッチーに於ける『自然』」(「夕暮」と「探  
てし)を骨子とするものである。新たに二、三讀みなほした参考書等に基づいて不備の點を補ひ、又全體に互つて  
推敲を加へたが、章節の題目などを多少改めた外、内容的には殆ど發表當時の原型をそのまま存してゐる。數年  
前と今日とは世界情勢も國內情勢もその變化に於て文字通り隔世の感があるが、私としては今日に於てもなほ  
依然として發表當時のものを殆どそのまま確信しつゞける事の出来るのをひそかに喜ぶものである。ペスタロッ  
チーの思想と實踐には、時代的變動を越えて、永遠に人類を成へる尊いものが存することをいよく確信づけら  
れる思ひがする。

ペスタロッチーの言葉に「我が唯一の書、そは人間なり……」とあるが、ペスタロッチーに於ては終生人間が  
問題であつた。實に人間世界を究極に於て支へてゐるものの追究とその實現の方途とが、ペスタロッチーの中心  
問題であつたのである。今日人間探究の新たな發足點に置かれてゐる我々の場合、一層ペスタロッチーへの關心  
を深くするわけである。尤もかく言へばとて、それは何等ペスタロッチーに於て、人間問題のすべてが解決され  
序

この肖像はデレカートのペスタロッチー研究 (F. Delekat · Jo-  
hann Heinrich Pestalozzi) より轉載したものである。原畫はペス  
タロッチーの死より數年前にヒッピウス (D. A. Hippus) の描いた  
ものである。長い苦闘の生涯を通じて完成されたペスタロッチーの  
姿をよく現はしてゐるやうに思はれる。本書で扱つてゐる範圍より  
は後の時期に屬するものであるが、特に掲載することとした。



てゐると主張するものではない。ましてペスタロッチー自身について言へば、小西博士も或る書のなかで述べてゐるやうに「ペスタロッチーには遺相はあるが往相が見られない」といふやうなことも、徹底した宗教の立場からは正當に言ひ得られるであらう。確にペスタロッチーに於ては、それがあまりにも人間の世界に密着しすぎてゐる嫌ひがないではない。併しひるがへつて又、人間の凡情を通じて惱みぬく所に、宗教的な魂の赤裸々な姿があることを思へば、人間的なあまりに人間的なペスタロッチーの態度には、又それとして尊い行き方を我々は認めなければならぬであらう。

周知の如くペスタロッチーの思想構成に於て特色なのは「近接」(Nähe)といふ考へである。所謂「直観」(Anschauung)の思想に連るものであるが、由來この考へ方については、これが積極的意義を認めるもの、反對にこれを輕視或は無視するものなど、必ずしもその理解は一樣ではない。しかし私はこの「近接」の考へこそ、ペスタロッチーの思想、従つて又所謂「方法」に於て決定的に重要性をもつものであり、而も極めて示唆的なものを藏してゐると考へてゐる。一體私の考へでは、この「近接」といふのは、「地位」(Lage)などと同様、一種關係的なものを示す構造的な概念であると思ふ。即ちそれは、深く人間存在の構造的に連る概念であると言へるであらう。因よりペスタロッチーに於て、その論理的解明が十分果されてゐるといふわけではなく、却つて素朴的な形で脱かれてゐる場合が多いが、しかしそれが飽迄も全的に生きる人間の立場から主體的に把握されてゐる事は之を認めねばならぬであらう。實にこの主體性、自覺の許にこそ、「近い」といふ事が切實なひびきを以て我

我に迫つてくるものと言へるであらう。彼の生涯を通じて到達したる、「生活が陶冶(形成)する」(Das Leben bildet)といふ根本命題も、正しくかゝる立場からして、その眞義が解し得られるものと考へられる。そしてこれがやがて、本書に於て私の探り求めてゐる立場でもある。

ペスタロッチーは一七四六年一月十二日、スキスのチーリッヒに生れたのであるが、その年から數へれば昨年(一九四六年)が丁度生誕二百年に當るわけである。私は一つには故人にさゝやかな記念の意を捧げるため、又一つには年來心がけてゐた研究の一つを纏める意味で昨年八月本稿の整理を了したのである。極めて未熟なものではあるが、これを機會として、今後更に學徒としての研究を續けてゆきたいと念願してゐる。大方の高教を仰ぐことが出来れば幸である。

本研究を進めるに當つては、恩師乙竹先生・篠原先生・寺澤先生・加藤先生・石山先生其他先輩知友から、或は我が國のペスタロッチー研究家から、著書を通じ又は直接の指導を仰ぐことによつて、啓發勸掖されることが極めて多かつた。こゝに學恩の深いことを回想して衷心感謝の意を表したいと思ふ。

尙本書の刊行に當つては東京女高師の石川謙先生及び講談社の西原長康氏・松下光男氏に多大な御配慮をいただいたが、併せて又感謝の意を表したいと思ふ。

昭和二十二年七月八日

著

者



生活の立脚點、人間の個體的限定、  
汝こそは自然の書籍である。

「夕暮」

環境が人間を作るが、同時に又、  
人間が環境を作る。

「探究」

生活が陶冶形成する。

「レンツブルグ講演」

——ベスタロッチ——

目次



第一章 主題

第一節 近時の研究動向と「探究」……………三  
第二節 「自然」の問題性……………八

第二章 「夕暮」と「探究」の兩極構造

第一節 生涯の問題——民衆……………三  
第二節 「夕暮」を貫く思想……………七  
第三節 兩つの極……………七

第三章 小説「リオンハルトと」より「探究」への展開

第一節 極構造の展開と諸研究家の示唆……………三  
第二節 小説「リオンハルトと」と「自然」問題……………六  
——「自然」の二重性——

第三節 士官グリニフィーの哲學……………三  
——作る「自然」——

第四節 人類發展史的思想背景と道德・宗教問題……………九

第四章 時代の試煉……………一七

第五章 「探究」の結構と思想……………二六

第一節 全體の構成……………二八

第二節 中心思想……………三三  
(一) 自然状態に於ける我……………三三  
(二) 社會状態に於ける我……………三九  
(三) 道德状態に於ける我……………四六

結語……………五五



ペスタロッチー研究

岩崎喜一



第一章

主題

私は以前から個人と社會といふ問題を心に懐いて、日なほ淺い思索生活を通じてではあるが、ひそかに其の解決を求めてゐた。特に此の場合、私の關心は現代社會の矛盾相が諸方面から検討せられるに至つた我々の時代一般の轉向と一脈の連りをもつものであつた。従つて問題は第三者の立場に於てと言はんよりは、寧ろより切實な自己の問題として採り上げられたのである。而も此の場合、小さいながらも何等か或る社會的なるものに目覺めたる自己として此れが解決を求めてゐた。そして勢の赴く所、此の問題は私の人生觀問題にまで底深く根を下すに至つた。

ところで、斯かる問題自身が我々の置かれたる一定の歴史地盤との深い連りをもつものである事は動かし得ざる事實であるが、而もその限り、之が解決も亦飽くまでも眞に客觀的なる歴史的、社會的媒介面に即して遂げられねばならぬわけである。従つて問題は其の廣さに於て將た又その深さに於て、極めて複雑多様な考察面を其れ自身に擔つてゐるのであるが、しばらく是れを主體の側に翻して見る時、最も重要な問題は、我々の心の構へ方、即ち根本態度の問題であると言はねばならない。而して斯かる觀點に立つて此の問題を考察する場合、一方好意



乃至愛なる契機が重要な手懸りとなるのは勿論であるが、他方同時にそれに對して劣らず重要な契機は實に我欲である。建設的な立場に於て、前者が積極的な契機であるに對して、後者は寧ろ消極的な契機である。而もそれだけに又此の後者の真相が一層捉へ難い事となるわけである。それ故普通此の問題を論じたものを見るに、此の我欲契機に對しては何となく上邊から其れに觸れるのみで、其の人間に深く根を下した眞實の姿に徹しない憾みがある。否時としては、却つてそれを掩ひ、その主張、提言の背後に此の我欲的なものが何となく潜み或は閃く事さへある。従つてかゝるものからは、何としても私の心の奥底までも響く力強いものは汲みとり得ない。斯くて結局、私は、何等かより純眞な、より崇高な立場に頼らざるを得ないのである。

適、私はベスタロッチの著作を読むに及んで、私のかゝる人生觀的な切實なる問題に答へて呉れるものを見出し得るに至つた。一體私は、時代の大きく動いた時の思想家なり實踐家なりには、特別大きな關心を有たされるのが常である。と言ふのは、一般に大きな時代の轉換期の先達たちは、異常なる時代的・社會的な惱みの直中にある事によつて、却つてその惱みの底から眞實なるものを語り出してゐるやうに思はれてならないからである。而してベスタロッチこそは正しくかゝる意味での一人の偉大な先達であつた。實に彼ベスタロッチは、革命を経ずしては時代的推移の遂げられぬ程の一大變動期に際會して、社會の惱みの底になやみぬいた、否身を以て時代を生きぬいた實踐家であり思想家である。そしてその著作は讀めば讀む程、研究すれば研究する程、胸に應へる眞實を我々に力強く語り出してくれる。言ふまでもなく、ベスタロッチに於ては終生「人間」が問題であ

つた。而もそれは自己の爲にあらずして、一途に民衆の爲、人類の爲の故であり、その問題たるや最も切實なる問題として採り上げられた。而してその「人間自然」を掘り下げた事の深き、又その人間救済の大願の崇高なる、眞に驚くの外はない。而も茲にこそはじめてよく、下層民に於て眞の人間教育を遂行せんとする、前人未踏の大きな世界を開拓し得たのである。今日世界各国に行き互れる國民教育が、彼の精神と方法とに重大なる支持を仰いでゐる事は、今更述べるまでもない事であるが、今や世界を擧げて深刻なる階級問題乃至民族問題の渦中に入り、而も眞の人間性の確立がその根柢的なものとして希求せられてゐる秋、彼の思想と實踐とは再び新たに見なほさるべき大きな意義をもつものと言はざるを得ない。私は今私の中に自覺めつゝあるささやかなる聲に勵まされながら、民衆教育否人類教育の偉大なる開拓者ベスタロッチの思想に觸れて見たいと思ふ。

## 第一節 近時の研究動向と「探究」

近時一般に教育乃至陶冶理論がその據つて立てる地盤を、より廣く且つより深く求めようとする動向を著しく強く示してゐる事は、今更改めて述べるまでもない事であるが、此の事たるや、今日我々の置かれたる歴史地盤の夙に一大變動を受け來つた事と密接なる關聯に立つものである事も、是亦疑ひを容れぬ所である。而して、斯學一般の斯かる動向は、そのまゝ移して、以て近時のベスタロッチ研究の特徵的な傾向となす事が出来るで



あらう。一體從來のベスタロッチー研究の多くは、彼の教育乃至陶冶論、殊にその所謂「方法」(Methode)を、それ自身獨立したものと考査しようとする傾向を一般に強々示してゐたが、これに對して、近時のベスタロッチー研究に於て著しい事は、「方法」を單にそれ自身としてではなく、却つてその據つて立てる、より廣く且つ深い實踐的乃至思想的背景からして、之が解明をなさうとする企圖と努力とに存するやうに思はれる。もとより斯かる傾向は自らその由つて来る所があるわけであつて、既に早く、ベスタロッチーの教育思想に體系的考察を與へた彼のヴェグゲット (Theodor Wiegert) や或は之に哲學的解明を與へたナトルプ (Paul Natorp) に於て、更にはこれと相前後して現れたるレーザー (Hermann Leser) やホイバウム (Alfred Heubaum) 等の研究に於ても見られる所であるが、併しそれはベスタロッチーの死後百年祭 (一九二七年) を契機として現れた諸研究著作に於て殊に著しい點であると言はねばならない。而して我々はその代表者として、ウェルンツ (Paul Wernle)、デレカート (Friedrich Delekat)、シュタイン (Arthur Stein)、リーデル (Kurt Riedel)、シェーネバウム (Herbert Schönbäum) 等を擧げる事が出来る。勿論此等諸研究家の間には所説上、幾多出入がある事であつて、一概に論ずる事は出来ないが、之を總じて言ひ得る事は、ベスタロッチーの思想・學說を發展史的に見ようとする所に、その共通點が存するといふことである。而もそれは單なる傳記的記述とは大いに異り、歴史的、特に精神的背景との關聯の下に、ベスタロッチー自身の思想界の內面的展開に至大の關心を寄せてゐると言ふべく、此の點特に我々の注意を拂はねばならぬ所である。

ところで、斯の如き傾向と關聯して起り來つたベスタロッチー研究上に於ける重大なる變化は、從來比較的輕視され勝ちであつた彼の前半生の活動並びに思想に特別な注意が拂はれるに至つた事である。一體ベスタロッチーは一七四六年 (一月十二日) に生れ、一八二七年 (二月十七日) に歿し、その間西洋流に數へて八十一歳の長壽を保つたのであるが、この生涯の中で、彼が教育の實踐及び理論に文字通り専心したのは、かのスタンツ滯在 (五十二―三歳) 以後の事であり、従つて從來多くのベスタロッチー研究が、此の後半生に於ける彼の活動及び理論に主要な注意を拂つたのは、又その理の存する所である。そして確かに、彼の前半生と後半生の間には、スタンツ滯在を境にして一つの大きな間隙が存すると言はねばならない。併しながら他面に於て、人間の思想發展をその內面的關聯に於て把握し理解すべき事は是認される限り、こゝに一つの大きな問題が提出されるわけである。即ち境遇・活動等よりしての一見極めて明瞭なる間隙にも拘らず、ベスタロッチーの思想界には、依然として深い內面的なる脈絡・關聯が存するものと見なければならぬのではなからうか。而してかゝる見地にして支持されるとせば、彼の後半生に於ける活動及び理論の成立を可能ならしめたる前半生の活動及び思想的地盤に對して、從來より一層の注意が拂はるべきは又極めて當然な事と言はねばならない。尤もかく言へばとて、それは何等彼の後半生の活動及び理論を輕視せんとするものではなく、却つて反對に、「方法」の據つて立つ基盤構造を明かにする事によつて、眞正なる「方法」理解に到達せんとするものに他ならない。そしてかゝる意味に於て筆者も亦、以上見來つた如き研究態度に共鳴を感じるものであるが、而も我々は、かゝる試みの可能性と妥當性と



を「ゲルトロルド子女教育法」(M. III, 123—128, 261—266)<sup>(1)</sup>及び「白鳥の歌」(M. IV, 309—353)の中に見えたる、ペスタロッチー自身の告白から確信する事が出来る。

以上見來つた如きペスタロッチーの生涯に對する觀點の移動は、必然に又、ペスタロッチーの諸著作に對する關心に變化を將來してゐるのであるが、斯かる事情の下に於て近時著しく注意されるに至つた著作の一として、我々は「人類の發展に於ける自然の進行に就ての我が探究」(Meine Nachforschungen über den Gang der

Natur in der Entwicklung des Menschengeschlechts.)を擧げる事が出来る。言ふまでもなく、此の著作はペスタロッチーのスタンツ滯在の前年(一七九七年、五十一歳)に發表されたものであつて、文字通り彼の前半生の最後の到達點を示すものと言ひ得られるのであるが、それは既にペスタロッチー自身「ゲルトロルド子女教育法」(M. III, 128 f.)の中で自ら述べてゐる如く、非常なる苦心作なるに拘らず、その發表當時世間の反響は兩かく著しいものではなかつたものである。のみならず、それは彼の歿後もなほ長い間十分なる注意を拂はれる事となかつたものであるが、その後漸次これに對する關心と研究とが高まるにつれて、此の著作のもつ正當な意味が次第に明らかにされるに至つたものである。此等の點に就ては、我々はかのザイファルトのペスタロッチー全集中に收められた「探究」の解題(S. VII, 373—384)<sup>(2)</sup>によつて、稍、詳細にその間の事情を知り得るのであるが、今は立ち入つて關説する事は差控へる事とする。

一體此の著作は後に關説される機會もある如く、フランス革命からやがてスキス革命前夜へといふ政治的喧騒

渦中に出來たものであるだけに、全體を通じて政治的關心が極めて強く現れて居り、従つて直接に教育乃至陶冶論に向けられたものと言ふ事は出来ないが、併しそれは一往の所見であつて、之を再往の見地に於て考察する時は、彼の教育説の據つて立つ重要な思想的地盤をなすものである事は極めて明瞭であり、此の點今日最早疑ふ餘地がない。敢て本稿に於て、此の著作に對する考察を中心問題として取り上げた所以である。たゞこゝで問題となるのは、果して此の著作を如何なる觀點から、又如何様に考察するかと言ふ事であるが、此の點に關しては、私は先づ全般として、徹頭徹尾ペスタロッチー自身の考へ方に即して全體の考察を進めて行きたいと考へてゐる。そして茲に特に豫め指摘して置かなければならぬのは次の三點である。其の一は、此の著作の理解がそれ自身單獨に遂行される事の極めて困難な事情に鑑みて、之に先行する「夕暮」以下の二、三の重要關係著作に豫め關説して、以て本著作の考察に及ぶと云ふ順序と手續とを執る事にしたい點である。而もその際、私は此の著作に對する論著が未だ一、二を數ふるに過ぎない我が國教育界の事情を顧慮して、成るべく「探究」全體の體裁と姿趣をも同時に窺ふやうに工夫したいと考へてゐる。而してその二としては、既に此の著作の表題中に見える「自然の進行」(Gang der Natur)といふ文字の暗示してゐる如く、此の著作が彼の「自然」に對して極めて重要な構造を與へてゐるものである事實に着目して、「自然」の問題を中心に全體の考察を進めて行く考である。固より此の著作を以てペスタロッチーの「自然」の全相を盡したものであると即斷する事は許されないが、併しそれが「自然」の最も中心的な問題を而も異常な徹底さを以て展開したものであることは動かし得ざる事實であ



る。是れ筆者の、此の著作に依據して、以てベスタロッチーに於ける「自然」を考察せんとする所以の存するところである。而も斯くの如く彼の「自然」問題を追究する事によつて、そこにやがて、彼の「合自然」(Naturgesenheit)の教育乃至陶冶への通路を見出さうとするのが、次に来る第三の課題である。而して前既に闡説せる所謂「方法」の眞義も、恐らくは此の立場からして始めてよくその正しき理解に到達し得るものと確信してゐるわけである。

\* 私の知る範圍では、福島博士の著「ベスタロッチーの根本思想研究」及び同博士の手に成る「探究」の解説的抄譯(玉川學園出版部發行の「ベスタロッチー全集」第四卷所載)が尤づ擧げられる。次に西谷謙堂氏の論文「ベスタロッチーの社會哲學思想と社會教育思想」(三田哲學會編「哲學」第六輯所載)及び篠原陽二氏の論文「生活と教育—ベスタロッチーへの回顧—」(雜誌「哲學研究」第二八一號所載)が、共に「探究」を主として考察したものとして此處に擧げられねばならぬものである。

## 第二節 「自然」の問題性

右の所論に於て明らかな如く、本稿に於ては「自然」問題の考察が中心となるのであるが、私は本論に立ち入るに先立つて「自然」の問題性に就て一應闡説して置きたいと思ふ。言ふまでもなく「自然」問題は極めて由來

の古い問題であり、その始元は恐らく哲學の始元と同じであると言ひ得られるであらう。既にそれは古代ギリシヤ哲學以來の問題であるが、殊に自然の心意生活への轉釋(ヴァインデルバンド)を見たる、彼の新プラトン哲學以降益々その哲學上の重要性を加へ、後には世界の根元としての神と同義語に用ひられる事すら起るのである。従つてその意味内容も必ずしも一義的でなく、極めて多義であるが、我々はその代表的なものを、彼の中世紀に於けるスコトッス・エリウゼナ(Scotus Erigena)の四種の「自然」概念に就て見る事が出来るであらう。即ち彼の分つ所によれば、「自然」は、「(一)創造して、創造される自然」(natura quae creat et non creator)、「(二)「創造せしむる自然」(natura quae creator et creat)」、「(三)「創造されて、創造せしむる自然」(natura quae creator et non creat)」、「(四)「創造もせず、創造されもせぬ自然」(natura quae non creat nec creator)」の四種であるが、これは極めて重要な自然分類であると言はねばならない。而して降つて近世に於ては、かのスピノーザがその「神即自然」(deus sive natura)の立場よりして、「能産自然」(natura naturans)と「所産自然」(natura naturata)の區別をなしてゐるのであるが、これは既に世間周知の事柄である。ましてや十八世紀の所謂自然主義に至つては周く人口に膾炙してゐる所であるわけである。今此等一々に就てその史的由來・變遷を辿る事は、差し當つての課題でもなく、又それは私の力の到底及ぶ所でもない。たゞ、その史的由來が極めて古く且つその意味内容も極めて多義にして、必ずしも今日一般に我々の理解する如き意味内容に盡きるものでないと言ふ事を想起すれば、此の場合我々には事足るであらう。



ところでこれを更に教育上の問題に移して考へて見るに、それは一般に所謂自然の教育と密接に關聯するものであるが、此の場合、此の合、自然の自然を如何に解するかによつて、自らその意味内容に變化が生ずるわけである。そして其の一は、自然を専ら客觀界を組織する自然現象と解し、その自然現象を觀察して得たる法則よりして、教育の方法を導くべきであるとする思想である。所謂客觀的自然主義と呼ばれるものにして、かのラトゲの提唱にかゝり、更にコメニウスによつて組織發展されたものである。而して其の二は、自然を人間主觀の側と解し、此の主觀を本性のままに而も本性に則れる方法によつて教育せんとするものであつて、前者とは正に對蹠的な關係に立つものである。世に主觀的自然主義と呼ばれるものであつて、彼のルッソーからバセドーやベスタロッチを経て發展せしめられたものである。尤もこれは通常の理解にしたがつて、一應問題的に取り上げたに過ぎないのであつて、更に立ち入つて考察する時は自ら問題が新たになるのは論を俟つまでもないことである。

そこで我々は次に當面の問題に論を進めたいと思ふのであるが、順序として先づルッソーに一應關説して置かなければならぬであらう。勿論此の場合に於ても事情は一般の場合に於けると全く同様であつて、一方に「自然」の素性乃至系譜如何、即ちその由來せる史的地盤如何が問題となると共に、他方それと密接なる關聯をもてる所の其の意味内容如何の問題が提起されるのであるが、而も此の問題たるや、從來餘りにも多く論ぜられて居りながら、その十分なる解決のつきかねてゐる難問である。まして自分の如き當時の思想史的背景に對する理解の乏しき者にとつては、これに對して、何等か積極的な提言をなす事は到底不可能なのであるが、此の場合想起さる

べきは一般に廣く認められてゐる、彼の哲學家ヘフディング (Harald Höffding) による「自然」解釋である。即ち彼によれば、所謂文化批評の線に沿うて展開されたるルッソーの「自然」は、一部は神學的、一部は自然的、更に一部は心理學的なる三様の系譜をもち、而もそれに應じて、夫々(一)「神學的的自然概念」(der theologische Naturbegriff)、(二)「自然史的的自然概念」(der naturhistorische Naturbegriff) 及び(三)「心理學的的自然概念」(der psychologische Naturbegriff) なる三種の意義が存するのである。併しこの三者は彼ルッソーにあつては、相互に交錯し、爲にその間著しく明瞭性を缺いてゐるのであるが、此の點は既に一般に指摘されてゐる如くである。今此等自然概念に就て一々説明する必要はないと思ふが、中に就て特に彼の堅持した所のものは最後の心理學的なもの、即ち人間學的なものである。而もそこに於ては事實としての人間よりは、寧ろ規範乃至理想としての人間が問題であつたのである。そして此の點は後カント倫理學に於て一層明確な形に於て繼承發展されたものであり、茲にルッソーの「自然」の理想主義的解釋の根據と由來とが存するわけである。<sup>(1)</sup>

併しながら我々は斯かる見解に對して、近時新たに試みられてゐる別の解釋に注意して見なければならぬ。それは彼のデレカートのベスタロッチ研究に於て見られるものであるが、その中特に茲で問題となるのは、十八世紀の全精神史に對して試みられた史的考察の部分である。一體彼はオットー (Rudolf Otto) 等に結合して、一般的には神學的立場に立つてゐるのであるが、特に當面の問題に關しては、當時のスキスに於ける新教運動、特に敬虔派のそれとの密接な關聯に於てルッソー及びベスタロッチ等を理解せんとする、彼のリッテル (1)



Ritter<sup>(四)</sup>やウェルン<sup>(五)</sup>(P. Wernle)等の研究所説に結合して、その考察を展開してゐるのである。而して彼の見解によれば、當時の思想的中心概念なる「自然」「人間性」(Menschlichkeit oder Menschheit)乃至「内的感情」(innere Gefühl)等一聯の諸概念は之を精神的に考察した場合、いづれも宗教的な系譜と従つて又宗教的な意味とを擔つてゐるのである。即ち彼は當時の「自然」の中に輝ける或るものを以て、かの「自然法」(lex naturae)、「自然の光」(lumen naturale)・或は「内なるイデア」(ideae innatae)の、ロマン主義的神秘主義 (romanische Mystik)を通じての新たな復活と見るのである。ところで「自然」は他面、又逆に人間に於ける卑俗なもの即ち惡契機をも意味する。そしてかゝる意味のものは特にベスタロッチの場合に於て著しく表面に現れて來るのであるが、此れ又前掲のものとは異つた意味に於て、即ち宗教的な否定面に現れ來るものであると言ふ意味に於て、等しく宗教的な根據に基づくものであると言はねばならぬ。それ故デレカイトは、かゝる自然の二重性を區別するに、正負(十一)なる二重の宗教的符號を以てしてゐる。そして前者を「高次の自然」(höhere Natur)・後者を「低次の自然」(niedere Natur)と呼んでゐる。而も彼は此他更に、宗教的な見地からは全然別個なる第三の「自然」をベスタロッチに於て指摘してゐる。即ち經驗主義乃至實證主義に連るものであるが、中に就て、人間に於ける生物的發展の根柢をなすものを以て最も重要なものと彼デレカイトは考へてゐる。以上はデレカイトによる「自然」解釋であるが、彼が宗教的な見地よりして高次の自然と低次の自然とを明確に區別した點、及び宗教的なものとは別個なる經驗的・實證的な自然を第三のものとして指摘した點、

(尤もこれは彼の考へてゐる如きものよりはより複雑なるものではないかと思はれるが)、此の場合我々として注意して置かねばならぬ點である。但し彼がその宗教的見地に於て特に神秘主義を固執する點に對しては幾多異論の存する所であり、その點は却つて前掲のウェルン<sup>(五)</sup>の研究等に、より妥當なものが存すると言ふべきであらう。借てこゝで、我々は右に關説し來つたルッソーとベスタロッチとが果して如何なる思想的關係に立つものであるかを、更に改めて考察して見たいと思ふ。一體此の點に關しては、我々はそこに密接なる關係の存する事を前提として、今までの所論を進めて來たのであるが、實はこの問題も更に立ち入つて見れば、そこに幾多議論の餘地が存するのである。それ故我々はルッソーの思想的地位、特にその教育方面に於ける重要な地位に鑑みて、一應此の問題に關して説明を加へて置く必要があるわけである。ところで此の場合先づ注意さるべきは、兩者の關係を比較的輕視せしめる如き論據となる二點である。その一はベスタロッチ自身のルッソー批判、殊にその晩年に於ける手嚴しき批判 (M. IV, 319-324)であり、他の一は、近時漸くベスタロッチと他の諸思想家との交渉・接觸關係が明らかとなるにつれて、ベスタロッチに對するルッソーの位置に變改が加へられてゐる點である。今此の二點の中、先づ前者に就て見るに、彼ベスタロッチのルッソー思想への接觸は既に早くかの「愛國團員」(Patrioten)當時からのものであり、而もその當初は一種熱狂的とも言ふべき心酔振りを示したものである。だがそれは一時的の事であつて、既に彼が團員の許を離れて農業に志した前後は事情が大いに變り、更に一轉して批判の方向をすら採るに至るのである。そして此の間の事情に就ては、かの「育兒日記」に



於ける自由と服従の問題、或は「立法と嬰兒殺に就て」なる著作に於ける文化問題を介してのルッソー批判 (K. A. IX, 160 ff.) 等、比較的初期のものに於て窺ひ知る事が出来る。而して晩年の「白鳥の歌」に現れたる批判は、斯かる彼のルッソーに對する態度を全面的に表示したものと一應は言ひ得られるであらう。だが我々は此の場合徒らに批判面にのみ拘泥して、兩者の間の内面的なる深き連りを度外視してはならぬ。何故ならば、ルッソーこそ當時の一大警鐘者であるが、而も正に彼ルッソーを通じて始めてベスタロッチーは當時の社會諸般の方面に包藏された問題性及びこれが處理方式を自身に獲得し得るに至つたからである。事實彼の思想展開は「自然」概念及びこれと關聯せるルッソー的なる問題性を中心として遂行されて居り、此の點全く疑ふ餘地がないのである。従つて問題は單なる關係の有無乃至輕重よりは、寧ろ思想内容的に見て、果して兩者が如何様な關係に置かれてゐるかと言ふ事ではなからぬ。そして恐らくは斯かる方面からして、自ら批判の由つて來る根據も明らかになり得るであらう。尤もかゝる點の立ち入つた吟味は本論に於て果さるべきであるが、此の場合我々の想起されるのは、かのカントのルッソー理解とベスタロッチーのそれとが殆んど對蹠的と言つてよい程相違してゐる事實である。一體カントのルッソー思想との接觸はその思想的に安定せる壯年期に於てであるが、而も彼はかかる好條件の下に於て、感情豊かに表示せられたルッソーの「自然」の中に人間の純粹性を觀取し、以て之を理論的に展開してゐるのである。そして此の點は既にヘフディングのルッソー解釋と關聯して述べて置いた如くである。ところがこれに對して、ベスタロッチーのルッソー思想との接觸はなほ思想的に安定を缺ける若年に於て

であり、従つて又そのルッソー理解も屢々指摘されてゐる如く、恐らくは忠實なものとは言ひ得ないであらう。尤も彼と雖もルッソーに於ける純粹なる精神に對して盲目ではなかつたのであるが、併し「自然」の故に社會乃至文化の積極的な位置づけの缺如せる點により一層不滿を感じたのである。そして此の弱點の克服に向つて謂はば實踐の側から展開したのが正に彼の立場である。勿論そこには新たな問題面としての低次の自然 (デレカイト) をめぐつて、幾多の否定面、殊に重大なる思想方式の轉釋が結果してゐるのであるが——實はこゝに彼のルッソー批判の根據が存するわけである——、併しこれをその肯定面に就て見れば、「彼こそ正にルッソー思想の偉大な完成者であると言はねばならぬであらう。」従つて時代の提題者ルッソーは、前者カントに於てその理論的解明者を、而して後者ベスタロッチーに於てその實踐的解答者を見出したものと言ひ得られるであらう。而も斯く見來る時、我々は彼ベスタロッチーに於けるルッソーの先蹤的意義の重大さを見のがし得ないのである。たゞ併し、茲に我々は、最初に擧げた第二の點、即ちベスタロッチーと當時の諸思想家との接觸・交渉關係の問題に就て一言して置かなければならない。尤も今その一々に就て立入つて論ずる事は出來ないが、一般にかゝる方面の諸研究が我々に教ふる事は、ベスタロッチーの思想形成を從來よりもより一層多面的に把握せねばならぬといふ事であつて、それは何等ベスタロッチーに對するルッソーの先蹤的意義の重大性を認める事と矛盾するものではない。そして又かゝる意味に於ては、我々としても出來得る限り斯かる方面への注意をも怠らずに全體の考察を進めなければならぬわけである。<sup>十二</sup>



以上我々は「自然」の問題性を辿りながら、最後にルッソーとベスタロッチーの關係に説き及んだのであるが、こゝで我々は再び問題全體を振り返つて見なければならぬ。そこで先づ今までの所論を通じて我々の知り得た事は、問題の「自然」が今日我々の一般に考へてゐる如き、單に物的なる外界自然或は單に直接的なる感性的自然に盡くするものではなくして、却つて高次の自然がそこに意味されてゐると言ふことである。尤も斯かる高次の自然が果して如何なる内實ととして又如何なる根據とを有するものであるかは、後漸次解明さるべき問題であつて豫め盡すことは出来ないが、併しその如何に拘らず、我々の茲に斷定し得る事は、此等複雑多様な「自然」の問題面が何等か我々「人間」とかけ離れたものとして展開されてゐると言ふ事である。「人間自然」が問題の中心に置かれる所以である。一體かの「エミール」劈頭に掲げられたる、「凡ては造物主の手を出る時善であるが、人間の手に移されると凡て悪くなる。」と言ふ命題程矛盾に満ちたものはないと思ふが、而も正にかゝる矛盾を負へる「人間自然」(la nature de l'homme ou la nature humaine)こそが彼ルッソーに於ける中心問題であつたのである。そして又此れと同様の事はベスタロッチーに就ても言ひ得るのであつて、一面感性的・經驗的なるものに連りながら他面同時に神に接する、「探究」に所謂「中間者」(Mittelglied—S. VII, 485. Kr. A. XII, 127.)としての「人間自然」(die menschliche Natur oder die Menschennatur)こそが、實に彼の終生の問題であつたのである。従つて此れを彼のエリウゲナの所説に移して考へるならば、正に第二の創造されつゝ、創造する

「自然」がその問題の中心であつたと言ふべきである。尤もかく言へばとて、それは何等、一切の根據を人間に求めんとする極端なる人間中心主義を意味するものでない事は、改めて述べるまでもなく明らかな事であるが、一應附説して置く必要があるであらう。

さてこゝで我々は問題を更に一步前進せしめたいと思ふのであるが、既に右に見來つた如く「人間自然」が問題である以上、それは當然、在り且つ在るべき人間存在を開示するものでなければならぬ筈である。而も此の事が言はれる以上、人間の存在が單なる存在に非ずして、却つて複雑且つ多面的なる歴史的・社會的媒介構造をもてる存在なるが故に、此處で問題の「自然」も亦當然、何等かの意味に於て—それは必ずしも肯定面に就てのみでなく、否定面に就ても言ひ得る事であるが—歴史的・社會的に媒介されたる、即ち媒介構造をもてる「自然」でなければならぬ筈である。かくて我々は普通最も非社會的・非歴史的と考へられる「自然」の問題が、一見逆説の如くではあるが、實は却つて社會に、そして歴史に、廣く且つ深き接觸面を有する所以を理解する事が出来るわけである。そして又かかる見地に立つ時はじめて、我々ルッソーが自然人 (l'homme naturel) と社會人 (l'homme civil) とを、或は又自然秩序 (l'ordre naturel) と社會秩序 (l'ordre social) とを對比する事によつて、そこに我々人間の在り且つ在るべき「自然の進行」(la marche de la nature) を新たに見出さんとせる眞意を、而して又ベスタロッチーが眞實なる人間存在を「自然の進行」(der Gang der Natur) を通じて探究したる深大なる意義を、一層明らかに理解する事が出来るものと言ふべきであらう。而も亦同時に、我々はかゝる



線を辿る事によつて、極めて容易且つ明瞭に、此の兩者の間に於ける思想的なる展開面及びその出入異同を知る事が出来るであらう。従つて問題の所在は、普通考へられる如く、單に「自然」そのものにあると言はんよりは寧ろその存在構造を媒介的に示せる「自然の進行」にあると言はねばならぬであらう。少くとも我々は斯かる見地からして、より一層新たな光を「自然」問題に投げかけることが出来ると確信するものである。敢て特に私の注意を拂はんとする所以である。

而も斯様に考へて來ると、問題の「自然」は今日の我々に縁遠い問題でないのみでなく、却つて、人間存在に著しい關心の向けられてゐる今日に於てこそ、正に再び顧みらるべき中心問題であると言はねばならない。事實「自然」の問題は之を今日の語感と内實とを以てするならば、それは疑ひもなく社會哲學、文化哲學乃至歴史哲學の問題なのである。今日我々が歴史的、自然なる言葉を耳にするのも、思へば又故ある事である。たゞ併しかく言へばとて、それは何等か歴史と共に消へ去りそれ自身永遠の價値なき「自然」を問題とするのではなく、却つて歴史の中に動き而も歴史を越える「自然」を問題とするものである事は、敢て多言を要するまでもないであらう。

上に説き來つた所によつて知り得られる如く、「自然」概念は我々の考察に於て決定的に重要なものであるが、殊に當面のペスタロッチーに於て、それはかのカントに於ける「理性」、或はフイヒテに於ける「自我」更に或はヘーゲルに於ける絕對的精神の如く、正しくその思想展開の中心概念であるわけである。それで私は以下の考察に於て、此の「自然」を徹底的

に當時の内實と語感とに従つて活用するやうに注意したいと考へてゐる。従つて譯語の如きも「自然」(Natur)なる言葉で前後一貫したいと考へてゐる。恐らく場合によつては、此の譯語では語感上不適當な事も起るかと思はれるのであるが、主題を徹底せしめる意味に於て是非ともこれを遂行したいと思つてゐる。而も此の事は、此の言葉が原語にもせよ、又國語にもせよ、今日なほ低調ながら當時の語感と内實とに通ずるものを蔽してゐる事を思へば、必ずしも無理な事ではないであらう。一言斷つて置く次第である。

註

(I) J. H. Pestalozzis Ausgewählte Schriften (4 Bde.) herausgeg. von Fr. Mann, 5. Aufl. 1926.

(Abkürzung: M. mit Nummer der Bandes)

尙本文中に引用した著書 (Wie Gertrud ihre Kinder lehrt) は普通「ゲルトロートは如何にしてその子を教ふるか」と譯されてゐるが、乙竹博士による「ゲルトロート児童教育法」或は篠原陽二氏による「ゲルトロート子女教育法」等の譯名の方がより適切であると考へて、それに従つた。

(II) Pestalozzis sämtliche Werke (12 Bde.) ed. L. W. Seyffarth, 1899 bis 1902.

(Abkürzung: S. mit Nummer des Bandes)

(III) H. Höfding: Rousseau und seine Philosophie, 4. Aufl. 1923. S. 104 ff.

(IV) E. Ritter: La famille et la jeunesse de Jean Jacques Rousseau, 1896.

(V) P. Wernle: Der Schweizerische Protestantismus im 18. Jahrhundert, 1923.  
derselbe: Pestalozzi und die Religion, 1927.



- (六) Fr. Delekat: Johann Heinrich Pestalozzi, 2. Aufl, 1928. Erstes Kapitel.  
 (七) ditto S. 101—107.  
 (八) K. Riedel: Pestalozzi's Bildungslehre in ihrer Entwicklung, 1928. S. 101 f.  
 (九) Pestalozzi Sämtliche Werke (im Erscheinen begriffen), ed. Artur Buchenau, Eduard Spranger, Hans Set-  
 tbacher, 1927. (Abkürzung: Kr. A. mit Nummer des Bandes.)  
 (十) H. Höfding: a. a. O. S. 151 f.  
 Fr. Delekat: a. a. O. S. 101—119.  
 A. Stein: Pestalozzi und die Kantische Philosophie, 1927. S. 26—52.  
 H. Schönebaum: Der junge Pestalozzi, 1927. S. 130—136.  
 K. Riedel: a. a. O. S. 4—6, 12 f., 16 ff.  
 (十一) ペスタロッチーと諸思想家の接觸・交渉關係に就て特に多面的且つ包括的に取扱つてあるものとして、我々は「  
 エーネキウムの研究を擧げる事が出来る」  
 H. Schönebaum: a. a. O.  
 derselbe: Pestalozzi, Kampf und Klärung (1782—1797), 1931.  
 derselbe: Pestalozzi-Kennen, Können, Wollen (1797—1809), 1937.

## 第二章 「夕暮」と「探究」の兩極構造

既に前述の主題の中に於て、私は「探究」がそれ自身單獨に理解する事の極めて困難な著作である事を指摘して置いたが、それは此の著作が全體として極めて大きな構想のものである上に、その背後に、長期に亙る成立過程と複雑多面なる試煉の過程とを包蔵してゐる點に由るものと言はねばならない。一體ペスタロッチーはその思想を新たに展開する場合、先づ以て豫め到達されたる發展過程を繰返し、而してこれを新たに省察する事によつて次の高められたる立場に到達するといふ、謂はば螺旋( Wendeltreppe )を昇り行くにも比せらるべき進み方をなすのが常であるが、而も正に、かかる彼の獨特なる思考方式の偉大なる結晶こそが此の「探究」に他ならないのである。従つて我々が此の「探究」を理解せんとする場合、是非とも之れに先行する彼の思想展開に深き注意を拂はねばならぬ必要が起るわけである。而もそれは又、他面同時に此の著作を以て彼の教育乃至陶冶論、殊にその「方法」の據つて立つ重要な思想的地盤となさんとする我々の基本的立場よりしても亦、不可缺なる考察面として要求せられるものである。かくて我々は二重の意味に於て、此の著作に先行する彼の思想展開に對して豫め我々の考察を加へて置かねばならぬわけである。尤もかかる點の考察を、その生活體驗とその思想形成過程の



線に沿うて全面的に遂行する事は、それ自身一つの大きな仕事であり、それはやがて又我々の企圖を越えるものでもあらう。従つて我々は斯かる考察態度と方向をとるとはいへ、これをより一層我々に必要な限度と可能な範囲内に限定せねばならぬわけである。かゝる意味に於て、私は以下主として「隠者の夕暮」、小説（「リオンハルト」）及び「然りや否や？」（フランス革命の原因に就て）等の著作を手懸りとして、「探究」の解明と言ふ我々の中心課題に必要な考察を、先づ以て試みて置きたいと思ふ。

### 第一節 生涯の問題——民衆

上述の見地に於て我々に先づ第一に重要な考察の手懸りを與へるものは、かのノイホーフの第二の危機の後をうけて成立したる「隠者の夕暮」（一七八〇年、三十四歳）である。實に此の著作の成立こそベスタロッチーの生涯にとつて、將た又彼の思想發展にとつて、最初にして而も決定的なる意味をもつものであり、それは文字通り劃期的な事實に屬する。と言ふのは正に此の期に於て、彼は漸く時代社會の中心問題に彼自身の立場からまともに突き當るを得たからである。

我々は今此の點に就て明かにしたいと思ふのであるが、茲で問題となるのは、彼の若き時代が文字通り幾變轉の經過を辿つてゐるといふ事である。今此等の詳細に互つて述べることは差控へるが、之を項目的に列舉して見

ても先づ第一に學業半ばにして投じたる彼の青年運動としての愛國團に於ける活動、及びその間に於ける牧師志望の抛擲と法律研究への熱中とを擧げる事が出来る。而して我々は更に、該團體の解散に直面しての、彼の農業生活への轉身に就て知る所があるのである。言ふまでもなく、それはかのチッフェリー (Johann Rudolf Tschiffeli) の教導を通じて所謂ノイホーフの新生活へと展開するものであるが、而もその失敗に遭遇するや、彼は再轉して貧民教育を始め且つ一切を捧げて之に没頭するのである。而して此の前後、彼が當時スイスの各地に勃興しつつあつた紡績業に手を染めた事も、之又一般に知られてゐる事實である。ところで、この貧民教育も亦失敗に歸するや、彼は更に轉じて、かのイゼリン (Isak Iselin) の濫き教導を通じて著作生活へと更生するのである。思へば奇しき幾變轉ではある。而も我々はその餘りにも激しき變轉の故に、そこに前後脈絡ある一貫したものを觀取することは殆んど望み得べくもないやうにすら感ずる。事實又當時ベスタロッチーを繞れる人々、或は彼と交渉をもてる人々の間に於てすら、彼の行動は主義の抛擲乃至改變、否時としては無軌道的にすら感ぜられたのである。然しながら、我々は此の極めて斷續的な一聯の展開に於て、そこになほ何等かの相互關聯を見出さねばならぬ。勿論そこには、彼自身の健康問題、畏友ブルンチュリー (Johann Kaspar Bluntschli) の死、自己の職業選擇問題、重農主義との接觸、或は事業遂行上の思はざる障碍等、幾多の轉換契機が存したのは事實である。のみならず、これを其の問題面に就て見ても、或は社會乃至政治問題、或は經濟問題、或は宗教問題、更に或は教育問題と云ふやうに極めて多方面であつた。従つて事態は爾かく單純に解する事をゆるさぬのである。



が、此の場合、我々は之をより内面的な問題に翻して見る事が必要であると思ふ。即ち我々は更に、ベスタロッチ自身の内面的展開の問題に立ち入つて考察して見なければならぬ。而も我々は、その重要な手懸りをベスタロッチ自身語る所に求める事が出来る。即ち彼の眞意が果して那邊に存したかを彼自身の口から幾多聞きとり得るのである。先づ彼は「白鳥の歌」の中で、彼が既に早く年少の頃から特に農民達に關心を寄せてゐた點に説き及んで「私には田舎の人々 (Landvolk) が好ましいものであつた。」(M. IV, 313) と述懐してゐるが、かかる關心は、かの愛國團員當時の小論なる「願望」(Wünsche) の中からも讀み取る事が出来る。即ち彼はそこで「下層の市民又は農民の爲」の平易な教育綱領を要望してゐる (Kr. A. I, 23)。而して彼が當時團員として法律研究に熱中したのも、晩年の述懐によれば、結局それは一つの夢に終つたとはいへ、なほ「民衆に對する、より大きな幸福に満てる活動領域への努力」(M. IV, 322) に他ならなかつた。而も斯かる事情は、一見極めて大膽なる轉身と考へられる、かの農業生活の際に於ても亦觀取出來る所である。即ち彼はすでにチップフェリーの許に於て、「自己の職業の道德的期待」を益々強く感じたのであるが、而もノイホーフに於て彼が絶えず強調した事も亦、道德的意圖と祖國への愛とが彼の現在の職業から全く離れてしまはぬやうにといふ事であつた。我々はそこに果して如何なる意圖が存したかを容易に推察する事が出来る。而して彼がかの貧民教育を始めた時の意圖と固き決心に關しては、晩年の「白鳥の歌」の中に、「私の妻はかかる状態の下に深く悩んだ。併しかゝる事情にも拘らず、我々の時間と精力とをそして残れる財産とを、民衆教育及びその家庭的陶冶の單純化に捧げようとする決心

は、私にあつても又妻にあつても微動だにしなかつた。」(M. IV, 327) と洩されてゐる如くである。

以上我々の考察し來つた所を通じて我々の斷定し得る事は、外面的には極めて起伏に富める幾變轉に拘らず、これをベスタロッチ自身の内面的に考察する時、そこに自ら底を貫いて流れる或るものを感知し得るといふ事である。それが果して何であるかは、既にほゞ明かな事ではあるが、これに就ても亦ベスタロッチ自身、後年偽らざる告白をなしてゐる。曰く、「我が若き日の宗教的昂揚が、出來るだけ民衆の幸福に働きかけようとする感覺的性向と、殆んど切り離し得ぬ程に我が裡にしっかりと結ばれて居り、而も自らそれを意識し又豫感する事なく、謂はばそれと合致した。」(Der Kranke Pestalozzi an das gesunde Publikum. — S. X, 613) と、洵に斯くの如き、一途に民衆に向はんとする、謂はば「不可抗的な性向」(unwiderstehliche Neigung — S. X, 611) こそが、すでに早くより彼の心の奥底に脈々として流れてゐたのである。而もそれは何等かの形に於て外部に向つて現れんとし、殆んど無意識的にはあるが、それだけ却つて根柢的な力としてベスタロッチを動かして行つた。それ故彼の若き時代に於ける幾變轉も、これをベスタロッチの側から内面的に考察する時は、それは正にかゝる未だ眼開かざる内なる「感覺的性向」に促されての、謂はば一つの腕きであつたと見るべきである。而も彼は正にその破滅の底に於て終に突當るべきものに突當つた。彼の眼は今や直接「民衆」の上に開かれたのである。彼は民衆の上に眞の人間性を、而してその實現の道を人間陶冶の上に見たのである。而もこれが宗教的根柢に關してはキリスト教の本質と眞の人間性との一致をその信條としたのである。實に「隠者の夕暮」



こそは、彼が時代の問題を眞に彼自身の立場から身近く感じ取り、而もそれに對して彼の獨自な精神を開いた一つの記念塔である。

茲で我々はベスタロッチの立場をルッソーのそれと對比して見る事が出来る。即ちルッソーに於ては民衆よりは寧ろ上層社會、特に都市生活者がより多くの考察面に現れてくるが、それに對して、ベスタロッチの場合は、文字通り下層の民衆、特に田舎の人々がその眼中に深く把持されてゐる。而も彼のかゝる下層民及びその子弟に對する特別な關心は、彼の生涯を貫いて終始變らなかつた所である。此の點に於て彼は確かにキリスト教的な傳統に立つものと言ひ得られるであらう。而してベスタロッチに於ける「民衆」(Volk)教育の思想が、後フイヒテを通じて「國民」(Nation)教育といふ極めて重大なる思想へと繼承・擴充された事は周知に知られた事實である。尤も此の間の事情を詳にする爲には我々はベスタロッチの教育小説「リーンハルトとゲルトロード」以下の諸著作とフイヒテの「獨逸國民に告ぐ」なる大講演との間の深き内的關聯及びその間の異同に論及せねばならず、又そこには今日の立場から吟味するべき重要問題が存すると考へられるが、今はそれらの點に立ち入る事は差控へねばならない。ただ併しここに一言して置きたい事は、此等先人によつて開拓せられたる教育分野の益々重大なる所以が、今日我々の置かれたる歴史的現實に即して何よりも雄辯に立證されつつあるといふ事である。而も正にそこに、今日再びベスタロッチ的な視野と同時にその精神の新たに見直さるべき根據が存するわけでもある。敢て一言する所以である。

## 第二節 「夕暮」を貫く思想

我々は、直接民衆の上に展開かれたるベスタロッチが、果して我々人間の世界を謂はば下から如何に見たかを、直接「夕暮」の思想に立ち入つて見なければならぬ。但し此の場合に於ても亦、我々は「探究」解明といふ我々の中心課題に關係する範圍内に問題を限定せねばならぬわけである。私は以下先づ「夕暮」を貫く根本動機を明らかにし、而して後更に之との關聯に於て、「人間自然」(die Menschennatur)、「自然の進路」(die Bahn der Natur)及び「個人的地位」(die Individuallage)等重要概念の意味内容に説き及びたいと思ふ。

先づ「夕暮」劈頭に掲げられたる提題は、彼が如何にその深き體驗の立場から人間問題に立ち向つてゐるかを示すものとして、我々の注意をひく。曰く、

「人間、玉座の上にあつても草屋根の蔭にあつても互に同じ如き人間、この人間とはその本質に於てそも何ぞ。」(「一マンのベスタロッチ選集に據る」)

と。これこそ實に「夕暮」の中心問題であると共に、又後年の「探究」劈頭に掲げられた問題でもあり、それはやがてベスタロッチの全生涯を貫く主題なのである。そして是れ彼に於ける「自然」問題が「人間自然」の



それを中心とする所以である。而も正にかゝる人間の故に惱める彼の性向に奥深く根ざしたる愛の眼は、終に此の解き難き謎を解き破つて、そこに親心と子心の照徹する世界を見出したのである。

「神の親心、人の子心。」

君の親心、民の子心。

すべての淨福の源泉。」

實に「夕暮」を貫く全精神であり、「人間自然」を繞る一切の問題は擧げてこゝに其の照明の光を得るのである。眞にベスタロッチー的なる精神の躍如たるものと言はねばならない。而もかく新たな意味に復活されたる、父なる神への信仰の中にこそ、彼の獨自なる宗教的立場が存するわけでもある。言ふまでもなくそれは福音書の地盤に立つものではあるが、併し我々はそこになほ、一面啓蒙的なる時代社會に抗して、而して他面ドグマ本位の傳統的宗教を越えて、イエスの教に直參したる彼の眞面目に接する事が出来るのである。事實彼は斯かる領解からして、一切の人間がそのあらゆる差別相に拘らず、その本質に於て同一であり且つあるべき事を道破し——この點に實はキリスト教主義と眞の人間性の一致を信條とせる彼の獨自な立場と同時にその現代的意義が存する、尤もそこには啓示宗教の深所に到り得ぬといふ憾みは存するであらうが——而もその實現の道の唯一なるべき事を確信したのである。曰く、

「すべての人類はその本質に於て互に同じであり、而もこれを充すに唯一の進路を有するのみである。」(三三八)

と。謂ふ所の同一とは固より單なる所與ではなく、却つて父なる神の似姿にまで使命づけられてゐるといふ意味に於ての、洵、神の名賭けての同一であり、従つてそこには、底知れぬ深さと偉大さとを湛へたる動機が潜んでゐるのである。由來ベスタロッチー研究家の多くが、「夕暮」に依據して、以て彼の教育乃至陶冶思想の根柢に、人道の理念を讀みとつてゐるのも、思へば洵に故ある事である。而も又實はかゝる親心と子心の照徹する所に、彼ベスタロッチーに於て、教育の正にあるべき原型が開示されてゐるわけでもある。

ところで此の場合改めて特に指摘して置きたい事は、既に明らかな事ではあるが、こゝで教育殊に「人間陶冶」(Menschenbildung)の見地が、根本動機として力強く全體の思想を支配し、且つ特色づけてゐるといふ事である。勿論かゝる見地が直前の貧民教育の體驗に深く連なるものである事は容易に理解される所であるが、ここに又、我々は人間特に民衆救済の道を探し求めたる彼の窮極の立場が存する事を知らねばならぬ。洵に、

「世界の幸福は陶冶されたる人間性 (gebildete Menschlichkeit) に存する。」(五三)

とは、苦難なる體驗によつて贖はれたる彼の最後の立場であり又確信である。さて然らば我々人間は一體如何なる意味に於て陶冶されてあらねばならぬのであるか。これに對してベスタロッチーは述べてゐる。

「人間自然のかゝる内なる諸の力を、純粹なる人間睿智にまで一般的に高め陶冶する事が、最も低い人間に於ても亦陶冶の一般目的である。」(四七)

と。そして又こゝに、彼が「職業陶冶及び階層陶冶」(四七)を人間陶冶の一般目的に従屬せしめる根據が存



する。今その點深く立ち入る事は避けるが、一般に彼が「眞理」或は「叡智」なる言葉を以て表示せんとしてゐる人間陶冶の境地を、我々はより一層ベスタロッチー的なる表現を以て、極めて平易に安らかなる生活の味得と解する事が出来る。洵に彼の信條なる。

「人間は内なる安らかさ (innere Ruhe) にまで陶冶されねばならぬ。」(六七)

といふ命題こそは、かの「人間は内なる安らかさをたねばならぬ。」(Kr. A. I. 247)といふ「夕暮」草稿の冒頭の句と正に相呼應して、彼の獨自にして而も最後の境地を表示したものと云ふべきであらう。但し茲で我々の注意して置かねばならぬ事は、かゝる「内なる安らかさ」が單に直接的なものではなく、却つて何等かの媒介構造をもつものであるといふ事である。我々はその點、次の諸考察(人間自然、自然の進路、個人的地位等)を通じて明らかにしたいと思ふが、それはやがて前引用の「唯一の進路」の意味内容と構造をも解明する結果となるであらう。

先に私は「人間自然」を以て「夕暮」に於ける中心問題であると指摘して置いたのであるが、我々はこれを何等か皮相的に而も一面的にのみ理解してはならない。却つてそのあるがまゝの具體相に即して、より根元的且つ多面的に之を理解する用意がなければならぬ。といふのは、茲に「人間自然」とは單にそれ自身孤立的に存するものではなく、却つて正しく何等かの生活環境乃至世界に於て在るものであるからである。事實「夕暮」に於

ける「自然」は必ずしもその明確なる限界をもたず、却つて果なき廣さと深さに於て鼓動し、波打ち、而もその直中に「人間自然」の具體的な姿相が表示されてゐるのである。ところで、かゝる「人間自然」は二つの異つた通路を自身にもつものであるが、言ふまでもなく、その一は内から開け、他の一は外から開けるものである。而して此の點ベスタロッチーは諸所に「自然の内奥」なる言葉を繰返し、以て内から開ける道を先づ以て力強く指示してゐる。曰く、

「我が自然の内奥に (im Innern meiner Natur) 斯かる眞理への啓示が存する。」(三七)

と。或は、

「人間よ、汝の自然の最も奥底に (im Innersten deiner Natur) 眞理と無垢と單純とを、信仰と崇敬もて聽くところのものが存する。」(九八)

と。これこそ正しく内からの立場であるが、而もそれは其儘、かの

「神は人類の最も近き關係である。」(七三)

との自覺に接するものである。だが斯く謂はゞ成層的に無限に深まり行く此の道も、單にそれ自身に於て完結的なものではなく、却つてその深まり行く都度、かの外から開け来る何等かの生活環境乃至世界を既にその内に介し、且つ含んでゐるのである。そして彼の「現實關係」(Realverbindungen oder Realverhältnisse)、「現實對象」(Realgegenstände)乃至それに準じたる用語を以て表示されたるものこそ、かゝる構造契機に外ならな



い。而も又我々人間は、かゝる何等か多面的な環境乃至世界との根底的なる結合・關聯を通じてのみ、よく自己自身を具體的なる現實面に實現する事を得るものであり、そこに又眞の充實感と眞實感とに徹し得るのである。

\* ナトルブがかゝる「自然の内奥」を以て、人間に「固有なる内的構力」(eigene innere Schöpferkraft)の意味に於ける「人間の固有な自然」(die eigene Natur des Menschen)と解した事は (Reins enzyklopädisches Handbuch der Pädagogik, Band VI, 669) 一般に知られてゐる事柄であるが、併しそれは新カント派の先驗主義を適用せるものであつて必ずしも正當でないとの多くの異論を蒙つてゐる所のものである。尤もナトルブのベスタロッチー理解の最後の立場を知る爲には、我々は彼の理想主義の重大な轉換(一九一二年の「一般的心理學」を以て劃される)後の述作なる「ベスタロッチーの理想主義」(Der Idealismus Pestalozzis, 1919)を十分検討して見ねばならぬわけであつて、輕々にこれを論評する事は避けねばならぬが、當面の問題に關する限り、彼の認識論的立場を以てしては汲み盡し得ない豊かな生活環境乃至世界が、その「自然」の中には同時に意味されたと言はねばならぬであらう。そしてかかる點に就ては、我々は幾多諸家の研究・所説を参照する事が出来る。

尙右と關聯して述べて置かねばならぬ事は、彼ベスタロッチーが當時の二つの思想的背景——「啓蒙」と「疾風怒濤」——に對して、前者の悟性的反省に與せずして却つて後者の直接的なるものへの意志に與してゐるといふ事である。この事は「夕暮」理解上決定的に重要な事であるが、我々は敍上の引用箇所にも十分その間の事情を知る事が出来る。

さてベスタロッチーが「夕暮」の中で諸所に繰返してゐる「自然の進路」(Bahn der Natur)とは、「人間自

然」の眞實なるものに徹しゆく前述の如き道程を表示したものと考へられるが、それはやがて又後「探究」に於て考察さるべき「自然の進行」(Gang der Natur)に連なる問題として、我々の注意をひくものでもある。ところで我々は果してそれが如何なる構造をもつものであるかを、ベスタロッチー自身の語る所より聞きとらねばならぬ。曰く、

「人間がその地位にあつて、よりに以て惠福せられる知識の圏は狭くして、且つこの圏は彼の周圍近くから彼の本質から、彼の最も近い關係から始まり、其處から擴がつてゆくものであり、而もその擴がる都度眞理の一切の惠福たる此の中心點に依據せねばならぬものである。」(一一一)

と。或は、  
「純粹の眞理感に於て形成され、而して純粹なる人間睿智は、その最も近い關係の知識と、その最も近い事柄を處理する鍊られたる力との堅實なる根柢に基くものである。」(一一二)

と。我々はそこに廣く且つ深い意味に於ての生活圏の思想が、集中的に交錯せる存在圏の形態に於て現れてゐるのを見る。ナトルブの指摘する所に從へば、それは一種の螺旋的なる圓環運動に他ならない。かくて全體の意味は謂はば立體的に而も構造的に具現・展開されてゆくのである。此の點ベスタロッチー自身も亦述べてゐる。

「かゝる人間睿智は、その現實的諸關係の中に緊密に立てる事物の自然的地位の力全體から形成される。」(一一三)。而も、「力と感情と確實なる適用とが、その表現である。」(一一四)



と。これこそ實に「人間自然」のあり且つあるべき眞實の姿であり、先に關説したる「内なる安かき」も正しくかゝる媒介面に於て感得される境地に外ならない。

右に於て私は「自然の進路」を以て、人間陶冶の全體の意味が一步々具體的なる現實面に於て實現されゆく道程を示すものと解し且つその凡その構造に關説して置いたが、實は茲にペスタロッチーの思想展開上に極めて重要な意味をもつ「個人的地位」(Individualität)なる概念の眞義を解くべき鍵が存する。言ふまでもなくそれは個人の素質・能力をはじめ、特にその置かれたる特殊の地位・境遇を重視する思想であるが、併しそれは單にそれ自身として重要な意味をもつものと言はんよりは、却つて、上に考察し來つた「自然の進路」の開く構造に即したもとして、其の最も重大な意義を發揮するものと言はねばならない。と言ふのは、茲に「自然の進路」とは既に明らかなく、一種の螺旋的なる圓環運動を通じての世界構成に他ならぬのであるが、而もその構成たるや、正に當該行爲主體の據つて立てる特定の立場に即せずしては不可能であるからである。洵に「個人的地位」こそ、自己展開の眞の足場である。故にペスタロッチーも力強く述べてゐる。

「生活の立脚點、人間の個人的分、汝こそは自然の書籍である。汝の中にこそ、かゝる賢き指導者の力と秩序とが存する。」(110)

と。飽迄も自己の置かれたる特殊の立場に立脚し、而も正にその立場からして一般を具現せんとする行方である。かの貧民教育に於ける「貧しい者は貧しいやうに教育されねばならぬ。」(S. III, 247)と云ふ、往々誤解さ

れ勝ちな彼の根本信條も、正しく斯かる見地に於てはじめて、その正當にして而も積極的なる意義をもち得るものと言ふべきであらう。

次に尙我々は右の所説と關聯して、彼に於ける「近接」(Nähe)思想をも亦理解する事が出來ると思ふ。既に前の引用文にも見られる如く、ペスタロッチーは諸所に近き關係なる表現を用ひてゐるのであるが、それは何等か單獨且つ固定的に理解さるべきではなく、却つて、「個人的地位」に即して展開される「自然の進路」の構造内に於て、行爲主體との關係の許に概念せらるべきものである。そしてその限りそれは、何等か現實の中に没し去る事ではなく、却つて現實の直中に於て現實を越えるものに身近く接する事に他ならない。洵、我々は彼のイェンシュ(Erich Jaensch)と共に、「近き理想主義」(Idealismus des Nahen)を以てペスタロッチーの本領とせねばならない。ところで斯かる思想は必ずしも人的關係に限つたものではなく、諸他一切の關係に及ぶのであるが、特に之を人的關係の側から見た場合、かゝる關係の最もよく具現せられたものこそ實に「家庭」である。そして此に正しく、彼がその生涯を通じて家庭生活を重視し、而もその教育的意義を擴充せんと意圖したる根據が存するわけでもある。我々は此處で暫く「夕暮」の語る所に耳傾ける事にしよう。曰く、「汝はたゞ自己獨りの爲に此の地上で生活してゐるのではなく」して、却つて「自然は汝を外的關係の爲に、及び外的關係を通じて陶冶する。」(五五)。而も「かゝる關係が汝に近くあればある程、人間よ、それは汝の本質を汝の分の爲に陶冶する上に、汝にとつて重要なものである。」(五六)。一言に、



「人間の家庭的關係は最初の而も最も勝れたる自然的關係である。」(五九)  
まことに家庭こそ、親心と子心に照徹せられたる、「一切の純粹なる自然陶冶の根柢」(六一)である。

茲で私は「個人的地位」(Individuallage)、即ち「人間の個別的地位」(die einzelnen Lagen des Menschen—Kr. A. VIII, 285)の問題に就て少しく補説を試みて置きたいと思ふ。言ふまでもなく斯かる考へはその強調度に於て、將た又その意味内容に於て、必ずしも彼の長き生涯を通じて一定してゐたものでなく、その間幾多變化動搖を示してゐるのであるが、併し我々は之を以て彼の思想構成に於ける根柢的にして而も特色的なものと認めねばならない。由來、此の「個別的地位」の思想に關しては、これを單に社會的乃至政治的の意味に理解せんとするものが多いが、それは必ずしも正當な理解ではない。勿論それが當該事態の重要な一面であるのみでなく、ベスタロッチー自身又時にそのやうな面を特に強調してゐる事も事實であるが、併しそのより深大な意義は、實にそれが人間陶冶の見地に於てあると言ふ事である。少くとも我々は「夕暮」當時の思想に就てかく斷定する事が出来る。而してかゝる「個別的地位」重視の思想に至大の注意を拂ひ且つその陶冶概念としての深き意義を究明したものととして、我々はこのリールを擧げる事が出来る。而も彼リールに就て茲に我々の特筆して置かねばならぬ事は、彼が實にかゝる「個別的地位」乃至「近接」思想を樞軸として、以て極めて注目し價する彼自身の陶冶論を展開してゐると云ふ事である。今その一々に立ち入る事は出来ぬが、併し、斯様な立場こそ今日我々の徹底せしめて見なければならぬ重大な立場ではないかと思ふ。特に「個別的地位」重視の思想を彼に關聯して再説した所以である。

### 第三節 兩つの極

以上我々はベスタロッチーの生涯の問題を民衆の中に見、而もそれに對する眞にベスタロッチー的なる精神の發露を「夕暮」の中に見た。そして我々は「夕暮」を貫く中心動機に沿うて、「人間自然」・「自然の進行」・「個別的地位」、及びそれと關聯せる「近接」思想・「家庭」重視の思想等、彼の思想形成に於ける原型的なものの意味内容を一應明かにしたのであるが、此に我々は正しく、彼の生涯に於ける將た又彼の全思想に於ける極めて重要な一つの極に遭遇したわけである。一體「夕暮」に於て、既に彼の生涯進むべき方向とその思想發展の取るべき方向とが決定してゐたとは、諸家の等しく認める所であり、事實又、彼は當時既に、彼の生涯を貫いて存した或るものを深く呼吸してゐたのである。たゞ併しこれは今日我々の立場に於ける事態的なる把握であつて、これをベスタロッチー自身の側に移して見る時は、事態はなほ爾かく決定的なものでなく、そこには自ら別の相面が露れるわけである。そして一見甚だ逆説的ではあるが、當時彼は單に外面的な運命のみでなく、内面的な運命をも猶十分自覺してゐないかの如き感情をすら、他面には懐いてゐたのである。而も又こゝに「夕暮」に表示される極がなほ幾多不鮮明な面を残してゐる所以が存する。

一體「夕暮」は世間往々にして考へられるやうな一の格言集の如きものではなく、寧ろそれはルップレヒト、

### 第二章 「夕暮」と「探究」の兩極構造



(Heinrich Rupprecht) も指摘してゐる如く、全體として一貫した一つの思想を歌ひ出したものと見るのが至當と考へられるが、併し一見格言集と思はれる程に間の多い、而も深き間によつて充された構造をもつ所にその特異性が存するわけでもある。それは謂はば、海洋に浮ぶ冰山にも比せらるべきものであつて、その思想面下には殆んど底知れぬ深さを湛へてゐる。而して此の間、此の深みを充してゐるものこそ、實にその前約十年の苦難の體驗であり、これが背後から力強く全體の思想を支持してゐるのである。従つてそこに於ては、斯くあらねばならぬといふ歸結は切實に感得されてゐるとは言へ、併し、何が故に斯くあらねばならぬかといふ理論乃至説明根拠は、猶未だ十分には明確にされてゐないのである。我々が「夕暮」に於て感知する或る不鮮明なものは正しく斯かる點に由來するものと言はねばならない。そして茲に、體驗に裏づけられた「夕暮」の特殊な構造とその限界とが存するわけでもある。

ところで此の「夕暮」(一七八〇年、三十四歳)を以て代表される一方の極に對して、他の極を、我々は後主として考察さるべき「探究」(一七九七年、五十一歳)に於て見出すのである。固より前者が極めて新鮮なる教育體驗の直中に於て成立したものであるだけに、既に我々の見來つた如く人間教育乃至陶冶の見地がその中心に立つてゐるに對して、後者は政治的動亂の直中に出來たものであるだけに、政治的關心が著しくその前面に出てゐると云ふ相違は存するのであるが、併しその相違にも拘らず、その考察の中心點を「人間自然」に置いて、そこからして事態を究明せんとする彼の根本態度に於ては全くその揆を一にしてゐると言はねばならない。のみな

らず、後の考察に於て明らかにせられる如く、「探究」は結局に於て「夕暮」の思想と相通する歸結に到達してゐるのである。而もその點「夕暮」の思想が前述の如く體驗に裏づけられたものであるに對して、「探究」に於ては明確なる理論乃至説明根拠がその體驗に置き代へられてゐるのである。即ち「探究」に於てはじめて、「夕暮」自身を負へる限界が克服せられ、そこにやがて彼にとつて其の最後の内的解明が得られる結果となつてゐる。而も正しく茲に「夕暮」に對する、彼の偉大な運命作 (Schicksalswerk) 「探究」の獨自な立場が存するわけでもある。と同時に、兩者が謂はば極構造に於て極めて深い内面的關聯に立つものである事も容易に理解出来るのである。即ち「夕暮」の側から見れば、それは「探究」への出發點となると同時に、逆に後者からその照明の光を仰がねばならぬといふ關係に立つ。而して之を他面「探究」の側から見れば「夕暮」こそは正しく深大なる「探究」の世界への扉を開くべき唯一の秘鍵であると言はねばならぬ。そして茲に、「探究」の解明に先立つて、「夕暮」の中心思想を豫め考察した理由が存する。私は以下、「夕暮」を通じて明らかにせられたる彼の思想の原型的なものに絶えず觸れつつ、「探究」解明といふ我々の中心課題を遂行したいと考へてゐる。そして又恐らくは、斯かる立場に於てのみ始めてよく、彼の全思想體系に於ける「探究」の正しき位置づけが可能になるものと自身確信してゐるわけである。尤も此等は凡その見通しに就て豫め一應の所見を述べたまでであつて、これが具體的且つ内容的なる考察は専ら後の所論に俟たねばならぬのであるが、之を要するに、敘上の意味に於ける兩極構造に於て始めて「探究」の正しき解明が達成されるとする所に私の基本的立場が存するのである。



- (一) 斯様な點に就ては、彼の著作の多くに見られる告白的なる論調からも容易に推察されるのであるが、特にデレカー・マヤリーチルの指摘してゐる點でもあらう。
- Fr. Delekat: Johann Heinrich Pestalozzi, 2. Aufl. 1928. S. 107, 190.  
K. Riedel: Pestalozzis Bildungslehre in ihrer Entwicklung, 1928. Vorwort (V—VI.)
- (II) Vgl. hierzu Fr. Werneke: Pestalozzi und die Physiokraten, 1927.
- (III) H. Schönbaum: Der junge Pestalozzi, 1927. S. 68, 70.
- (IV) P. Werneke: Pestalozzi und die Religion, 1927. Vorwort, S. 31—34.  
H. Schönbaum: a. a. O. S. 194—202.
- (五) 此の點例へば次の如きものを擧げる事が出来る。
- Th. Wiget: Grundlinien der Erziehungslehre Pestalozzis, 1914. S. 3—13.  
H. Leser: Johann Heinrich Pestalozzi, 1908. S. 1—28.
- 但し此の場合、前者がホルムルト的な意味に於て目的(人道)と方法を區別する立場をとつてゐるに對して、後者はこの二つが直覺的に結合されてゐるところにヌスタロッチの本領があると解してゐる。此の兩者の間の解釋上の相違については、マヤリーチルも指摘してゐる。(K. Riedel: a. a. O. S. 100—102)
- (六) ノイホーンに於ける貧民教育の詳細に就ては、我々は當時ヌスタロッチ自身の發表した左記の如きものによつて知る事が出来る。(Kr. A. I. 137—190)

„Bitte an Menschenfreunde.“ 1777.

die Briefe an Tscharner. 1777.

„Bruchstück aus der Geschichte der niedrigsten Menschheit.“ 1778.

„Zuverlässige Nachricht.“ 1778.

尙此の問題に關しては、我々は次の諸研究を参照する事が出来る。

Fr. Delekat: a. a. O. S. 111—119.

H. Schönbaum: a. a. O. S. 206—224.

J. H. Pestalozzi's Ausgewählte Schriften, herausgeg. von Fr. Mann, Erster Band. XXXVII—LII.

(七) ヨーハン・ヘンリッヒ・ペスタロッチの政治思想を把握するに當つて「内的條件」(innere Ruhe)・「諸力の均衡」(Gleichgewicht der Kräfte)「秩序」(Ordnung)・「個人的地位」(Individualität)なる四個の中核概念を以てしてゐるが、その點は最初の「内的條件」を以てヘンスタロッチに於ける政治の究極の意味(Sinn)を表示するものとしてゐる。我々もこの二つを以てして「内的條件」としてゐる。(K. Riedel: a. a. O. S. 47—49, 97—108, 280—293.)

(八) A. Stein: Pestalozzi und die Kantische Philosophie, 1927. S. 8.

E. Jaensch: Pestalozzi, 1927. S. 4, 27—39, 75 f.

Fr. Delekat: a. a. O. S. 120—122.

H. Rupprecht: Pestalozzis Abendstunde eines Einsiedlers, 1934. S. 54—66.

(九) P. Natorp: Pestalozzi, sein Leben und seine Ideen. 6. Aufl. 1931. S. 51. f.

第二章 「夕暮」と「探究」の兩極構造



- (十) E. Jaensch: a. a. O. S. 6f, 16ff.  
尙彼は此の立場を以て全篇を貫く。
- (十一) K. Riedel: a. a. O. S. V, 109—126.  
derselbe: Eigengesetzliche Bildungslehre, 1931. S. 45—83, besonders 77—83.
- (十二) H. Rupprecht: a. a. O. S. 5—7.
- (十三) シュタインは「夕暮」の立場を以て、人間世界に對する「一元主義」(Monismus) 或は「感ぜられたる統一」(die gefühlte Einheit) と呼ぶが (A. Stein: a. a. O. S. 4, 66) 我々はその眞意を斯かる點に關係せしめて理解する事が出来ると思ふ。
- (十四) H. Schönebaum: Pestalozzi, Kampf und Klärung (1782—1797), 1931. S. 231.
- (十五) 斯かる點に就ては、諸家の見解をも比較考量せねばならぬわけであるが、章節を改めて關説する事とする。尙本文中に引用せるベスタロッチの言葉に附されたる強調點は、特別の斷りなき限りすべて筆者によるものである。此の點は後の章節に於ても同様である事を豫め附言して置く。

### 第三章 小説(「リーンハルトとゲルトルード」)より「探究」への展開

#### 第一節 極構造の展開と諸研究家の示唆

前章に於て私は「夕暮」(一七八〇年、三十四歳)の極に對して「探究」(一七九七年、五十一歳)の極を定立し、而もかゝる兩極構造に於て「探究」の究明がなされるべきであるとする、私の基本的立場に就て豫め關説して置いたが、實は此の兩極間を年代的に開けば、そこには約十七、八年と云ふ相當長期に亙る且つ極めて多作なる世に所謂著作期が介在してゐるのである。而も此の時期たるや、彼ベスタロッチにとつては最も不遇な時期であり、その間彼は文字通り孤獨な人生行路を歩まねばならぬ運命に置かれたのである。尤もそれは一面、外部的な事情に歸せらるべき多くのものを有つてゐたとは云へ、併しながら他面より決定的には、彼が餘りにも時代社會からかけ離れた特異な存在であつたと云ふ點に、その結局の根據が存したと言はねばならない。洵に彼はその爲人に於て、將た又その精神的世界に於て、時人を遙かに越えた著しき他在性 (Anderssein) を擔つてゐたのである。而して彼ベスタロッチの、時代社會に對する斯かる他在性が一體那邊に存したかは、既に我々の見來つた「夕暮」の中心動機並びに思想に於て明らかな所ではあるが、此の點は、ベスタロッチ自身又當時既に氣附いて



ゐた所でもある。即ち彼はその晩年の「白鳥の歌」に於て、「私は「クリストップとエルゼ」に於て、私の周囲からは著しく不評判を買ったが、併しそれが不評判であればある程愈々益々反對に私には心から愛すべきものとなつた所の精神で書き續けた。」(M. IV, 338)と自身告白してゐる。而もかゝる大きな喧嘩の中に、我々は時代社會に對する彼の著しき他在性を極めて明瞭に觀取する事が出来る。實際彼が爲し、彼が創め、而して彼が書き續つたものこそは、彼の周囲の人々に於けるとは全く異つた他の源泉から流れ出てゐたのである。だが彼は正にかゝる他在の故に、孤獨なる而も苦難の道を歩まねばならなかつた。そしてそれは纏て、時代社會を蔽へる啓蒙主義の克服者としての彼の不可避的に負はねばならぬ辛き一面であつたわけである。かくて此の期に於ける彼は文化危機上の戰士として、絶えず、社會のそして又自己の運命の新生面を開拓すべく、眞摯に闘はねばならなかつた。而も彼はかゝる不安と激動に満ちた闘ひを通じて、正に自己の當面せる事態そのものの解明を遂行して行つたのである。かのシェーネバウムが此の時期を以て闘ひと闘明 (Kampf und Klärung) の時期と呼ぶ所以である。ところで、斯くの如き、謂はば彼の心の遍歴時代とも見らるべき此の時期に對する我々の主要な關心事は、問題の兩極構造に關して、此の間に於ける極の移行が果して如何様に遂行されたかと云ふ事である。我々は以下此の點に關して、我々の中心課題に必要な範圍と限度とに於て考察を進めたいと思ふが、それに先立つてこの問題に對する諸家の研究に稽へて見ることにしたい。

先づナトルプがその社會的見地からして、特に「探究」を「夕暮」と共に重視した事は今更改めて述べるまで

もないが、同様の事は、彼とは別個な研究を通じて而も相互に極めて接近した結果に到達した彼のレーザーに於ても亦見られる所である。<sup>(四)</sup> 只併し當面問題の兩極間に於ける發展的な見方に至つては、レーザーに於ては殆んど缺如して居り、その點ナトルプに於ても亦十分とは言ひ難い事情にあると言はねばならぬ。殊に彼が此の間に於けるベスタロッチの確信の連續性を強調する點に關しては、後我々の考察する如く、なほ吟味さるべき問題が残されてゐるのである。<sup>(五)</sup> ところで此の兩者に比較すれば、ホイバウムの研究が、一層發展史的な考察態度・方法を採つてゐると云はねばならぬであらう。而も彼に關して一言して置かねばならぬ事は、既に一般に知られてゐる事ではあるが、彼がその研究を通じて、經驗主義的な解釋に於てナトルプとは自ら別個な見解に到達してゐると云ふ事である。

ベスタロッチの死後百年祭(一九二七年)を機會として、それ以後注目すべき幾多の勞作があらはれたが、我々はこゝで此等のものが當面問題の兩極間の移行・展開に對して、如何なる見方をなしてゐるか云ふ點に關して、簡単な素描を試みて置きたいと思ふ。

今先づデレカートの勞作に就て見るに、彼は特にベスタロッチの「方法」の文化哲學的背景を重視する立場をとつて、「方法」成立以前の思想展開を內面的に而も發展的に把握しようとしてゐるが、その際は「夕暮」と「探究」とを兩極として、以て全體の理解を達成せんとしてゐる。即ち彼の意圖は「夕暮」の極を起點として、「リーンハルトとゲルトロード」(第一、第二部)、「立法と嬰兒殺」、「スキス週報」、「クリストップとエルゼ」、



「リーンハルトとゲルトロッド」第三、第四部、「リーンハルトとゲルトロッド」(第二版)、及び革命諸著作等の中間作を通じて、結局「探究」の極にその全體の考察を及ぼさうとする所に存するが、そこで考察の基礎に置かれてゐる自然概念の展開の問題は、我々の研究に對して一つの重要な手懸りを提供するものである。

次にシュタインに就て見るに、彼は「夕暮」から「ゲルトロッド子女教育法」に至る思想發展を特にカント哲學との接觸問題に至大の顧慮を拂ひつゝ考察してゐるが、そこに於ても亦「探究」が一方それに先行する「夕暮」及び「リーンハルトとゲルトロッド」に對し、他方それに續く「ゲルトロッド子女教育法」に對して極めて重要な展開點に置かれてゐる。即ち「夕暮」と並んで「探究」が一つの重要な極をなしてゐるわけである。而もその間になされたるグリナフィー(Griphi oder Gühni)の立場(「リーンハルトとゲルトロッド」に於けるベスタロッチの立場を代表するものであるが)の徹底的なる究明及び當時のドイツに於ける精神運動を背景とせる諸思想家(Friedrich Heinrich Jacobi, Ludwig Nicolovius, Johann Gottlieb Fichte u. a.)とベスタロッチとの思想的交渉關係に對する詳細なる考察は、我々の當面してゐる極移行の問題に關して特に重要な示唆を與へるものである。

又ウエルンレのベスタロッチ研究は、彼がその専攻とするキリスト教研究の立場より、十八世紀に於けるスキスの精神生活を仔細に探究するに及んで結果したものであるが、それは純然たるキリスト教専攻者の立場よりの研究として我々に教ふる所多いものである。その敘述の仕方は、デレカートなどに見られるやうにベスタロ

ッチの代表作を年代順に辿りながら進められてゐる。

次に専らベスタロッチの陶冶思想の解明に向けられたるリーデルの研究に於ても亦、かゝる發展的な見地と同時に兩極構造的な配置の存する事は、既にその著作前半の構成の中に窺ひ知り得られる所であるが、併しここでは、彼が特に心理的見地に立つて、教育と峻別されたる陶冶思想の究明にのみ問題を限定してゐるが故に——尤もその主題の範圍に關する限り極めて優れた勞作ではあるが——我々の茲に問題としようとするやうな面は十分その考察面に現れてゐないやうに思はれる。そして又そこでは、「探究」それ自身も十分その眞價を發揮し得てゐないと云はねばならない。

尙次にシェーネバウムのベスタロッチ研究に就て見るに、彼は前後四卷(最後の二卷未完)に互つてこれを遂行してゐるのであるが、その中第二卷が丁度我々の茲に問題としてゐる期間を取扱つてゐる。そして此の場合に於ても亦、「夕暮」と「探究」とが兩極構造的な配置並びに關係に於て把握・理解されてゐる事は極めて明瞭であるが、そこで特に著しい事は、此の兩極間に於ける彼ベスタロッチの人的並びに思想的接觸關係、諸著作の成立事情、更に思想内容の展開等に互つて多方面且つ詳細に考察されてゐる事である。而も彼が今日刊行中の新しきベスタロッチ全集(普通批判版と呼ばれてゐる)編纂關係者として、新たな而も豊富な材料を基礎として試みたる考證・立論には幾多傾聴すべきものが存する。殊に此の場合、「探究」の成立過程に對する彼の見解は我々の注意を拂はねばならぬものである。



ところで最後に、かのシュブランガーの試みたる「探究」の分析に於ても亦、その所論が絶えず「夕暮」に還歸しつゝあると言ふ事をも此に附説して置く必要があると思ふが、之を總じて以上我々の見來つた所よりして確言し得る事は、「夕暮」と「探究」とを兩極構造的に把握しようとする我々の立場が、諸家の研究に徴しても亦十分支持され得るものであると言ふ事、及びその間に於ける多様な展開面が幾多重要な問題を我々の眼前に提起してゐると言ふ事である。私は以下、此等諸家の研究に稽へながら、當面問題の極の移行に關して主要なる點に觸れて見たいと思ふ。

## 第二節

小説 (「リーンハルト」と「自然」問題)

——「自然」の二重性——

さて我々は、外貧民教育の失敗を契機として、内新たなる出發を開始したる此の時期が彼の後の思想發展に對して特別大きな意味をもつものである事を茲に重ねて想起せねばならない。と言ふのは、正に此の期に當つて、彼は汲めども汲み盡し得ない底深き體驗地盤をそこに獲得し得たからである。洵にそれは滾々として湧き出づる泉にも比すべく、常に彼の新たな思想展開の源泉となり、以て彼の生涯を貫いて流れて行つた。而して此の泉の底に深く根ざしたる著作こそ、實にかの小説「リーンハルトとゲルトロッド」である。彼はその「ゲルトロッド子女

教育法」の中に於て、「私は民衆の惱む事を自ら惱んだ。そして民衆は在りのまゝを、而も何人にも示す事のなかつたまゝを私に示してくれた。」(M. III, 125)と當時を述懐してゐるが、實にかゝる生死の間に體驗せられたる在るがまゝの自然即ち彼の置かれたる歴史的现实こそが、正に彼の小説を生み出したる地盤なのである。而も彼はかゝる「自然の能ふ限り入念なる寫實」(Kt. A. II, 3)を基盤とし、以てその上に此の小説全體を構成したのである。一體、此の小説は今日我々の聞きなれたる表現を以てするならば、所謂士の文學の類に屬するものと考へられるが、そこで彼を根本的に動機づけてゐたものこそ、現實の村が如何にしてよくキリスト教的な樂土たり得るかと言ふ事であつた。而もその際彼の期待した事は、かゝる平易な小説を通じて、能く、直接民衆に裨益を及ぼし得るであらうと云ふ事であつたが、併し斯くの如き「民衆の爲の書」(Ein Buch für das Volk)なる副題に籠められたる彼の意圖は全く失敗に歸し、却つてそれは有識層の關心を集める結果を將來したのである。だが此等時人の多くは此の寫實の底に秘められたる偉大なる眞實には觸れ得ずして、事實を極めて皮相的に理解したのである。而して此の事が正に彼ベスタロッチをして、問題を更に討究し、展開せしめる機縁となり、かくて此の著作の繼續が、此の期に於ける彼の勞作の礎石となるに至つたのである。

即ち小説「リーンハルトとゲルトロッド」は第一部(一七八一年)に引續いて、其の解明書とも見らるべき「クリストッフとヘルゼ」, "Christoph und Else" (一七八二年)、更に第二部(一七八三年)、第三部(一七八五年)、及び第四部(一七八七年)と繼續的に展開されて行つた。而もそののみでなく、此の小説はその完成後



數年を出でずして全面的に改作せられ、第二版（一七九〇—一七九二年）として世に送られてゐる。従つて此の小説の述作は（此の場合我々は、晩年の刊行にかゝるコッタ版の全集中に收められたものには暫く觸れない事にする）、時期上より見て此の期の過半を占めてゐるわけであるが、それは又同時に思想内容的に見て彼ベスタロッチーに最も固有な世界を形成してゐたのである。即ちそこには、「民衆の陶冶形成」(Volksbildung)と云ふ彼の最後の念願並にその方途が構想せられてゐたのである。それ故又我々は此の小説が、所謂「方法」の成立上、かの「ゲルトルード子女教育法」(一八〇一年)と事態的なる深き連りを有するものである事も容易に理解し得るわけである。

以上見來つた所によつて、我々は此の小説が前後極めて長い間に互つて展開された大作である事、及びそれが彼の全思想體系殊に「方法」に直接する重要作である事を認め得るのであるが、而も正にそれ故に、それは單なる「夕暮」から「探究」への中間作以上の獨自な意味と存在とをもつものと言はねばならぬ。従つて又之れが考察も、それ自身別個にされるのが至當でもあり又好都合でもあると云ふべきであらう。<sup>(十五)</sup>併しながら他面、此の著作が「夕暮」から「探究」への展開過程に於ける中間的なる問題面を自身に包蔵してゐる事も亦否定し得ざる事實であり、そしてその點こそが正しく我々の茲に究明せねばならぬ問題なのである。而も我々はいかゝる點の考察を通じて同時に又、この小説より「ゲルトルード子女教育法」に至る「方法」成立過程に於て占むべき「探究」の位置を決定する根據を明らかにし得るであらう。私は以下、かゝる二重の意味に於て、此の代表作に包蔵された

る「探究」への展開面を探り求めたいと思ふ。但しその際我々は、小説の筋は既に前提されたものとして、主として問題的に、即ち第一、第二部に於ては自然の二重性の問題を、而して第三、第四部に於ては作る、自然の問題を中心として全體の考察を進めて行きたいと思ふ。尤もかゝる考察方法では、此の著作のもつ構想的なものに分なる場所を興へ得ない結果になるであらうが、それは方法的に許されねばならぬであらう。

今此の小説をルッソーの「エミール」と對比して見るに、我々はそこに極めて著しき且つ注目すべき相違の存する事に氣附く。先づ第一に「エミール」に於ては、その中心人物エミールは上流社會の出であり、全體の展開も亦かゝる視野の中に終始してゐるのであるが、それに對して「リンハルト」に於ては、既に我々の承知してゐる如く民衆がその主題の中心に立つてゐる（兩者の貧民教育に對する見解の著しき相違は十分に注意されねばならぬ<sup>(十六)</sup>）。而も亦前者に於て、そのエミールは社會環境から殆んど取出され、孤立化されてゐるに對して、後者に於てはボンナル(Bonnal)村を中心として全體が極めて具體的且つ現實的に展開されてゐる。即ちそこでは（特に第一部）、家庭生活はより大きな村といふ生活環境に接續し、而もその間に現れ來る幾多の人物、わけても農民達の姿態は眞に迫るものがある（z. B. I. Tell, S. 19—27.<sup>(十七)</sup>）。事實我々はそこにノイホーフを繞るビル地方(Birrfeld)の農民生活に眼のあたり接する事が出来るのである。ところで斯かる相違は、之をルッソーの側から見るならば、それは一面彼の既成社會乃至文化に對する嫌惡に由來するものであるが、併しそれが他面又、一



つの正しき人間形成過程の純粹なる場合を主題の中心として意圖せる彼の原理的—方法的態度に由来するものである事は明らかである。而して之を逆にベスタロッチの側より見る時は、それは飽迄も具體的なる現實に即して其の現實の直中から問題を展開せんとする、彼ベスタロッチに固有な態度に由来するものと云はねばならぬ。而もそこに纏て又問題の核心なる自然概念の著しき相違が結果するわけでもある。即ち一方そこに専ら純粹なる事態の語られてゐる前者に於ては、高次の自然が著しく前景に立つが、併し此の自然たるや現實との連りに於て大なる脆弱性を示してゐる。他方之に對して、身近な現實より語り出されたる後者に於ては、何よりも先づ在るがまゝの自然が如實に示されてゐる。而もそこでは低次の自然の存在の故に、高次の自然の實現が爾く容易でない事が卷を逐うて明らかにされてゆく。即ち問題は現實に於ける人間自然の二重性を繞つて展開される。我々は今かゝる問題面を、一方ゲルトルト (Gertrud) の家庭及びそれとの關聯に於て、而して他方庄屋フンメル (der Untervogt Hummel) 及びそれとの關聯に於て辿つて行く事にしたいと思ふ。

右に於て私は高次の自然 (höhere Natur) と低次の自然 (niedere Natur) なる二重の表現法を用ひたのであるが、此れは既に主題に於ても闡説して置いた如く、テレカートの用法に從つたものである。尤もかゝる用語はナトルフ等に於ても見られる所であるが (P. Natorp: Der Idealismus Pestalozzis, 1919, S. 27f.)、そのより立ち入つた規定は我々は之を後の「探究」の考察に於て果す事にしたいと思ふ。

さて場面はボンナル村といふ著しく墮落した村である。そしてその墮落の中心をなしてゐる者は庄屋フンメル

である。彼はその地位を利用して、自ら經營してゐる居酒屋商賣を繁昌させてゐる。村の怠惰なる無頼の徒 (Schelmen) は、いつもその店にゐて村人達をそこに誘惑し、酒と賭博とでその金を捲き上げてゐた。石屋リーンハルト (der Maurer Lienhard) も亦かゝる誘惑に悩まされてゐる一人である。而もそれ故に、彼は善良な夫であるに拘らず、なほ妻と子供を非常な不幸に曝さねばならなかつた。そこでその妻ゲルトルトは、パンに事缺く零落の淵より一家を救はうとして、終に意を決して城主アルネル (Arner) に事情を訴へて援けを求める。事件は此處から展開される。そして最初物語の經過に於ては、惡の一切の發端が「人非人」(Ummensch) なる庄屋フンメル的手中に収められて居り、而して彼よりして、惡しき風習と計略とその實行といふ全體の網が多く結び目をつくつて全村に擴つてゐる。而もそれは、そこから脱け出る事は到底不可能な程に根強く張られてゐる。そして此の場合、そこには、城主アルネルの好意によつて石屋リーンハルトに託されたる教會建築の事業に、妨害を加へようとする劃策も亦織込まれてゐるのである。

ところで此等の關係の敘述は、何時も繰返してゲルトルトの居間 (I. Teil, besonders § 31—36)、ルディ (Hühnerdi) の母の臨終の床 (I. Teil, § 16—18)、及び城主アルネルと村の牧師の氣高い努力によつて一道の光明を投げかけられる。そしてそこに自らなる明暗の對比が現れて、全體をして著しく立體的、且つ生動的になしてゐる。今その中特にゲルトルトの家庭に就て見るに、此の一家にあつては、敬虔な而も分別ある母親の許に、秩序あり且つ祝福された家庭生活が營まれて居り、その描寫も亦極めて寛いだ、氣持のよい仕方展



開されてゐる。母親ゲルトルードは子供等と共に神に祈り、而して子供等によく働き且つ親切な行ひをするやうに教へ勵し、更に最初の道徳上の事柄を無言の中に子供等の心情に強く感銘させるやうに力めてゐる。そして、土曜の晩が此等の事に充てられる習慣になつて居り、かくして安息日の當日には文字通り一家團樂出来るのである。洵に、「人間の家庭的なる團樂は地上に於ける最も美しいものである。そしてその子等についての兩親の喜びは人類の最も聖なる悦びである。」(Kr. A. II, 141)とは、正しくゲルトルードの家庭に具現された姿であり、精神である。而もそれはそのまま「夕暮」の精神と相通ふものである。たゞ此處で著しい事は、家庭に於ける母性の位置、取りわけその教育的位置が極めて具體的なる姿相に於て而も積極的に表視されてゐると云ふ事である。一體、人間の初歩教育に關して母性に託する事の絶大であつた事は、ベスタロッチーの思想に於ける根本的な特色と云ふべきであり、それは總て彼の「方法」の開顯と深い内面的關聯をもつものであるが、この事たるや、正に彼が母性の無限なる孕みの力を感得した事に由ると云はねばならない。彼は第二部に於て、次の如く母性をシンボライズしてゐる。曰く、「斯様に神の太陽は朝から晩までその進路を進みゆく。汝の眼は何等その歩みに氣附かず、そして汝の耳もその運行を聞く事がない。而も日没に際して汝の知る事は、それが再び昇り來つて此の大地を溫暖續けてやまず、かくて地上の果實が熟すると云ふ事である。……斯くの如く大地を孕みゆく此の大なる母の姿こそゲルトルードの姿であり、又、その居間をば神の聖域に高め以て夫と子等の爲に天國を贏ち得る凡ての女性の姿である。」(Kr. A. II, 280)と。我々はそこに母性の最高潮に達してゐるのを見る。

此處で我々は視點を變へて、問題を更に反對の側から考察して見なければならぬ。一體我々はこの小説第一部に於て、或は背神者・偽善者・偽誓者・欺騙者・盜人、乃至は高慢者・怠惰者・迷信信奉者等、凡そゲルトルードの側から展開されるものとは對蹠的な幾多の人間像に接するのであるが、爰に正しく「自然」問題に對する新たな問題面が潜んでゐるわけでもある。而も此の點、決定的な問題を投げかけてゐる者こそ、云ふまでもなく「人非人」なる庄屋フンメルである。尤も彼に就ては第一部では、その後半に及んで、彼の石屋に對する奸計の不成功、更に城主に對する報復手段の失敗、及びその失敗を通じての身の破滅を敍した後に、彼に對する城主の斷罪に言及し、その際特に彼の生涯の告白とその公表と云ふ一項を以て、ゲルトルードの家庭とは正に反對の側面からして「人間自然」の核心に觸れ得る機會を豫知してゐるとどまつてゐる。

ところが第二部に及んで正に此の點が全面的に究明される事となる。而もその主たる動機は當面問題のフンメルを繞つて、彼ベスタロッチーが時人と根本的なる見解の相違に撞著した事に存する。即ち、當時好んで人間性に就て將た又美化された農民生活に就て語る所謂識者の中には、益、加はり行く民衆の道徳的並びに市民的墮落の原因を、一面的に而も専ら、フンメルの如き村役人の責にのみ歸せしめようとする態度を示す者があり、又當時一般にかゝる考へが擴つてゐたのであるが、併しそれは、「そのより力強い影響なしには如何なるフンメルと雖も村に瀰る事は實は出來得なかつた。」(M. IV, 337)と考へられる、より大きな墮落の原因を、よき民衆の友の視野から逸らす危険があつた。そして此の事が彼ベスタロッチーをして、「何故にかくあるか？」(Kr. A. III,



241)と云ふ原因の究明を、彼自身の立場から遂行せしめるに至つたのである。小説第一部では村の貧民達の間にて支配的であつた状態が多く示されてゐるに對して、第二部に於ては、村の有産者、重立ち、或は世話役等に就て知り得る機会が多い。そして此處に於ても亦一般にその道德感に極めて低調であるのみでなく、更に幾多の敗徳行爲が行はれてゐる。而も此等の事は、主として庄屋フンメルの運命の敘述と關聯して展開されてゐる。

さて監禁の身となれる庄屋フンメルは、牧師の心からなる同情と慰藉によつて、自づと心おちらぎ且つ悔恨の情を懐くに至るのであるが、此の時にあたつて、牧師は毎日に庄屋とその過去に就て語らふのである。固より牧師の意圖は庄屋の幼少の頃から今に至るまでの経歴を聞き取り、且つその墮落の原因を探り求めようとする所にあるが、此の事が一度村人の間に傳はるや、彼等村人達はいづれも大なる不安に驅られ、そこに思はざる反響を喚び起すこととなる。と言ふのは、彼等は皆多かれ少かれ庄屋フンメルの悪行爲に關係をもち、而も殆んど大抵の者が彼との默契とその補助によつて城の藏品を盗み出した事があり、従つて庄屋の懺悔によつて其の事の露顯するのを恐れたからである。而もこの事に關して最も狼狽したのは、村の重立ちや世話役連中である。彼等は竊に相會して、フンメルの告白を中止せしめようと劃策・工夫を凝す。勿論是等の事は首尾よくは運ばないのであるが、此の間の経緯は洵に面白、可笑しく敘述されてゐる。

だがこれに失敗した彼等は更に別の手段によつて、對抗しようと策動を試みる。ゲルトルードの家庭なども此

の爲に思はざる迷惑を蒙るが、併し此の場合特に採り上げられるのは、庄屋の犯行と關係ある惡魔の問題である。彼等はこれを蒸返し逆用する事によつて、城主と牧師及びその側に立てる者をして困惑と不評に陥れようとするのである。而も他方に於て彼等は、村の共有地を貧民に分割しようとする城主の尊い企圖に難辭をつけて、其の實現を妨げ、以て彼等自身に有利に事を運ぼうとたくらむ。そしてそこには、社會の上層に立つ者の卑劣な言動が遺憾なく露されてゐる。

併しながら終に此等一切の事が明かるみに曝される日がやつて来る。それは極めて劇的に展開される村の集會當日の事であるが、此の日城主によつて徹底的に糾弾される村人達の數々の横領行爲は、人間の惡行爲が如何に廣く且つ根深く行き互つてゐるものであるかを示して餘りある。而も事件はそれにとゞまらずして、彼等村人特に世話役達は何れも揃つて、共有地の分割に關係のある申告事項に就て、虚偽の申し立てをなしてゐる。そしてそのあばき出されるに至る経路は、之又、村の墮落の深さを思はせるに十分である。

かくて結局此等全體を通じての歸結は、先づ第一に、民衆の道德的並びに經濟的墮落が社會のより大きなもの道德的缺陷、特に此の場合、以前の城中の道德的無秩序と深い關聯をもつてゐると云ふ事、そして又その限り「庄屋の以前に」(Kr. A. II, 334.)既に村の惡弊の原因が根ざしてゐたと云ふ事である。而もこれと關聯して次に決定的に重要な事は、かくの如くして一度道德的な無秩序が一般に行き互つた以上、然る「環境」(Umfeld)は人々をして、殆んど「不可抗的且つ絶望的に」(Kr. A. II, 335.)墮落の淵に陥れる恐るべき力を、個



人からは獨立にそれ自身に荷ふものであると云ふ事である。そして正しく茲に、民衆問題に對する彼の深き洞察の由つて來る根據が存するわけである。と同時に又茲に、一般に罪が單に當該個人の罪のみでなく、却つて又、然る罪を生み出させたる社會の罪であると云ふ、極めて注目すべき見解の成立する根據が存するわけである。そして當面問題の庄屋フンメルも亦、正に斯かる建前に於て處理せられてゐるのである。彼ベスタロッターが牧師をして「人非人」なるべき庄屋を目して「彼も我々と同様一個の人間である」(Kr. A. II, 415.)と言はしめてゐる所以である。而もそれはやがて又、人間の惡行爲が必ずしも特定の個人にのみ限られたものでなく、却つて「我々すべてが此の男(庄屋)を破滅せしめた如き災厄の泉に口づけてゐる」(Kr. A. II, 335.)ものである事を、我々に身近く感得せしめる。かくて此處に於ても亦(即ち人間の惡行爲の側からしても)、「如何に人間が相互に同じものであるか」(Kr. A. II, 335.)と云ふ事が問題となるわけである。尤もそれは、後の「探究」に於て語られる「人間の過誤の内面的同一性」(Kr. A. XII, 62ff.)に見られる如き徹底したのではなく、殊にその稍、感傷的な態度の故に、そこには或る混亂と困惑すら感ぜられるのであるが、なほ人間を見詰める専深き立場であると云はねばならない。

以上我々は相互に對蹠的な位置に立てる二人の人物を中心として、我々の考察を進めて來たのであるが、我々はその何れの側に於ても、問題が一段と複雑化し來つてゐる事を認めねばならない。一體ゲルトロートの側に於ては、人間の惡行爲は極力排除され得るものと考へられて居り、而もその限り惡とは別個に、それ自身純粹に人

間の善行爲が保持・實現されてゐるかの如く思はれる。従つてそこには何等問題がないやうに一應は考へられるが、併し事態は必ずしも爾く單純なものでなく、却つて反對に、惡に對する別個の態度が既にそこに萌してゐる事を我々は知らねばならない。而もその立場からしては、惡は我々人間世界から爾かく容易に斷ち切られ得ないのみでなく、却つて、然る惡の生れ來る歴史的・社會的現實を離れては、我々の善行爲も亦成立し得ないと考へられるのである。我々はこゝで、極めて端的に表示されたるゲルトロートの言葉に耳傾けて見なければならぬ。曰く、「けれども人間が幸福と靜平と喜悅とを贏得するのは、人間の心が多くの試煉にまで陶冶されて、不撓、不屈、堅忍且つ賢明である時のみ望み得る事でありませうからして、多くの悲惨と困窮とが此の世になければならぬ事は明らかに必然的であります。何故ならば、それなくして人間に於て心が秩序を得、且つ内面的な靜平に達するが如き事は殆んど不可能であるからであります。」(Kr. A. II, 56.)と。勿論そこに語られてゐるのは「悲惨と困窮」(Elend und Noth)とであつて、それは必ずしも惡を正面から問題にしたものではないが、併しそこに惡の問題が重大な關係をもち來つてゐる事は、右引用箇所の前後からも十分之を讀みとる事が出来る。そして確かにそれは矛盾である。だがかゝる矛盾こそが正しく疑ふ方なき現實なのである。而もかゝる事態に直面しては、何等か内面的な歪みが自然概念の中に入り來る事は、不可避的であると云はねばならない。従つて又「夕暮」に見られたる「自然の秩序」乃至「自然の進路」の如きも何等か不齊合的なものに撞著せざるを得ない筈である。だが斯かる問題は如何にして解かれるのであるか。我々の注視せねばならぬ點である。ところで此の場合、決定的な



關係をもつものは云ふまでもなく庄屋フンメルである。彼こそ實に、惡問題を、より一般的な人間問題に翻す轉廻點に置かれてゐると云ふべく、その點、既に我々の上に考察し來つた如くである。従つて問題は兩側面からして接近せしめられてゐると云はねばならないが、併し此等の關係はなほ十分追究せられるまでは至つてゐない。なほ並行的、分裂的なるを免れぬ所以である。固より此等の點の眞に徹底されるのは更に後の事に屬するが、此處で豫め注意さるべきは其の移行に際して、「かくも深く落ち込んだ人間の内部にもなほ宿る善の感情に打たれ」(Kr. A. II, 334f.)、或は「人間はかくも喜んで善良であり又かくも喜んで再び善に就くものである。」(Kr. A. II, 349.)と觀する、彼ベスタロッターの根本感情に、自らなる動搖が生じ來ると云ふ事である。そしてそこに纏て又「純潔無垢」(Innocence, Unschuld)の問題を繞つての、「夕暮」から「探究」への移行の跡が窺はれるわけでもある。總じて今や惡の問題が彼の胸裏深く囁き來つてゐると云ふべきであらう。

以上私は専ら小説第一部と第二部に依據して所論を進めて來たのであるが、併し此の間に於ける問題面の動搖乃至移行を、より詳細に知る爲には、我々は「クリストッフとエルゼ」をはじめ其の他關係論者を更に比較検討せねばならぬわけである。たゞ此の場合、其等一々に就て考察検討する事は所論上困難であるので、一應右の如く處理したのである。但し此處では非とも關説さるべき重要な問題があるので、その點次に少しく附説して置きたいと思ふ。

一體ベスタロッターが小説第一部述作當時早くも、フンメルを監禁と懺悔に就て別に敘述を試みようとする心組であつた事は、第一部第七十七節に見られる脚註(Kr. A. II, 185.)からも容易に知り得られるのであるが、彼がその續編の述作に

先立つて此の前後絶えず犯罪の問題に就て眞摯に考へてゐたと云ふ事は、此の場合我々として十分注意せねばならぬ點である。と云ふのは、當時の彼の犯罪研究と小説の續編との間には、思想的に見て極めて深い内面的な關聯が存在すると考へられるからである。即ち彼が、その犯罪研究の結果得られた一般的な歸結を、此の小説の續編に於て、殊に主要人物なるフンメルに於て具體的な形で適用してゐると見る事は、ホイム、ウムの推斷(Vgl. A. Heubaum: J. Heimr. Pestalozzi, 2. Aufl. 1920, S. 112.)等に徴しても、極めて自然的な事柄であるといひ得られるが、此の點に關しては、又第二部に盛られたる思想内容を検討する事によつても十分首肯する事が出来る。今その一々に就ては述べないが、此の場合我々は庄屋フンメルの生涯を主題とせる牧師の説教(Kr. A. II, 361-418.)、殊にその總括的判斷の部分(Kr. A. II, 415ff.)に就て十分注意して見る必要があるであらう。

さて斯様な見地に於て此處で特に注意さるべき代表的なものは、「立法と嬰兒殺に就て」(Über Gesetzgebung und Kindermord, 1783.)と云ふ著作と、「スキス週報」(Ein Schweizerblatt, 1782.)に掲載された「刑法制定に就てのアルネルの意見」(Gutachten Arnens über die Strafgesetzgebung)と云ふ論策とである。彼は是等の論著に於て、問題を單に該個人の側からのみでなく、更に立法の側から、或は廣く一般社會の側からして、極めて多面的且つ事態的に究明してゐる。即ち彼は歴史的・社會的なる媒介面に即して、主題を繞れる「非人間性」(Unmenschlichkeit)の所在と根據とを明らかにし、以てその上に眞の「人間性」(Menschlichkeit)を具現すべき方法を開示してゐるのである。我々はそこに、前既に關説したる彼ベスタロッターの根本的態度及び考へ方の、「層徹底的に遂行されてゐるのを見る事が出来る。而もかゝる態度と考へ方こそが能く彼ベスタロッターをして、當時却つて一の桎梏と成り果てたる正義(Gerechtigkeit)に對する新たなイデーの展開、従つて又立法の更新(特に立法の内面的醇化、應報刑に對する教育刑の提唱等)、更に進んでは、眞

### 第三章 小説より「探究」への展開



に時代社會に即應したる教育の新使命に向つて推進せしめ得た根據である事を我々は知らねばならぬ。今日我々にとつて、彼の到達したる歸結が勝れて尊い意義をもつのは勿論であるが、更に然る歸結を導出したる彼の根本的な態度乃至考へ方(Denkformen)、即ち在るがまゝの現實を、その歴史的社會的媒介面に即して徹底的に掘り下げて行つた彼の態度と、考へ方に、それに劣らぬ重要な意義を認めざるを得ない。我々の併せて注意せねばならぬ點である (Vgl. hierzu F. Medicus: Pestalozzis Leben, 1927, S. 67—73, 73—84.)。

### 第三節 士官グリュフィーの哲學

——作る「自然」——

前節に於て、私は主として小説第一部及び第二部に依據して所論を進めて來たが、こゝで私は更に、第三部及び第四部に我々の考察を向けて行きたいと思ふ。ところで既に我々の知り得た如く、彼ベスタロッチーは、第一及び第二部に於て、極めて興味ある發展の中間段階に立つてゐると云ふ事が出来る。即ちそこでは、現實と理想の乖離が漸次その度を深め、而もそれと關聯して、自然概念は愈々分裂の一途を辿つてゐるものと考へられる。それ故之れを若し此のまゝの態勢で押し進めて行くならば、それは結局かの「クリストッフとエルゼ」に見られる如き、際限なき問題性の危険(二十七)から脱け出る事は困難であると云はねばならない。ましてやそこに於て、斯く撞著したる「人間自然」の矛盾・分裂を統一・轉換するが如き事は到底望み得べくもない。従つてポシナル村に新

たな秩序をもたらさんとする中心課題に對しては、第二部の基調をなす牧師の立場からは、その間大きな間隙が存すると云はねばならない。牧師の立場に於ける限界である。そして此の限界を乗り越えようとして現れた新人物こそ正しく士官グリュフィー (der Lieutenant Glühni oder Glühni) なのである。即ちベスタロッチーは此の人物を通じて極めて大きな立場の轉換を圖つてゐるのである。我々は是等の事情を第三部の中に見えたる、士官の牧師批判 (III. Teil, S. 67) に於て極めて明瞭に窺ひ知る事が出来る。即ちそこで士官グリュフィーは牧師を心中力強く評して曰く、「彼は何等か正しきものを人間から作り出す (Enachen) 事は出来ない。彼はその親切によつて人間を墮落せしめるものである」(Kr. A. III, 173) 何となれば、「彼は人間を知るものでもあつたが、又人間を知らないものでもあつた。成る程彼は、『人間とはかゝるものである』と云はなければならぬと云ふ事を、人間に就て記述し得る點に於ては、人間を知つてゐた。だが彼は、彼が彼等人間と共に仲間になり、以て彼等と共に何ものかを正し且つ秩序づける事が出来る」と云ふ意味では、人間を知らなかつた」(Kr. A. III, 173) と。此れは確かに牧師に對する痛撃であるが、それは恐らく亦かのルッソーに對しても安當するものと云はねばならぬであらう。

勿論右の引用は後に我々の再度關説する如く、實は善惡問題を繞つてのベスタロッチーの人間觀に決定的な關係をもつ箇所であるが、その點は暫く別として、我々はそこに、從來牧師の立場に著しく缺如してゐた所の活動的・創造的契機が士官を通じて新たに現れ來つてゐるのを明瞭に認める事が出来る。尤もかゝる契機は、その活動



的創造的なる事、太陽の運行にも類へられたる彼のゲルトロッドに於て、既に明らかに認められる所のものであり、そこに纏て又此の兩者の結合する内面的なる根據が存するわけでもあるが、これを更にベスタロッチー自身の立場に移して考へるならば、それは正に、彼に最も固有な立場の復活であると云ふ事が出来るであらう。士官即ち彼自身の立場であると思はれる所以である。而もかゝる立場こそが、第三部及び第四部を貫流する基調なのである。それ故我々は此の人物の動向を注視する事によつて、此の前後に於けるベスタロッチー自身の人格並びに思想形成の過程を窺ひ知り得られるわけであり、そこに纏て又我々の辿るべき線が存するのでもある<sup>(三十一)</sup>。ところでベスタロッチーに於ては、既に我々の承知してゐる如く、一般に人間の墮落乃至罪惡が單に當該個人の責にのみ歸せらるべきものではなくして、却つて又社會自身の責に歸せらるべきものであると考へられるのであるが、而もかゝる見地に立つ以上、積極的なる問題解決としては當然社會自身の新たなる轉換が企圖せられねばならぬわけであり、而もそれにはその轉換に即して、その社會の構成員たる人間の新たなる形成が同時に中心課題とならなければならない。即ち「何等か正しきものを人間から作り出さ」ねばならぬのは必定である。作る自然が問題となる所以である<sup>(三十二)</sup>。ベスタロッチーに於ける自然概念の最も重要な面として、我々の特に注意を拂はねばならぬものである。

一體第三部に於て特別に目立つ事は、全篇を通じて子供の世界が著しく前景に現れ來つてゐると云ふ事である

が、我々はそれを先づゲルトロッドの家庭に於て見る事が出来る。言ふまでもなく、此の家庭は、第二部に於ては著しく後退して、僅かにその姿を現してゐるのみであるが (II Teil, § 9, 22. u. a.)、第三部に及んで再びつきりとその姿を前面に現して來る。而もそこではゲルトロッドの子供等がルディーの子供等と一緒にゐる極めて愉快に絲紡ぎと勉強にいそしんでゐるなど、特に子供等の生活が前景に立つてゐる (III Teil, besonders § 10, 19.)。ところで之に對して他方、城主アルネルの企圖によつて、村の貧民達へ果樹と山羊の分配の行はれる牧場へ、山道づたひに集り來る少年達を繞つてのエピソードも亦、極めて輕快に而も情味豊かに展開されてゐる。そしてそこには、年少なる者の純眞さに對する、ベスタロッチーの固有な感覺が遺憾なく發揮されてゐると云ふ事が出来る (III Teil, § 22. Was ist süßer, als Kinderfreude, und was ist reiner als Kindergarten?)。だが斯かる點に於て、より一層高潮せる而も規模の大きなのは、絲紡ぎの子供等 (Spinnerkinder) に對するアルネルの特別の計ひに對して、感謝の心を捧げる爲に、アルネルの許へ行進する村の少女達の行列である (III Teil, § 27-30, 45-55 u. a.)。今此等一々に就て細説はせぬが、併しこゝで我々の想起せねばならぬのは、正にかゝる子供の世界と直接する所に、彼の教育的實踐と理論とが展開せしめられたと云ふ事である。我々は總にはノイホーフに於て、而して後にはスタンプに於て、將た又アルグドルフやイヴェルドン等に於て、彼の面目の眞に躍如たるものに接する事が出来る。而もそれを裏づけてゐる内面的契機こそ實にかの「親心」であつた。それ故、此の場合子供の世界と共に復活し來る「親心」及びその表示としての「父なる名」(Vater-Na-



time)には特別意味深きものが藏されてゐると言はねばならない。(III. Teil, S. 50, 55.)。げに新學校の中心人物たるべきグリューフィーはかゝる名を以て呼ばれる一人であり、更にベスタロッチー自身、前掲の學園生活に於ては親しくかゝる名を以て呼ばれるに至るのである。洵に「親心」こそ、學校に於ても亦、その教育をして、眞の内的生命を得しむる中心契機であると言はねばならない。

右に於て私は、子供の世界が著しく前景に立ち來つた事を指摘したのであるが、それは聽て又謂ふ所の作る、自然の立場に連るものである事を我々は知らねばならない。と云ふのは若き世代こそ正に前代によつて形成さるべき存在であるからである。尤もそれは單に形成されるのみでなく、却つて又逆に前代を越えるものでなければならぬのは云ふまでもない。特に此の場合の如く、村全體の墮落の著しい時に當つては、一層斯かる作り返す面が強調されざるを得ないわけである。そして此の點は、結局期待のかけられるものこそ若き世代であると感じゆくアルネルの心事の中に十分窺ひ知られるが(III. Teil, S. 49 u. a.)、それは又第三部全體に漲る基調でもある。ところで茲に若き世代とは、既に知られる如く、主として子供にその重點が置かれてゐるのであるが、併しそれに止まらずして、後には更に青年の指導にまで擴大され而も極めて有望に展開されてゆく(III. Teil, S. 75)。だが之に引代へて、既に長きに亘つて惡風に染つた老人連中は終に之を如何とも爲し得ないのである(III. Teil, S. 76. Vgl. hierzu Kr. A. III, S. 219 Z. 11-13.)。

さて右の如く若き世代の教育が問題である以上、そこに、斯かる人間形成の事に與るべき組織・施設が問題となるのは、極めて當然な事と云はねばならない。第三部に於て「新學校」(Kr. A. III, 51.)の開設が問題となる所以である。だが此の點、我々は第三部に先行する思想展開を少しく振返つて見なければならぬ。一體ベスタロッチーの教育思想に於て特徴的な事は、既に明らかな如く、兩親の許に行はれる極めて自然的なる家庭教育を特別に重視する事であるが、實は此に、彼の學校教育に對する立場の決定せられ來る重要な根據が存するのでもある。我々は先づ「夕暮」の中に於て、當時の學校教育が眞の具體内容に充實される事なくして單なる言語教授に墮し、而も當該主體の個別的地位を無視せる事を、彼が手厳しく批判してゐるのを聞く事が出来る(M. III, Aph. 19, 20 u. a.)。而も我々は斯かる點のより一層立ち入つた所論を、「クリストッフとエルゼ」の第十四夜及び第二十三夜の對話より聞く事が出来る。彼はそこで、教師による教室(Schulstube)の教育を兩親による居間(Wohnstube)の教育と對比し、以て何が故に従來の學校教育が拒否されねばならぬかの理由を、種々なる角度から明らかにしてゐる。尤も對話は單に批判にのみ終始してゐるわけではなく、却つて又、彼の立場を代辨すると思はれるヨースト(Joost)を通じて新學校の理念をすら豫知してゐるのであるが、併しそれはより以上に展開されるまでには至つてゐない。ところが小説第三部に及んで、正に此の點が積極的に取上げられるのである。即ち學校に對する従來の消極的な態度が積極的な態度に轉換されるのである。だが一體かゝる轉換は何によるのであるか。我々の注意せねばならぬ點である。而も此の點に就て我々に重要な手懸りを與へるのは、新秩序建設へ



の有力な協力者たる糸屋のマイエル(der Baumwollenneyer)<sup>(113)</sup>を通じて表示されてゐる見解である(Kr. A. III, 140)。彼の説く所によれば、極めて單純素朴な生活状態にあつては人間は特別な學校教育を必要としないが、併し一度そこに新たな契機が入り來つて生活が複雑化するや、人間はかゝる生活事情に應じたる特別な教育を必要とするに至る。然るに他方、墮落したる一般民衆の家庭に於て、かゝる教育を果し得ぬのは極めて明かであるが故に、「彼等(子供等)がその両親から得る事の出來ぬ而も必要不可欠なものを、彼等に補充する(ersetzen)所の施設を學校の中につくらねばならぬのは必然である。かくて學校の積極的な位置づけが結果するわけであるが、そこに又學校存立の本質的な根據の存する事を我々は知らねばならない。だが併し、既に歴史的事情の著しく變化した時に當つて、「舊き學校秩序」(die alte Schulordnung)の適合せぬ事は論を俟つまでもない。學校の更新されねばならぬ所以である。そして此に、我々は舊きに代る新たな「學校秩序」の建設に向はねばならぬ事となる。<sup>(114)</sup>嚮には「夕暮」に於て「自然の進路」と共に「自然の秩序」が語られ、而してゲルトロドの家庭に於ては無秩序なる近隣の家庭とは全く異つた「家庭秩序」Hausordnung (II. Teil, § 9.)が展開され、而も今又新たな「學校秩序」が問題となつてゐるのである。我々は、かく繰返し現れ來る「秩序」<sup>(115)</sup>なる表示の中に、正に生れ出づべき社會の姿を觀、且つ新しく動く歴史の響を聞かねばならぬであらう。

ところで此の場合新たに生れ出づる學校が、時代的變化を著しく受けつゝあるボンナル村の現實を、果して如何なる内容と方法とに於てそれ自らの中に寫し出してゐるかは、今日の我々の時代に於ける教育問題等より見ても

極めて興味ある問題であるが、それは又後の「方法」との関係より見て特に我々の注意を拂はねばならぬものである。そして此の點、學校改造の原理が既に早くゲルトロドの家庭を通じて豫知されて居り、而もそれが溯つてはノイホーフの原體験に基くものである事は、今更述べるまでもない事であるが、此等は又我々としても絶えず注意の圈内に確保しつつ進み來つた所である。従つて此の場合、ゲルトロドの家庭教育を原型とせる(III. Teil, § 19, 20)而も士官を中心としたる學校教育(III. Teil, § 64-68, 81.)に就ては、我々がかゝる一聯の展開の根柢に流れてゐるモチーフに沿ひつゝ、その基本的な構造關係を検討すべきである。そして又恐らくは、かかる立場よりして能くそのもつ意義と限界とを明かにし得るものと云ふべきであらう。

一體ベスタロッチーに於て、その教育の割り出さるべき重大な據點が當該主體の「個別的地位」に存した事は既に「夕暮」と結合して解明して置いた如くであるが、此の場合我々の想起せねばならぬのは、かゝる「地位」と構造的に結合せる生活圏の思想である。と言ふのは、當面問題の學校の位置づけこそ、正にかゝる立場よりして遂行されてゐるからである。即ち學校は彼等の生活圏に即して、一方家庭生活と、而して他方郷土乃至社會生活と密接に連絡・結合される。のみならず、そこに於ては神と共同の生活も亦顧慮されてゐる。かくて學校は文字通り彼等の生活圏に沿うて指導・教授を進める事となる。ところで問題となるのは、かゝる構造的な生活の諸層が果して如何なる媒介を通じて指導・教授されるかと云ふ事である。而も此の點、從來主要な位置を占めてゐたものこそ言ふまでもなく「言葉」(Wort)であつたのである。だが單に「言葉」のみによつて、かゝる生活圏の全相



が能く媒介され得ないのは固より當然な事と言はねばならない。實にペスタロッチーの着眼の存する所であり、彼が特に「言葉」に對して「行爲」(Tun) 並びに「作業」(Arbeit) の陶冶的意義の重大さを強調する所以である。併しながら彼の結局の意圖と努力とが「言葉」と「行爲」の分離ではなく、却つて生活の諸領域に互つての兩者の眞の結合に存した事は十分注意せられねばならぬ點である。即ち彼は一方に於てその重視する「作業」を、糸紡ぎの外に手細工や園藝・耕作等に多樣化すると同時に (Kr. A. III, 271 ff.)、他方當初から「作業」に結合するに讀 (Buchstabieren, lesen) ・書 (schreiben) ・算 (rechnen) の教授を以つて (Kr. A. III, 164 ff.) 更に道德的・宗教的領域にまでもかゝる實踐的な立場を徹底させて、結局「生活の眞の教智」 die wahre Weisheit des Lebens (Kr. A. III, 53, 170.) を體得せしめようとしてゐるのである。(特に宗教に關しては、士官の影響によつて更新される牧師の宗教教育に就てその間の事情を知り得るのであるが、ここでは特に「神の言葉」 Gottes Wort を人間の行爲の上に實現しようとする努力が拂はれてゐる— Kr. A. III, 170. ff., 230 ff.) かくて、此等全體を通じての彼の意圖と方向とは次の一文によつて代表されるといふべきであらう。

「それ故彼 (グリニフィー) は言つた、人間の教育に際しては眞摯な而も嚴格な職業陶冶 (Berufsbildung) が一切の言語教授 (Wortunterricht) に必然的に先行せねばならないと。

而も彼は正確に職業陶冶に又道德陶冶 (Sittenbildung) を結合し、而して曰く。それ／＼の地位や生業の、そして又その住める場所や土地の道德は、人間にとつて極めて重要であるが故に、彼の幸福・靜平及び彼の生活

の平和は、千に一の例外もなく、彼が此の道德の難點なき模範であるや否やに懸つて存すると、

道德への教育はそれ故に又彼の學校施設の信條であつたのである。」 (Kr. A. III, 168.)

以上見來つた所によれば、問題は一應解決點に到達してゐる如く思はれぬでもないが、併し「職業」と結合せる「作業」を以て、單なる「言語教授」に墮したる從來の學校教育を改造せんとする企ては、之を全體として見る時、果して能くその意圖の如く齊合的に而も首尾一貫して遂行されてゐるであらうか。殊に謂ふ所の道德が果して能くその確固たる根據に突き當つてゐるであらうか。従つて又「夕暮」に於て見られた如き「一般的なる」人間陶冶の立場が、此處に於ても亦能くその王座を確保し得てゐるであらうか。問題は正に茲に存する。而も此の點決定的な論斷を下す事は極めて困難な事であり、解釋上も亦種々見解の分れる所である。が併し我々は凡そ次の二點を指摘する事が出来ると思ふ。即ちその一は、此の場合特に經濟的「地位」が重視されると云ふ事である。一體「夕暮」當時に在つては、謂ふ所の「地位」の意味内容はより一層豊かな面に於て考へられてゐたと言ひ得るのであるが、當面問題の時期に至るや、漸く經濟的の面が表面化し來り、又それと關聯して「職業陶冶」が特に重視され強調されるに至るのである。勿論かゝる事情は、一面當時の地方民衆の間に於ける經濟生活の混亂に對應するものではあるが、併し他面それは又、彼自身の内面生活に於ける或る深みと深き關聯をもつものである事を我々は知らねばならない。そして此の點こそが正に第二に指摘されねばならぬものである。即ち彼は此の前後、人間存在の最後の根據に關して (それは結局宗教と關聯をもつものであるが)、その確信上動搖を免



れ得なかつたのである。我々は今此の間の事情を明らかにする爲に、嚮に本節の最初に闡説したる士官の牧師批判に結合して、特に士官自身の立場に検討を加へて見たいと思ふ。言ふまでもなく士官に於て著しい點はその積極的なる創造的立場にあるのであるが、問題はそれが果して如何なる根據に立つてゐるか云ふ事である。而も此の點、決定的な關係をもつものこそ、「人間に可能な程善からんが爲には、人は（餘りにも）惡しく見えざるを得ない。」(III. Teil, S. 67.)と云ふ極めて異様な響をもつた表示である。そこには最早かの「夕暮」の響を聞く事も出来なければ又かの「人間はかくも喜んで善良であり、而もかくも喜んで再び善に就くものである。」と云ふ小説第二部の基調をも聞く事が出来ない。人間觀の大きな變轉と言はねばならない。而もこれこそが、「世間に疏い」牧師の弱味を克服して現れたる、而も「世間を知る」所に強味を有する士官の立場なのである。我々はそこに、果してノイホーフの隱者が、その苦難な而も孤獨な人生行路を通じて、如何に人間を觀じ來つたかを凝視してみなければならぬ。確に彼は以前にも増して人間に於ける惡の根元に深く撞著してゐると言はねばならぬ。問題は謂はば下から深刻化してゐるのである。而も此の點は、後闡説する機會のある如く、第四部以後に至つて一層その度を深めるのである。彼が人間を「他の自然 (andere Natur) に作りなす」(Kr. A. III, 170.)事を如何に強調しても、なほ且つ及ばぬ所以であり、更にその方法に附纏ふ或る種の外面的強制的なもの由つて來る所以である。

我々は茲で問題を少しく別の觀點から考察して見たいと思ふ。一體ベスタロッターは「クリストッフとエル

ゼ」(第二十三夜)の中に於て、凡そ人間に具はる一切のものは活動的であるのが自然であると云ふ建前からして、所謂「頭と心と手」(Kopf und Herz und Hände)の三者を通じての「人間力」(menschliche Kräfte)の活動・習練を説いてゐるが、その際彼はかゝる活動力の「偏跛な人間」(Halbmenschen)に對して、「全人」(ganze Menschen)が形成せられる爲には、その活動が孰れか一方に偏する事なく、却つて此等三者が「共に而も同時に交入的に」(zugleich miteinander und durcheinander)活動・習練せしめられねばならぬ所以を明らかにし、以て「人間力の均衡」(das Gleichgewicht der menschlichen Kräfte)を陶冶の要諦としてゐる。言ふまでもなく此の考は彼の所謂「方法」の基本構造に關係する極めて重要なものであるが、それが當面問題の場合に於ても亦存する事は、關係箇所を通じて十分認められる所である。それ故今此の方面からして問題を考察して見るに、此の場合「手」を通じての陶冶と「頭」を通じての陶冶に對して、第三の「心」を通じての陶冶が十分なる融合・統一にもたらされてゐないのは見逃し得ない事實である。従つてそれは、かゝる三陶冶領域の全く平行的に而も相互連絡・統一的に展開せしめられてゐる、後の「ゲルトムルド子女教育法」の立場からはなほ隔たつてゐるものと言はねばならない。而もその由つて來る所を求むれば、此等三陶冶領域の正に據つて立つべき窮極の根據が此の當時なほ、彼ベスタロッターに於て十分明確にされるに至つてゐない事に存すると言はねばならぬ。所詮問題は單なる横の序列に於てではなく、却つて縦の深さの序列に於て解決されねばならぬのであるが、而も正にその深き場所が彼に於て荒されてゐるのである。即ち「人間自然」の二重性の故に、「夕暮」に於ける



「感ぜられたる統一」(A. Sein)は既に消し去られ、而もそれに代るべき新たな統一の中心は未だ獲得せられず、問題は謂はば下から一層深刻化してゐるのである。そして此の點に就ては既に前述に於て指摘して置いた如くである。かくてグリーンフイーを中心として試みられる教育法が更に後の「ゲルトロード子女教育法」へと展開せしめられる爲には、豫めそれに先立つて、人間への信頼と希望とが更新せられ、而もそこからして人間存在の最後の根據が徹底的に究明せられる事こそ、絶対に缺くべからざる要件なのである。而も此の要件を充すものが我がの後に考察せんとする「探究」であり、そこにやがて「方法」の成立に對する「探究」の意義の決定せられ来る根據が存するわけである。固より「方法」の成立にはこれと關聯して、既に此の場合にも見られる所の教授上の所謂「イロク」(das A, B, C. (Kr. A. III, 3, 154))が更に各陶冶領域に互つて追求せられ、確定せられねばならぬわけであるが、此等に就ての詳論は我々は之れを他の機會に譲らねばならない。

「探究」の解明を中心課題とする我々の考察が、特に「方法」の成立に對するその意義をも同時に注意の圈内に確保しつつある事は、既に豫め述べて置いた如くであるが、我々は今その重要な問題面に達着したわけである。勿論これが詳細なる究明に至つては之を別の機會に俟たねばならぬが、差し當つて、我々は「探究」考察後に或る程度再び此の問題に觸れる事にしたがふと思ふ。向かふ點に就て特別な注意を拂つた研究としては、既に度々引用したるシュタインの著作 (A. Stein: Pestalozzi und die Kantische Philosophie.) を擧げて置かねばならぬであらう。

右に於て私は、當時ベスタロッチが「人間自然」の二重性を繞つて謂はば下からの問題の深刻化に悩みつたあつた點を特に指摘し、且つそれに對して多少の所見を述べて置いたのであるが、併し此等の點に關しては我々が主として依據した第三部の内容からのみでは不十分なるを免れない。茲に我々は、既にその際豫想してゐた第四部の内容に即して、右の所論の背景を一層明らかたすべき時期に到達したわけである。勿論此の場合我々に重要な關係をもつのは、第四部の中心主題たる立法問題であるが、此の立法に關して我々の先づ注意すべきは、彼がそこで立法(即ち政治)を以て既に展開せられたる教育と合して、新たな社會秩序建設への二大部門となしてゐると云ふ事、及び彼が立法の問題に於ても亦教育に於けると同様人間の問題にその基礎を置いてゐると云ふ事である。尤もかゝる事は、かの「立法と嬰兒殺に就て」なる論著等に於ても既に見られる所であつて、總じて彼に於ける著しい點であると云ふべきであるが、實は此處に、我々の考察に對する重要な手懸りが存するわけでもある。と言ふのは「人間自然」の問題こそ正に我々の考察せねばならぬものであるからである。

さてかゝる意味に於て我々の特に注意すべきは、立法の基礎として展開されたる「我が士官の哲學」(IV. Teil, S. 41.)であるが、彼はそこに於て「人間自然」に對する極めて注目すべき見解を披瀝してゐる。曰く、「人間は放任されて野生的に成長する時は、自然に (von Natur) 怠惰であり、無知であり、無謀であり、無思慮であり、輕率であり、瞞着されやすく、臆病であり、又限りなく貪慾である。而もかるが故にこそ、その弱さに突きあたる危険とその貪慾さに突きあたる障碍とによつて、邪惡となり、狡猾となり、陰險となり、邪推的



となり、暴力的となり、不敵となり、執念深くなり、更に慘酷となるのである。——これこそ人間が放任されて野生的に成長する時、自然に然らざるを得ない人間の姿である。彼は彼が食べる事をなすが如くに盗み、又彼が寝る事をなすが如くに殺人をなす。——その必要がその自然の権利であり、その欲求がその根據であり、その怠惰とそのより以上なる到達の不可能性が、その要求の限界である。」(Kr. A. III, 330 f.)と。これこそベスタロッチーに於ける「自然人」Naturmensch (Kr. A. III, 331.)乃至「動物人」Tiermensch (Kr. A. III, 335.)の正にある姿である。而も彼のそれに於て觀じてゐるものこそ、何等か我々に縁遠き太古のそれではなくして、却つて正しく最も身近なる現實の人間相なのである。我々の先づ注意せねばならぬ點である。ところで人間がかくの如きものである限り、それが「社會にとつて單に有用でないのみならず、却つて社會にとつて最高度に危険且つ耐へ難きものである」(Kr. A. III, 331.)事は極めて明瞭であるが故に「人間が自然にある所のもの、或は放任されて野生的に成長する時に成り得るものよりは、何等か全然別のものを彼から作り出さねばならぬ」(Kr. A. III, 331.)のは必定である。而もその爲には、社會の「制度・道德・教育及法律」によつて「人間をその内奥に於て變改し」(verändern)且つ變調せしめ(unstimmen)」(Kr. A. III, 331.)ねばならぬ。だがそれは決して容易な業ではない。何故ならば、「人間の内奥には必然と義務に對する一の永遠なる激動が荒れ狂うてゐる」(Kr. A. III, 418.)からである。洵に人間に於ける克服し難きものが「人間の内奥」を荒してゐるのである。かの「夕暮」に於て「人間の内奥」こそが正に神に近く接する唯一の通路であつた事を思へ

ば、實に大きな變轉であると言はねばならない。而も實はこゝにグリュンファイーを通じての教育或は立法のもつ意義の限界づけられる重大な根據が存するわけである。かくて我々は「自然人」の問題を取り上げる事によつて、嚮に第三部に結合してなしたる我々の所論の背景を一層明らかになし得たわけである。

ところで既に知らるる如く、ベスタロッチーは「自然人」の問題を繞つてルッソーとは正に對蹠的な立場に到達しようとしてゐる。即ちルッソーに於て「社會」から「自然」へ價值強調點が移行せしめられたに對して、それが再びベスタロッチーに於て逆轉せしめられようとしてゐるのである。勿論その場合、此の兩項の意味内容に著しき轉移が生じ來つてゐる事は注意せらるべき點であるが、實は又此處にベスタロッチーに於けるルッソー批判(此の點は既に最初の主題の中で關説して置いた如くであるが)の由つて來る根據が存するのでもある。但し此の間の事情の決定的なる解明は、之を後の「探究」に於て期待し得るが故に、差當つて我々は此の「自然人」の問題と關聯して「探究」の成立地盤に就て少しく考察を加へて置きたいと思ふ。

一體此の小説が第三部から第四部へかけて著しくその文學的乃至劇的な生動さと緊張さとを喪失しつゝある事は一般に認められてゐる事であるが、此の事たるや、實はその據つて立てる文學的な形式とその所論内容との間に於ける乖離に由來するものと言はねばならない。即ち此の小説の本來の建前からするならば、それは飽迄も個別的—具體的な姿相を以て展開せらるべきであるに拘らず、問題の斷斷なき追究は、終に彼ベスタロッチーをして、それを、より一般的な且つより理論的な方向へと推移せしめたのである。そしてそこには、小説なる形式の



中に盛り盡す事を得ない他の思想形態が既に用意されつゝあつたのである。かゝる事情は、その學校教育（第三部）が單に一ボシナル村の問題にとどまらずして、既に他所へも適用され得る、より一般的な形態にまで高められようとしてゐる事實に徴しても知り得られるが、それは更に立法問題（第四部）に於て一層明らかに知り得られる所である。思ふに立法の事たるや、本來の性質上、その關係範圍は愈々廣くならざるを得ないのであるが、此の場合亦、その考察内容が複雑多岐に互ると同時に、その社會圈が著しく擴大せられる事となる。即ち、經世的な此の事業は今や國家の問題にまで移行せしめられる運命に置かれるのであるが、固よりそれは事態的な必然性に基くものと言はねばならない。と同時に、我々はそこに、問題のより一般化せしめられざるを得ない所以の存する事を知り得るわけである。グリニフイーの哲學の基礎の上に展開されるアルネルの立法（IV. Teil, S. 51—56, vgl. auch 57 u. a.）こそ正しくかゝる事態の下に置かれてゐるのである。ところで彼にあつては、人間に於ける抜くべからざる一切の「根本衝動」（Grundtriebe）——此の場合、彼は所有への衝動・性の衝動・喜悅への愛着・靜平への性向及び名譽への性向の五種（Kr. A. III, 400.）を擧げてゐる——をしかと見究め、而もかゝる衝動を彼等民衆の環境に即してよりよき方向へと誘導・轉成せしめようとする所に、立法に對するその根本的な立場が存するのである。尤もそれが果してよくその意圖の如く遂行されてゐるや否やは別として、我々はそこに一應べスタロッチー的な行き方のもつ意義を理解する事が出来る。勿論此の點も注意せらるべきではあるが、併し此の場合我々にとつてより一層重要な事は、此等一聯の展開を通じて、そこに既に後の「探究」への思想的地盤が明

らかに用意されてゐると云ふ事である。かくて、我々は以上「自然人」の問題を中心として、我々の考察を進め來る事によつて、遂に「探究」への重要な展開面に達する事が出来得たわけである。尤も此等の點に關しては尙補説せねばならぬ問題があるが、それは節を改めて述べる事にしたい。

#### 第四節 人類發展史的思想背景と道德・宗教問題

前節に於て私は「自然人」及びそれと關聯せる立法問題を繞つて、「探究」への思想的地盤の既に用意されてゐる事を指摘したのであるが、實は此の點は更に立ち入つて考察さるべき問題を含んでゐる。既に我々の關説せる如く、當面問題の小説が卷を追うて、個別的—具體的なものから、より一般的—理論的なものへとその問題面を移行せしむるに至つた事は、一面に於て小説自身の内面的な必然性を反映するものではあるが、併し他面に於て、それは小説とは別個に而もその有力な背景をなすつゝ展開されてゐた他の一聯の思想形態の表面化せるもの以外ならない。そして此の點こそが正に我々の茲に取上げねばならぬ第一の問題である。

一體ベスタロッチーが、その著「立法と嬰兒殺に就て」（一七八三年の出版に先立つて既に一七八一年に成立及びその論策「刑法制定に就てのアルネルの意見」（一七八二年）をものした後に於てもなほ、墮落せる乃至正常ならざる人間を立法問題と關聯して討究する機會をもつてゐた事は、今日批判版の全集中に（Kr. A. IX, 183 ff.）



193 ff.) 收められたる「犯罪と刑罰に就て」の覺書(一七八二年)、或は「所有と犯罪に就ての覺書」(一七八二年)等によつても知り得られるのであるが、之に關して注意すべきは、此等のものを通じて彼が漸次類(Gattung)としての人間即ち「人類」(Menschengeschlecht) にその思索の方向を向けてゐると云ふ事、及びそれと關聯して、問題の處理がより一般的且つより理論的な形態に於て遂行されてゐると云ふ事である。而もそれはそのまゝ、「彩られたる具象と無味乾燥なる哲學との中間の調子 (Mittelton)」(Kr. A. IX, 195.) をもてる書を、結局に於て期待せる彼の意圖を反映せるものと云はねばならない。かくて彼は愈々高まり來る新たなる動機と、それに應じたるより大きな構想とを以て、人間存在の本質を究明しようと試みつつあつたのである。而して此の間の事情は、かのチンツェンドルフ (Karl v. Zinzendorf) 宛ての彼の書翰(一七八三年十月三十日附)によつて一層明らかになり知る事が出来る。彼はその中に述べて曰く、「社會的諸結合の下層人民に及ぼす結果と、その結果の我が種族の自然的衝動に對する障礙とは、かゝる對象に關し又一般に立法に關して、何等か完全に近きものを期待するに先立つて、それが現にあるより以上に一層明らかに光の中に齎されねばならない。そこで私はなほ我々を取捨ける暗黒の感情の直中であつて、かゝる對象に於て私に眞實と思はれる唯一の考へを書き纏めよう (Versammenschriften) といふ事」(S. I, 275.) と。そこには明らかに、新たな勞作に對する礎石が既に据ゑられてゐる。そして、之又批判版中の (Kr. A. IX, 205-237.) 收められたる、彼の「自然と社會の狀態に就ての斷篇」„Fragment über den Stand der Natur und der Gesellschaft.“ (一七八三年)こそ、正しくかゝる勞作に屬

する一半と考へらるべきものである。ところで、かくの如き「自然狀態」對「社會狀態」なる思考方式に結合せる思想の展開は、既に前掲の兩「覺書」に於ても見られる所であるが(彼は此の場合後者を表示するに *policiert*, *civilisiert*, *soziologisch* 等の言葉を用ひてゐる)、固よりそれは當時の思想界に於ける一般的特色なる、而も人類發展史 (Entwicklungsgeschichte) 的な背景をもてる思考方式を適用乃至反映せるものと言はねばならない。唯併しこれに關して一言するべきは、彼が必ずしも此等思考方式のものに捉はれる事なく、却つて相互的對應構造をもてる此の方式を通ずる事によつて、彼の當面せる而も矛盾に満てる人間社會の現實を謂はば媒介的に究明しようとする所にその重點を置いてゐると云ふ事である。此の事は直接此等「覺書」乃至「斷篇」に就て見れば容易に理解される點であるが、而もかくの如き彼の態度と關聯して我々の特に注意を拂はねばならぬのは、彼が漸次思考方式そのものの意味内容に彼の立場から轉釋を加へつゝあると云ふ事である。彼が前掲の「斷篇」に及んで、早くも「道德的狀態」„moralischer Zustand“ (Kr. A. IX, 226.) なる新方式を用ひてゐる事は、その内容規定の如何は兎も角として、かゝる方式の轉釋問題と關聯して興味ある問題であると云はねばならない。事實彼は此の「斷篇」に於て、その論點を著しく道德の究明へと移行せしめてゐるのであつて、我々はそこに、深い内面的な問題性の潜んでゐる事を看過し得ないのである。

扱てベスタロッチーは右の如く、「自然と社會の狀態に就ての斷篇」を以て、人類としての人間をその思索の中心に押し立てたわけであるが、此の事に關聯して注意すべきは、彼がかゝる大きな主題の追究にあつて、その解



決の手懸りを漸く讀書に求めようとするに至つたといふ事である。此の事は勿論、一面その交友關係からの刺戟乃至誘導によるものではあるが (Vgl. Kr. A. IX, 299f.)、併し他面より決定的には、その主題の性質より来る不可避的な要求であつたと云はねばならない。と云ふのは、何等かの意味に於て人間の歴史を追究せんとする者は、是非とも之に對する知識内容を先づ以て他の研究・所説に仰がねばならぬからである。而もかゝる意味に於て我々に興味あるのは、今日批判版の第九、第十の兩卷に收められた幾多の「讀書記録」; Bemerkungen zu Gelesenen Büchern<sup>(三七)</sup>であるが、その中こゝで特に我々の注意を拂はねばならぬのは、一七八五、六年の間及び一七八八年の兩度に互つて試みられたる、彼の閲讀書よりの拔萃である (Kr. A. IX, 297-435.; Kr. A. X, 19-28)。勿論此等一々の内容に立入つて、それが果して如何なる意義をもつかを適確に判定する事は極めて困難な事と云はねばならないが、併し彼が此等拔萃に時折書き添へた「人間に就ての覺書」、「人間に就ての試み」乃至「人間に就ての我が書」等の表題より推して (Vgl. Kr. A. IX, 347, 349, 356)、彼が此の間絶えず體系的な勞作への意圖を持ち續けてゐた事は、容易に之を認める事が出来る。のみならず、我々は一七八八年の草稿に記されたる「人類第二卷」(Kr. A. X, 19)なる表題によつて、彼がかゝる計畫を更に擴大して遂行しようとする意圖を有してゐた事を併せて窺ひ知る事が出来る。尤も此等の點に關しては、此の前後彼によつて認められたる私信を通じて、之を更に別の方面から考察する事も可能である。そして此の點決定的な關係をもつものとして、我々は再びチンツェンドルフ宛ての彼の書翰 (一七八五年、十二月十日附) を挙げねばならない。彼はその中で述べて曰く、「今や、

我等の自然の本來的根本衝動に關し、又今日まで人類をその様々の状態に於て、多少に拘らず幸・不幸ならしめたる一切の事柄の經驗と歴史に關して探究 (Nachforschungen) する事によつて、眞實なる人間指導の一般的理論を、それが今なほ私に明白になつてゐないやうに思はれるのに比べて、より一層明瞭且つ明確なる光の下に持ち來さうとする私の計畫が、此の卷 (小説第四部が意味されてゐる一譯者註) よりも、より一層私を忙殺せしめたる<sup>(三八)</sup> (S. I, 277. Sperrungen von Pestalozzi selbst.) と。尙此の點に關しては、別にミントル (Erich Münter) 宛ての彼の書翰 (四月三十日附) をも参照する事が出来るが (Vgl. H. Schönebaum: Pestalozzi — Kampf u. Klärung, 105.)、之を總じて言ひ得る事は、彼が此の前後人間乃至人類問題の體系的且つ歴史的究明に没頭しつゝある事を自らも亦確認してゐると云ふ事である。

尤も此の期に於ける彼の讀書の結局の意義は、それが何等か積極的な成果を直ちにもたらすと云ふ如き意味に於てよりは、却つてそれが彼の思索遂行上の不可避的な準備であつたと云ふ點により多く存したと見ねばならぬのであるが、併し此の間にあつても、なほ終始變らず彼を方向づけてゐた問題は、人間本來的「自然衝動」(Naturtrieb) 即ち彼の所謂「動物的自然」(tierische Natur) が果して如何なる根據によつて、又如何様にして道徳へと翻へされ來るかと思ふ事であつた。而してかの「人類の發展に於ける道徳的概念の成立に就て」"Über die Entstehung der sittlichen Begriffe in der Entwicklung der Menschheit. 1786/87?" (Kr. A. IX, 437-470.)<sup>(三十一)</sup>なる斷篇こそ、正しくかゝる問題の焦點を解明しようとしたものに外ならない。勿論之を内容的に見れば



それは當時の彼の閱讀書と幾多の接觸點をもつとは云へ、我々はそこになほ(特にその所論の前半—Kr. A. IX, 439—450 u. a.) 彼独自の思想の展開を見逃し得ない。尤も今此等一々の内容に立入る事は出来ないが、併し此處で一言して置かねばならぬ事は、彼が此の前後常に人間の自己克服 (Überwindung seiner selbst) を強調してゐると云ふ事である。<sup>(三十一)</sup> 我々は次に取上げられる第二の問題に於て再び此の點に觸れる機會をもつであらう。

以上は主としてシェーネバウムの研究を参照しつつ (H. Schönebaum: a. a. O. S. 97—110, 148 f., 170—197.) 述べて來たのであるが、茲で我々の附言して置かねばならぬ事は、「探究」の成立過程に關して從來明らかにせられてゐなかつた問題面がそこに取上げられてゐると云ふ事である。一體「探究」が一七九三年十二月に行はれたる、かのフィヒテとの會談を契機として、其の後三箇年の異常な苦心を経て成立したものである事は既に一般によく知られた事實であるが、併しそれ以前の事情に至つては從來尙統一のな解明は與へられてゐなかつたのである。ところが我々の考察し來つた所によれば、彼ベスタロッチーがかかる人間乃至人類問題に對して、包括的且つ徹底的な解明を加へようとする意圖と努力とを、極めて早くから而も前後一貫して持ち續けた事が明らかに知られるのである。のみならず「探究」の完成(一七九七年)に先立つ十年、即ち一七八七年に早くも一應の解決點に到達しようとしてゐる事が窺ひ知り得られるのである。尤もそこで問題となるのはかゝる事情に拘らず、當時決定的な完成を見るに至らなかつたのは何故であるかと云ふ事であるが、その點適確な事は今日尙明らかにはせられてゐない。唯我々の茲に考へ合せ得る事は、此の前後彼が小説「リーンハルト」の改作(一七九〇—一七九二年)や實際問題に對する諸論策 (Vgl. Kr. A. X, I—63.) の爲に多くの時間を費さねばならぬ事情に置かれたと

云ふ事及び佛國革命の勃發(一七八九年)以來餘りにも大きな社會的變動を自身経験せねばならなかつたと云ふ事である。尙よく吟味せられねばならぬ問題である。

ところで私は右に於てベスタロッチーがその人間乃至人類問題に對して、一應の解決點に到達しようとしてゐると云ふ事を述べたのであるが、その事は直ちに以て、我々の總に指摘したるグリニフィー哲学の根柢に横たはる難問の解消を意味するものではない。一言して置かねばならぬ點である。勿論此の事は前掲の「斷篇」の内容に立入つて見れば、自ら理解出来る事ではあるが、又次に考察される第二の問題によつてその間の決定的な事情を我々は知り得るであらう。

さて我々は爰に愈、第二の問題を考察すべき時期に到達したわけであるが、今それに先立つて、既に今迄に考察せられたるベスタロッチーの内面的な發展過程を改めて想起して見るに、我々はそこに著しく盛上れる二つの頂點を見出す事が出来る。即ちその一は「夕暮」によつて代表される淨福の世界であり、他の一は小説第三部及び第四部によつて代表される、極めて一面的なる現實主義の立場である。實際「夕暮」の高き内容が士官の哲學の峻嚴なる方式を通す事によつて、その潤いと輝きを失ひ來つてゐる事は否定し得べくもない事實であり、そこに纏て又極めて困難な問題が伏在してゐるわけでもあるが、その點は既に我々の指摘・論評して置いた如くである。ところがかゝる點に關しては、前段に關説した「人類の發展に於ける道德的概念の成立に就て」なる斷篇に於ても事情は全く同様であると云はねばならないが、更に、それは小説「リーンハルト」の改作(一七九〇—九



二年版)に當つても、猶依然として最後のな解決を見るには至つてゐない。

今その間の事情に就て少しく考察して見るに、一體此の小説の第二版は、その全般に亘つて初版よりも一層統一的に書き改められ、従つて又それと關聯して、初版とは自ら異つた姿相を呈するに至つてゐるが、特にその間に試みられた士官グリニフィーの修正こそ、我々の此處で注視せねばならぬ問題である。既に我々の承知してゐる如く、初版に現れたるグリニフィーに於ては、教育にしても將又立法にしても正しく同様に、謂はば下から而も連続的に最高目標への通路が開かれてゐるものと確信せられてゐたのであるが、今やその確信は根柢から揺り動かされようとしてゐる。即ち一面的な現實主義は謂はばその破綻に直面してゐるのである。事實彼はその立てる此岸の立場を以てしては到底越え得ない一つの深い「間隙」Lücke (Vgl. Kr. A. IV, 231-235, 424-425)を益益明瞭に認め來つてゐるのである。而もそれは人間の低き自然に撞著せる、かの悲觀的な底流と正に相呼應するものと言はねばならない。かくて今や結局宗教が教育並に正義 (Gerechtigkeit) の根柢を充足するものとして、初版(第三、第四部)よりも一層積極的な、その存在意義を確保するに至る (Vgl. Kr. A. IV, 410f.)。固より是等、主として士官を通じて現れ來る修正は、結局ベスタロッチー自身の自己修正であると思はるべきであり、我々も亦そこに從來の稍、不信仰的な彼の態度に注意すべき變化の起り來つてゐるのを察知する事が出来る。併しながら此等の修正乃至變化もなほ、初版(第三、第四部)以來の基調なる現實主義的な、それ故に又、餘りにも此岸的なその根本方向を脱却し得てゐるとは言ひ得ない。従つて此の場合、ベスタロッチーは一の重大な轉

換面に遭遇しつつも、なほ極めて複雑なる動搖渦中にあるものと斷ぜざるを得ない。而して此の類稀なる眞摯な探究者ベスタロッチーをして、遂にかの「非基督教」(Nichtchristentum)なる最後の言葉を告白せしめた者こそ、實にニコロヴィウス (Ludwig Nicolovius) その人である。我々はその點尙少しく立入つて考察せねばならない。

一體ニコロヴィウスがベスタロッチーと直接に相知つたのは、彼がシュトルベルグ伯 (Graf Friedrich Leopold Stolberg) 及び若きヤコブ (Georg Jacobi) と共に、イタリー旅行の際にチュリッヒに滞在した時(一七九一年夏)の事である。當時二十四歳であつたニコロヴィウスは、かねて關心を寄せてゐた小説「リーンハルト」の作者ベスタロッチーと、此の機會に相知らうとする希望をもつてゐたのである。ところが此の時丁度、ベスタロッチーも亦チュリッヒに居合はせたので、事情は極めて好都合に運び、かくて兩人は相携へてノイホーフに來り、而も其處に於て、恰も年來の友の如く互に心情を吐露して語り合つたのである。以來此の兩人は二度と相會する機會に恵まれる事はなかつたのであるが、併し一度深く相觸れたる二つの魂は、その後専ら書翰を通じて相互にその交りを温め續けたのである。而してその關係たるや、之をベスタロッチーの側から見れば、當時漸く老境と孤獨の感情の中に不遇なる人生を啣ちつゝあつた彼は、この若き友に於て眞の知己を見出し得たのみでなく、更に頼もしくも信頼すべき、自己の精神的後繼者を期待する所があつたのである。而して之を他面ニコロヴィウスの側から見れば、當時ひたすら若き情熱を以て人生の-high 意義を追ひ求めつゝあつた彼は、ベ



スタロッチーに於て、不遇なる身にも拘らず、尙その全存在より迸り出づる崇高なる人間性とそれに基ける眞摯なる抱負とに胸打たれたのである。だが斯くの如き彼の敬慕にも拘らず、彼がベスタロッチーに於て危懼を感じざるを得なかつた唯一の點は、その餘りにも極端なる人間の職業的堪能の強調と過度の評價の故に——小説「リンハルト」殊にその第二版が問題の中心に置かれてゐるのであるが——却つて人間に於ける尊き純粹性の傷けられる危険の存すると云ふ事であつた。而も此の事はベスタロッチー自身の信仰問題、殊にその基督教に對する自由解釋の問題と深い内面的關聯を持つてゐたのである。そして恐らくは彼ニコロヴィウスが、此等の點に關して自己の所見をベスタロッチーの許に書き送つたものと考へられる。<sup>(三十五)</sup>ところで彼の有名なる、ニコロヴィウス宛てのベスタロッチーの書翰(一七九三年)こそ、正しくかゝる事情に對應して、彼ベスタロッチーが自己の立場と見解とを、その在るがままの實狀に即して大膽率直に披瀝したものに外ならない。我々は今その書翰を、その重要性の故に、煩瑣を厭はず譯出する事にしたいと思ふ。曰く、

「友よ、私は——己が生活の窮迫の中に擾亂されて——最も賢く且つ最も勝れた人々が、その本質を内面的に淨化する事を生活の第一の務めとなす事によつて高き力を汲み上げて來る、かの純粹なる源泉には殆んど口づけする事がなかつた。

嗚乎、我が生活の一切の營みは我欲と凡俗な性向によつて不純にされてしまつた。

一體私は年少の頃から凡そ良いものには何でも感應し易く且つ又多くの事柄に對して生き生きと心惹かれたの

であるが、併し私の據つて働き拔かねばならなかつた世の陋屋(das Kot der Welt)は、私の知らざる又私の陶冶づけられざる一の別個な秩序をもつてゐた。私は自己の若々しき成長の遂げられる批判的な時期に於て身に餘る重荷を背負はされ、その結果混亂に陥られ——而も此の上なく不満且つ不快にさせられた——かくて私は、身を宗教に引寄せせる感情と反對にそれから引離す判斷の間を動搖しつゝ我が時代の死の道を歩み來つた。尤も私は自己の最も内奥に於て宗教の本質的なものを冷却せしめたとは云へ、固よりそれは宗教に反對したわけではない。私は神と人間の關係に關する机上の學問(Papierwissenschaft)は之を輕視した——同様に又かゝる對象に關する貧弱な斯學の補助たらしめんとして彼のラフヴェル(Lavater)の試みたる人相術(Winkelperimente)をも輕視した。

だが私は實際に、眞實なる神の畏敬が物靜かにして氣高き者に分ち與へる、かの本質的な力を失つてしまつたのである——即ち無思慮にも、此の良き核心の外殻を以て何等取るに足らぬものと身勝手に決めてしまひ、而も亦その核心をも、(何等かその様々な關係に於ける壓迫的な挾挿物を交へずに、純粹に、刺戟的に)専ら慰藉乃至満足を確保するものとして、自己の周圍に見出す事は如何なる場合にもあり得なかつた。其故私は自身の感情からすれば、此の時期にあつては、人間力をその最大の純粹性にまで發揮せしめる本質的なものに於て、大いに後退せしめられてゐたわけである。

而も格別に、我が未熟な教育的夢想の眩惑が自己の内なる靜かま力を滅殺してしまつた。私はかゝる對象に於



ける經濟的缺陷によつて、半生の間一の失策に打ち碎かれた奴僕であつた。而も私はこれが一面的眞理を以て遂に我が偶像にまで成し上げたのである。而してかゝる偶像奉仕の結果が、身の上に降り注ぎ來つた名狀し難き不幸の中に於て、我が若き日の僅に殘れる宗教的感情の力が消え失せたのである。

友よ、加くして私は、自己の落ち込んだ沼地の中で暫くは全く立ち竦んでゐた。だが兎角する中、かゝる状態の窮迫とその中に於ける日毎の經驗とが、自己の内の一の殆んど情熱的な緊要事を發展せしめた。即ちそれは、私の没頭し來つた此の世の陋屋のもつ秩序を明らかにしようとする事と、更に人々が私の如く爾く沈淪する事なく立派に切り抜け得る如き、其の方途を光の中に齎さうとする事とであつた。斯くの如き、私の感情によつて限界づけられた觀點が今や唯一のものとなり、而もそれに對して、私は自己の最も内奥に於て、一の確固たる、生動的なる且つ間斷なき關心を感じたのである。

かくて私の身を捧げたる、或は寧ろその爲にすべて私の關心を消盡せしめたる眞理の種類たるや、それ故、元來人間を内面的に而も最も純粹に高める底の最高目標ではなく、寧ろそれは、地上生活の本來的欲求に對する彼等の良き陶冶に過ぎなかつたのである。

そこで私の打明けねばならぬ事は、我が眞理が地上の陋屋に結合されて居り、従つて又それが、信仰と愛の、以て人類を高め得る如きかの天使の道 (Engelgang) の遙か下方にあると云ふ事である。

君はグリニフの心境を知つて居られる筈であるが——あれこそ私の心境である——私は不信仰なのである。

——尤もそれは眞理に對する不信仰を尊ぶが故ではなく——却つて身の生活體驗と云ふ此の太陽が——信仰の淨福をば多方面に互つて、自己の最も奥底の心情から逸脱せしめたが故である。

かくて私は自己の運命に促されて、基督教をば、肉に對する靈の高揚を説ける教理の至醇にして至高なるものに外ならぬと考へるに至つた。而も此の教理を以て、私は我々の自然 (unsere Natur) をして、その本質の奥底に於て眞實なる醇化に近づけんとする、——或は私流によりはつきりと言ひ表はすならば——至醇なる愛の感情の内面的發展によつて感性に對する理性の支配にまで到達せんとする、偉大なる秘訣にして唯一可能な手段であると考へたのである。自己の信する所によれば斯くの如きものこそ正しく基督教の本質なのである——だが私は多くの人間がその自然 (ihre Natur nach) 能く基督者たり得るものとは信じない——私の信する所によれば、人類の大部分 (das Gros der Menschheit) がかゝる一般的内面的醇化に對して能力づけられて居らぬ事、恰も彼等が一般に世俗的な王冠を戴き得るものとは自身信じ得ないと同様である。

自己の信する所によれば、基督教こそ正しく地上の鹽分 (das Salz der Erde) である——だが如何に此の鹽分を珍重しようとも、而も尙私の信する事は、金や石や砂や眞珠が此の鹽分からは獨立にそれ等の價値を擔つてゐると云ふ事、及びすべて此等の物の秩序と效用性とが之又それから獨立に眼中に把持されねばならぬと云ふ事である——即ち私の信する事は、此の世のすべての陋屋がその秩序とその權利とを基督教からは獨立に保持してゐると云ふ事である——尤も友よ、私の言ふ眞理がかゝる權利とかゝる秩序の探究に限界づけられてゐるが故



に、私は自己の観點の限界を全く感ずるものである。だが然る時又身に豫感される事は、我が聲が恰も沙漠に於て呼び叫ぶ者の聲の如く、自己に従ひ來る他の者にその行く手を用意するかの如く響くと云ふ事である。勿論私は屢、果して如何になすべきか、又何處へ往くべきかを自身も亦知らぬかの如くであつた。だが私の心は、己がその都度語る言葉の方向へと、不可抗的な力を以て我が身を奪ひ去つて行つた。かくて身を拘束する此の限界の魔力に自ら惱みつゝも、なほ自身證言し得る事は、我が乗り越え得ざる此の圈内にあつて、己が語る言々句々のうちには實に眞摯なものが存すると云ふ事である。斯様なわけで、私は自身の完成からは遠ざかり、更に、完成されたる人類にして始めて能く登攀し得べく豫感される彼の高所をも知る事がないのである。

友よ、此の度は自己の非基督教 (Nichtchristentum) に就ては以上で筆を擱く事にしよう。」

(August Israel: Pestalozzi-Bibliographie, I. Bd. S. 6-10. \* 聖書と考へらるべきである。\* 當時の學派神學 Schult-heologie が意味されてゐる。\*\*\* 譯語に於て示して置いた如く、das physiognomische Experiment が意味されてゐる。尙ベスタロッチーはラフアーテルとは非常に深い交友關係にあつたに拘らず、宗教に關する限り、彼は寧ろ對ラフアーテル的な立場に於て自己の成長を遂げて行つたと見ることが出来る。譯文中の諸所に附されたる強調點はすべて譯者に據るものである。——譯者註。)

我々は殆んど何等の説明を要せずして、此の書翰から直接に而も極めて明瞭に事態を理解する事が出来る。ただ此處に重要と思はれる點に就て少しく關説するならば、彼の實踐と思想の展開は、正しく謂ふ所の「世の陋

屋」即ち民衆の生活と終始運命を共にし、ひたすら此の一線を進む事によつて進められて來たのであるが、併しその事の故に、彼ベスタロッチーは自己の宗教的生命の破綻乃至危機に當面せざるを得なかつたのである。そして今や彼自らも亦、その根本的な轉回點に置かれてゐる事を深く自覺し來つてゐるのである。だが此の時にあつて彼の改めて確認してゐる事は、彼が民衆生活の直中に於て求め來つた眞理には自らなる限界が存すると云ふ事、而もそれと同時に、その中には宗教からは別個な独自の價値と秩序とが存すると云ふ事である。言極めて簡單ではあるが、併し我々の正しく理解せねばならぬ重要な點である。と云ふのは其處にこそ正しく、當時の民衆の在り方其自身の由つて來る根據が深く凝視せられてゐるからである。従つて、それはかのヤコビー (Friedrich Heinrich Jacobi) の批評を借るならば、「餘りにも唯物主義的」(zu materialistisch) であると言はねばならぬとは云へ、<sup>(三十六)</sup> 而もなほその物質たるや、單に直接的な所與としてのそれではなく、却つて我々人間の存在に深く根ざせる、而も複雑多様な時代的媒介構造をもてる、謂はば歴史的物质である事を我々は知らねばならない。<sup>(三十七)</sup> 彼ベスタロッチーが、一定の限界の下に於てとは云へ、その點なほ強調せざるを得なかつた所以である。<sup>(三十八)</sup>

と云へ、<sup>(三十九)</sup> 併し彼の極めて特異なる體乃至非基督教なる告白の底深く、宗教の本來の位置を自覺するに至つたのであるが、併し彼の極めて特異なる體験經歷は、その宗教觀否基督教觀をして——勿論此處では何等か世俗的な既成宗教よりはより原理的なものが問題なのであるが——自ら傳統的なそれとは異つたものとなしてゐる。即ちそこでは、宗教は専ら人間の内面的醇



化と云ふ立場からして領解せられてゐるのみでなく、謂ふ所の肉に對する靈の高揚乃至感性に對する理性の支配の如き自己克服的なものに至つては、福音書に基くと云はんより寧ろストア的なものへの親近を思はせるに十分である。<sup>(三十九)</sup>従つてそれは、基督教本來の倫理的性格を考慮に入れてしても、尙且つ一面的な道德的見地に偏したものと云はねばならぬであらう。ましてや、かの神の啓示に深く參する底の宗教の極致からはなほ隔るものと斷ぜざるを得ないであらう。だが斯くの如き客觀的な不十全性にも拘らず、之をベスタロッチー自身の主觀の側から見る時は、そこに限りなく深い意味が體驗せられてゐると云はねばならない。そして一見奇異にすら感ぜられる、かの基督教の最高理想に對する意識的な斷念の如きも、かゝる觀點から理解する時、一層眞摯且つ眞實なものとして我々の裡に強く響き來るを覺えるのである。洵に、それは一面彼自身の體驗より迸る悲痛な叫びではあるが、同時に又、それは只管民衆と共に現實の課題の中に没せざる者の必然に撞著せざるを得ない、辛くも尊きアポリヤなのである。我々は後の「探究」に於て、かの基督の山上の垂訓 (Matthäus, K. 5-7) 中に見らるる如き、「完全に純粹な道德」(eine ganz reine Sittlichkeit) を斷念せる彼ベスタロッチーを (Kr. A. XII, 109 ff.)、既に此處に見る事が出来る。事態は正しく同一であると云ふべく、而もそこには、如何ともなし難き現實に對する深き洞察が横はつてゐるのである。そしてその限り謂ふ所の斷念たるや、何等か單純なる絶縁ではなくして、正しく、此方よりの斷念によつて、却つてその底に深く神の愛に觸れるものと云ふべきではなからうか。我々の再考再思せねばならぬ點である。

以上ニコロヴィウス宛ての書翰を手懸りとして我々の考察し來つた所より歸結し得る事は、凡そ次の二點である。即ちその一は、此處より逆觀する事によつて、嚮に我々の考察乃至論評したるグリニフィー哲學の意義と限界とが一層明らかに理解し得られると云ふ事であり、更に他の一は、此處からして、今後ベスタロッチーの進べき方向が既にぼゞ察知し得られると云ふ事である。今や疑ひもなく、ベスタロッチーはかの「夕暮」以來久しく鳴りやめる心の弦を、再び自己の胸裏深く高鳴らせてゐると言はねばならない。<sup>(四十七)</sup>

我々は右の考察に於て、ニコロヴィウスとベスタロッチーの思想的交渉關係を専ら個人的側面から見來つたのであるが、一般に人の思想と思想の觸れ合ひが何等か單に直接的なそれに止まらず、却つてその底には、無限に深い歴史的乃至社會的な呼籲關係が既に入り來つてゐるものである事を思ふ時、此等の交渉が更にその史的背景に互つて追求考察せらるべきは極めて當然な事と言はねばならない。而もかゝる意味に於て、此の兩者の交渉關係を、その思想史的乃至精神史的背景からして、極めて詳細に而も最も意味深く把握・理解した者として、我々は此處にかのシュタインを擧げなければならない。

一體シュタインの着眼が、ベスタロッチーの思想的發展並びに形成(特に此處では「夕暮」——小説「リオンハルト」——「探究」——「方法」と云ふ發展系列がその主要な考察對象となすのであるが)に對する、カント哲學の關聯面並びにその意義を究明しようとする所に存した事は、前既に我々の關説して置いた如くである。而も彼がかゝる着眼點を實際に具體化するに當つて、先づ以て「夕暮」の一元的な謂はば淨福主義に對して、小説「リオンハルト」の二元的な現實主義を對比的に注視し、以てベスタロッチー自身の側にその主題遂行上の重要な論據を求めようとしてゐる事も亦、我々の其の都度指摘乃至關説して置いた所よりして略々察知し得られる點であると思ふ。そして又我々としても、小説「リオンハルト」に於ける



グリュンフェー哲学の意義と問題性を考察するに當つては、彼の所説に負ふ所が多かつたわけである。

ところがかゝる考察から歸結し得る事は「夕暮」の高級精神と小説「リンハルト」の現實主義とが更に「探究」を通じて「方法」へと綜合・展開せられる爲には、何よりも先づ人間に於ける高次の領域とその根柢が再確認せられる事と更にそこからして人間生活の合理的形成と云ふ彼の課題が改めて見直される事とが、必須不可欠な二條件であると云ふ事であつた。そしてその點、之又主としてシュタインの研究に導かれながら、我々の既に摘出して置いた所である。だがかゝる條件の充足は、彼シュタインの見解に従へば、之を専らペスタロッチー自身の側のみ求めるは謂れなき事であり、そこには是非とも斯る綜合に對する促進的な勢力として當時（一七九〇年代）の客觀的情勢特に思想界のそれが十分考慮の中に置かれねばならぬと考へられるのである。殊に「探究」の成立から「方法」の確立に至る間に見られる如き、かの根本概念の力強き解明とその内容的なる純化を思ふ時、一層爾か考へざるを得ない立場に置かれるわけである。そして正しく此處に彼が客觀的な側面からの考察をも併せて重視する所以が存する。而も彼はかゝる立場からして、當面問題の一七九〇年代に於ける獨逸の精神運動特にその瑞西への影響を注視し、且つ之に詳細なる考察を加へてゐる。固より此處に謂ふ所の運動は爾かく一様なものではなく、そこには一方、嘗て「夕暮」成立當時のペスタロッチーを力強く動かし而も今や漸く成熟し來つた、彼の「疾風怒濤運動」(die Sturm und Drangbewegung)の流れがあるに對して、他方そこにはこれとは自ら異つた側面(殊にその合理的な面に於て)をもてる、カント哲学の流が見られるのである。併し此の兩者は、その著しき相異乃至對立にも拘らず、人間に於ける高次の領域に對する至大なる關心とその根本的な要請とに至つては、全然共通な地盤に立つてゐたのみでなく、更に此の年代に及んでは、漸く一個の「獨逸運動」(die deutsche Bewegung (Hermann Noh)と呼ばれるべきものに相互に直接結合しようとする方向をすら辿つてゐたのである。而も此等の運動、就中カント哲学の瑞西への影響

は漸次高まりつつあつたと見られる。事態は正しく斯くの如くであつた。従つて我々は極めて容易に、當面の問題たるペスタロッチーとニコロヴィウスとの思想的交渉、更にニコロヴィウスを介してのヤコビー(Friedrich Heinrich Jacobi)との思想的交渉、或は此の前後行はれたる彼の獨逸への旅行(一七九二年春)等のもつ、極めて深い史的意義を理解する事が出来るわけである。而も同時に又、我々はかかる事情と關聯的に把握する事によつて、始めてかの若きカント學徒フイヒテとの交渉關係、特にその間に行はれた會談(一七九三年十二月)のもつ史的意義を一層深く理解する事が出来るものと言ふべきであらう。従つて又、我々はかかる一聯の事實を背景づけたる客觀的事態のうちこそ、正しく、先に我々の指摘したるペスタロッチー自身の側に於ける問題性の克服と更にその綜合に對する促進的な契機とをつきとめ得るものと言はねばならない。實にシュタインの着眼と苦心の存する所である。(A. Stein: Pestalozzi und die Kantische Philosophie, 1927, Einleitung, S. 77-165)

以上は當面の問題に關する限りに於て、シュタインの着眼と所説の大體の素描を試みたのであるが、固よりそれは筆者の研究の能く及び得る範圍ではなく、ましてや是を以て、直ちに何等か決定的な事を言はんとするものではない。唯彼の勝れた考察態度と方法、殊にその精神的背景に對する考察面が自ら我々の所論の不備を補ひ得るであらうと考へたが故に、敢て右の如く關説したわけである。

註

- (1) H. Schönebaum: Der junge Pestalozzi (1746—1782), 1927, S. 226.  
 (11) Derselbe: Pestalozzi, Kampf und Klärung (1782—1797), 1931.

即ち彼はその著書の表題の中に於て、かゝる事を象徴してゐる。

第三章 小説より「探究」への展開



- (III) P. Natorp: Joh. H. Pestalozzi (Bd. I: Pestalozzis Leben und Wirken, 2. Aufl. 1910.)  
 derselbe: Gesammelte Abhandlungen zur Sozialpädagogik, 2. Aufl. 1922.  
 derselbe: „Pestalozzis Pädagogik“ in Reins Enzyklopädischen Handbuch der Pädagogik, 2. Aufl. Bd. VI.  
 derselbe: Pestalozzi, sein Leben und seine Ideen, 6. Aufl. 1931.  
 derselbe: Der Idealismus Pestalozzis, 1919.  
 ナットンの編輯として且つ譯者としての體々あるなどであるが、彼等として著して、最後の「ペスタロッチーの思想主義」に於て十分發達してその名譽を高くせられた。
- (IV) H. Leser: Johann Heinrich Pestalozzi, 1908, besonders S. 1—28.  
 Vgl. A. Stein: Pestalozzi und die Kantische Philosophie, 1927, S. 62.  
 (V) A. Heubaum: J. Heint. Pestalozzi, 2. Aufl. 1920.  
 (VI) Fr. Delekat: Johann Heinrich Pestalozzi, 2. Aufl. 1928, S. 55 f., 99—101, 107—111, 119—214.  
 (VII) A. Stein: a. a. O. S. XII, 52—77, 110—165, 168 ff.  
 (VIII) P. Wernle: Pestalozzi und die Religion, 1927.  
 (IX) derselbe: Der Schweizerische Protestantismus im XVIII. Jahrhundert, 3 Bde., 1923—1925.  
 (X) K. Riedel: Pestalozzis Bildungslehre in ihrer Entwicklung, 1928, S. 4—68, 97—108.

- (XI) H. Schönebaum: Der junge Pestalozzi, 1927.  
 derselbe: Pestalozzi, Kampf und Klärung (1782—1797), 1931  
 derselbe: Pestalozzi—Kennen, Können, Wollen (1797—1809), 1937.  
 derselbe: Pestalozzi, Ernte und Ausklang (1810—1827)  
 (XII) E. Spranger: „Pestalozzis „Nachforschungen“, 1935.  
 (XIII) 此の當時著述家や教育家の間に、文藝的な著作を以て民衆教育に役立てようとする種々なる試みの存した事は、ペスタロッチの指導に於ける如くである。  
 Vgl. A. Heubaum: J. Heint. Pestalozzi, 2. Aufl. 1920, S. 73—75.  
 (XIV) 此の試みは、ロマンティックな試みをなしてゐる。  
 W. Rost: Pestalozzis Lienhard und Gertrud, 1909.  
 (XV) 下層民の教育に對してペスタロッチがロマンティックな樂觀論に立っている事は「ヒミナル」中の彼の言葉から明らかに知れる事が出来る (Collection complète des Oeuvres de J. J. Rousseau, Genève 1782, Tome VII, P. 48, 某段、文庫「ヒミナル」第一巻、四九—五〇頁)。  
 尙此の點に關してはペターゼンの所説を参照する事が出来る (P. Petersen: Allgemeine Erziehungswissenschaft, 1924, S. 1—3.)  
 (XVI) ホムブスは、此等如實な人間像を以て、これを「最も純粹な自然」(reinste Natur) であると稱してゐる。  
 (A. Heubaum: a. a. O. S. 87 f.)



尙この小説の擔を現實的な歴史的 성격の詳細については左の書を参照のこと。

Mathilde Mayer: Die positive Moral bei Pestalozzi (von 1766 bis 1797.) S. 50—63.

(Die Sozialstruktur des Dorfes Bonnal in „Lienhard und Gertrud“——Bauernwirtschaft und beginnende Industrialisierung)

- (十八) 此の點は「エミール」序文中に明らかである。彼はそこで此の書の眼目が「實行の容易」(la facilité de l'exécution) と云ふ點でではなく、却つてその「計畫の絶對的善」(la bonté absolue du projet) なる點に存する事を明確にしてゐる。即ち純粹なる壽命を意圖してゐるわけである。但し爰に云ふ純粹とは、前項の註に見られる如きものとは自らその意味内容を異にするものである (Émile, Préface 6—8. 岩波文庫「エミール」第一篇、一三—一四頁)。尙かゝる點に關しては、ノットナーの所説參照 (W. Filtner: Systematische Pädagogik, 1933. S. 105 f.)。

- (十九) 此の著作の出版されたのは一七八三年であるが、併しその主要部分は早くも一七八一年に成立してゐたのである。左記參照。

A. Heubäum: a. a. O. S. 97.

H. Schönebaum: Pestalozzi, Kampf und Klärung, 1931. S. 98 ff.

尙彼は此の著作に於て、小説第一及び第二部よりはより一層深刻に、高次の自然と低次の自然の現實に於ける混在の問題に撞着してゐたのである。

Vgl. Fr. Delekat: Johann Heinrich Pestalozzi, 2. Aufl. 1928. S. 142—144, 146 f.

- (二十) Fr. Delekat: a. a. O. S. 161 ff.

(二十一) ノットナーの立場に就て論評したものとて、我々は次の如きものを參照する事が出来る。

Fr. Delekat: a. a. O. besonders S. 168 ff.

A. Stein: Pestalozzi und die Kantische Philosophie, 1927. Einleitung (X ff.) S. 52—77. u. a.

P. Wernle: Pestalozzi und die Religion, 1927. besonders S. 53—59.

K. Riedel: Pestalozzis Bildungslehre in ihrer Entwicklung, 1928. S. 50—56, 80—86, 97—108.

- (二十二) 此の場合我々は、小説第四部の序文の中に述べられてゐる次の句を想起する事が出来る。併せ考ふべきである。(引用の必要上特にイタリック體に書き改めた事を斷つて置く)

„Ich versucht zu zeigen, warum ist es so? Und wie kann man machen, dass es anders werde?“

- (二十三) 當時瑞西の各地に於て漸く起りつつあつた工業化、特に紡績工業の勃興といふ現實的背景を擔つてゐるボッナル村に於て、マイエルの存在が極めて重要な意義をもつものであることは、特にマテイルド・マイエルの説く如くである。ヌスタロッターの思想展開の上に於て、特に「方法」展開の上に於て注視すべき點である。

Vgl. Mathilde Mayer: Die positive Moral bei Pestalozzi (von 1766 bis 1797.), Vorwort, S. 50—62.

- (二十四) 往々にして、ヌスタロッターには學校の積極的な位置づけが缺如してゐるかの如く誤解されてゐるが、併し彼にあつては學校一般の否定が問題であつたのではなく、却つて正しく學校の新しい位置附が問題であつたのである。我々の注意せねばならぬ點である。

- (二十五) 「ヌスタロッターに於ける「秩序」なる概念に特別な注意を拂ひ、その陶冶的意義を明らかにした者として、我々

第三章 小説より「探究」への展開



はかのリーダーを擧げなければならない。而して彼リーダーがベスタロッチの陶冶思想を把握するに當つて、の中核概念(内的靜平、諸力の均衡、秩序、個人的地位)を以てせる事は前既に關説した如くであるが、彼は特に、當時の教育思想上の二つの流なる「自由の教育學」Freiheitpädagogik (ルツソーによつて代表される)と「秩序の教育學」Ordnungspädagogik (ライニッツ及びヨルフの流を汲めるズルツェル J. G. Sulzer によつて代表される)とがベスタロッチに於て綜合せられてゐると見てゐる。併せて關説して置かねばならぬ點である (Vgl. K. Riedel: a. a. O. S. 18, 72 ff., 81 f. u. a.)。尤もかゝる「秩序」の問題に關しては、シュタインの如きは極めて低く評價して居り、その點、なほ吟味するべき問題がないわけでもない (Vgl. A. Stein: a. a. O. besonders S. 58 f.)。

(二十六) かゝる點が後、「作業學校」(Arbeitschule)の主張として繼承發展され、以て今日に及んでゐる事は既に一般に知られてゐる事柄である。たゞ此處で我々の注意せねばならぬ事は、既に本文中に於ても述べて置いた如く、それが彼の生活圏の思想に即して、より根本的に理解せられねばならぬと云ふ事である。特に一言して置く所以である。

(二十七) ベスタロッチに於て「職業陶冶」(Berufsbildung)と「人間陶冶」(Menschenbildung)とが矛盾對立するものでないとはホイペウムの特指してゐる所であり (A. Heubaum: a. a. O. S. 141 ff.)、我々も亦一應その所論を認めねばならぬと思ふが、而もなほ依然として問題は殘されてゐると言はねばならぬであらう。そして此の點は本文中に於て漸次明らかにせられるであらう。

(二十八) 一體此の點に關しては從來二つの異つた見方が存する。即ちその一は、此の間に於ける根本的な問題性の所在を

認めるものであつて、多くは發展史的な考察態度を採る者に於て見られるものである。而してその二は、かゝる問題性の所在を輕視乃至無視するのみならず、却つて彼ベスタロッチの確信の連續性を強調するものであつて、ダイゲットやナトルプの如き組織論的な考察態度を採る者に於て見られるものである。勿論私は前者の見解に妥當性を認めるものであるが、此の點、諸家の見解を考慮し且つ在り得る可能的な場合を種々列擧して立入つた所論をなしてゐるのはかのシュタインである。我々の參照せねばならぬものである (A. Stein: a. a. O. besonders S. 60—63)。

(二十九) 此の前後彼の人間觀に大きな變化の存した事は多く認められてゐる所である。次に二、三例を擧げて置く事とする。

A. Heubaum: a. a. O. S. 149.

P. Wernle: a. a. O. S. 53 f., 58 f., 59 ff.

K. Riedel: a. a. O. S. 56 f.

(三十) ベスタロッチは「ゲルトルード子女教育法」の中で (M. III, 136)、彼の長きノイホーフ時代を回顧して、三十年來全く讀書をした事がないと云ふ事を言つてゐるが、それが文字通りに理解せらるべきでない事は既に明らかにせられてゐる事實である。而も我々は當面問題の「讀書記録」によつて一層その事實を確め得るのみでなく、更に彼が時代思潮と絶えざる接觸を保つてゐた事をも窺ひ知る事が出来るわけである。

(三十一) シェーネブウムの研究によれば、從來その所屬の明らかでなかつた二つの斷篇、即ち「地方道徳の價值」(der Wert der Landesitten)と「何時か社會に於ける状態が林野に於ける状態より良くなるのであるか?」(Wenn

第三章 小説より「探究」への展開



ist der Zustand in der Societet besser als der im Wald?)」の二つが、此の「人類の發展に於ける道德的概念の成立に就て」と云ふ大きな構想の下に屬すべきものと考へられるのである。勿論その際、前二者の成立年代もそれと關係的に更新される結果となるわけである(Verl. hierzu Kr. A. I, 191—198, 199—202; Kr. A. IX, Vorwort; H. Schönebaum: a. a. O. S. 109, 242.)。

(三十一) Verl. H. Schönebaum: a. a. O. S. 180—190.

(三十三) 何故ヘスタロッターが此の小説を改作するに至つたか、その根據は今日なほ明らかになされてゐないが、之に對してシエーネハウムは、レオポルド大公(Großherzog Leopold von Toskana)との關係或は例の「家庭福祉増進協會」(Gesellschaft zur Beförderung häuslicher und sittlicher Glückseligkeit)との關係の下に理解せるべき事を示唆して居る(H. Schönebaum: a. a. O. S. 96 ff.)。

(三十四) H. Schönebaum: a. a. O. S. 73—77.

(三十五) A. Stein: a. a. O. besonders S. 114 ff.

(三十六) 此の批評は、直接ヘスタロッターに宛てられたヤコビーの書翰(一七九四年三月二十四日附)中に見られるものである。我々は此の書翰の全文をシテタインのヘスタロッター研究(Stein: a. a. O. S. 121 ff.)の中に於て見る事が出来るが、それは兩者の思想的交渉を知る上に極めて重要な文献である。特にその到切な批評に至つては我々の十分注意を拂はねばならぬ點である。次にその中重要な一部を抄譯したいと思ふ。

「私は貴方の著書に於て猶依然として非難せねばならぬ點を、可成り明瞭に一言で言ひ表す事が出来るでせう。唯此の言葉が甚しく誤解されないやう豫め希望致すわけです。そこで私の言はんとする所は、それがその内面上、

依然として餘りにも唯物主義的(zu materialistisch)のやうに私には思はれると云ふ事であります。勿論斯様な非難は第二版に對しては初版の場合よりは軽減されるわけですが、併し第二版に於ても尙結局、之を總じて物質的な幸福(Physisches Wohlsin)が第一の原理にして又寫極の目的であり、(それに對して)内面的な道德と宗教とは或は手段としてか乃至は附加物として考察せられてゐるに過ぎません。そして此等のものは貴方の建前に於ては、その最も内面的な概念上(seinem innersten Begriffe nach)從屬的な(untergeordnete)ものであり、而もそれ故に又、往々此等のものをより以上に引上げようとして貴方の拂はれたるあらゆる努力は、私の感情から判すれば、眞の効果を收むるまでには至つて居らないのであります。云々」(強調點はヤコビー自身に據るもの)。

(三十七)

かゝる點に就ては、我々は柳田謙十郎教授の論文「主體の哲學と倫理の問題」(雜誌「哲學研究」第二六二號乃至二六四號所載)、特にその唯物論に關する所説の部分参照する事が出来る。勿論此の論文はヘスタロッターには直接何等關係のないものではあるが、併し當面の問題に關する限り、極めて有益な示唆を與へるものである。斯様に民衆生活の獨自な價值と秩序とを確信し且つ之を徹底的に追究したヘスタロッターの立場について、特に

(三十八)

注意を拂つたものとして参考すべきはマチルド・マイヤーの著作である(Mathilde Mayer: a. a. O.)。これは主として小説「リオンハルトとゲルトロッド」を中心とした研究であるが、ヘスタロッターの思想に於ける重要な面として、現實的(實際的)道德(positive Moral)乃至集團的道德(kollektive Moral)といふ角度から、之に歴史的且つ組織的な考察を加へたものである。その詳細は該書の各論について見るべきであるが、總括的な見解は端書及び序論(S. 14—32)について見れば明らかである。

第三章 小説より「探究」への展開



由來普遍性・絶對性を最後の據點とする倫理の立場から、かゝる謂はば日常的なモラルはその特殊性・相對性の故に不當に輕視乃至無視されがちであつたが、我々はベスタロッチーと共に再びかゝるモラルのもつ意義について徹底的に考へて見る必要があるであらう。殊に各方面に於て新たなモラルの要請されてゐる我々の時代に於て一層その必要があるであらう。而も私は謂ふ所の普遍性・絶對性も、特殊・相對的なものを避けずして、却つてその直中を通すことによつてはじめて實にせられるものであることを深く確信するものである。

(三十九)

かゝる傾向は、既にウェルンレやシェーネバウムの明瞭に指摘してゐる所である。

P. Wernle: a. a. O. S. 68.

H. Schönebaum: a. a. O. S. 159 f.

(四十) 當面問題のニコロヴィウス宛てのベスタロッチーの書翰に關する諸家の見解に就ては左記を參照。

Fr. Deikat: a. a. O. S. 70—76.

P. Wernle: a. a. O. Vorwort, S. 64—70.

H. Schönebaum: a. a. O. S. 136 ff.

尙右のシェーネバウムの著書はこの前後に於けるベスタロッチーの宗教觀の推移を詳細且つ適確に論じてゐる。

參照すべきである (H. Schönebaum: a. a. O. S. 144—170.)。

尙又シュタインの研究・所説に就ては、本文中に附記して置いた如くである。

(四十一)

「夕暮」の成立に對して當時の「疾風怒濤運動」が一つの大きな推進力を與へてゐる事は、多く認められてゐる事實であり、ウェルンレの如きも此の點に注意を拂つてゐる (P. Wernle: a. a. O. S. 31 f.)。

#### 第四章 時代の試煉

さて今迄の所論の要點を一應此に想起して見るに、最初「夕暮」に於てベスタロッチーの思想の原型的なものとらへた我々は、進んで小説「リーンハルト」に於ては、専らグリュフィー哲學を注視し且つ之が根據を追究したのであるが、その際我々の把握し得た事は凡そ次の二點であつた。即ちその一は當該の考察を通す事によつて、「方法」の成立に對して「探究」の占むべき位置を大略察知する事が出来得た點であり、尤も此の點の徹底的な究明は別の機會に留保して置いたわけではあるが、他の一は「探究」へ發展されるべき思想的地盤が既にそこに用意されてゐると云ふ事であつた。而も此等の點に關しては、我々は更に之に二つの方面から考察を試みる所があつたわけである。即ち一は當時の彼に於ける人類發展史的なテーマの展開に關してであり、他は之又當時（特に一七九〇年代の初期）の彼の心境を一つの書翰を通じて全面的に明かすみに出さうとする事であつた。而して此の二つの考察は、之を「探究」の成立といふ觀點から見ると、前者は謂はば素材的な點に於て注視されるべきであり、それに對して後者は寧ろ内面的な轉換を豫知するものとして注視されるべきであると言はねばならない。而も此の兩者が孰れも時代の思想的傾向乃至運動と極めて密接な關聯に立てるものである事も、之亦その都度指摘



乃至關説して置いた如くである。が併し、此の前後ひたすら險惡の一途を辿つて進行しつゝあつた、而も此等一聯の展開に至大の關係をもてる佛國革命に關しては、その際我々は殆んど觸れる事がなかつた。そして此の點、我々の此處に取り上げねばならぬ問題である。我々は以下極めて簡單ながら、彼の時局作「然りや否や？」を中心として、一面此の大事件に對する彼の率直な見解と立場を窺ふと同時に、他面それによつて「探究」の成立過程を一層明らかにしたいと思ふ。

言ふまでもなく、佛國革命はその影響の廣汎にして而も深刻なる點に於て、實に全歐的否世界的意義をもつた歴史事件であるが、ベスタロッチー亦他の多くの時人と同様、此の一大變革に直面して今や切實に時代の試煉を経験しつゝあつたのである。唯併し、彼はその事柄の餘りにも重大なると、又その推移に對する見通しの極めて困難なるとの事情の故に、これに對して自己の見解を表示する事をば尙差控へねばならなかつた。尤も彼が小説「リンハルト」の改作(一七九〇—九二年)に當つて、當時既に勃發せる佛國革命(一七八九年)の擴大を豫感しつゝあつた事は、デレカートなども指摘してゐる如くであるが、併し、かゝる事情の下に於て革命そのものが全面的に取り上げられるのは「然りや否や？」(„Ja oder Nein? Äusserungen über die bürgerliche Stimmung der europäischen Menschheit in den oberen und unteren Ständen, von einem freyen Man.“ 1793.)の述作を俟つて始めて見られる所である。勿論此の著作は當時一般に公表されるまでには至らなかつたのであるが、我々はそこに、革命に對する彼ベスタロッチーの極めて端的なる聲を聞きとる事が出来る。

さて彼は此の著作前半に於て、先づ以て佛國革命の原因を追究してゐるのであるが、その際彼はこれに對する時人の様々なる見解に對しても、將又根本的に佛國革命そのものに對しても同様、無條件に肯定もせねば又無條件に否定もせず、寧ろ反動的に構成せられたる現實の國家—社會生活に對する新たな洞察の基礎の上に、何が故に此等總ての事が來らざるを得なかつたかを歴史的に解明しようとする立場をとつてゐる。即ち彼は國家—社會生活の相互に異る三形式に應じて、三つの大きな時代(一、中世的封建國家 二、絶對的君主國家 三、佛國革命と共に新たに出現せる時代)を劃し(Kr. A. X, 112.)、而もその間に於ける根本構造的な變化—移行を政治・經濟・宗教等の面より跡づけると共に、それ等の變化を通じて増大し來る支配者と被支配者(即ち民衆)との間の「矛盾關係」(Missverhältnis—Kr. A. X, 120.)を注視し、以てそこから、革命の本來の原因と根據とを把握しようとしてゐる。尤もその叙述の仕方は、之を普通の歴史記述より判すれば極めて不備であると言はねばならぬであらうが、併し、その一種衝動的なる直覺の鋭さは直ちに事態の核心に迫る觀がある。而してその鋭き論斷の根柢に横はるものこそ、實に「人間自然」殊にその低次の自然(「動物的自然」)に對する彼の深き洞察であり、而もそれはやがて、我々の終始跡づけ來つた所の、彼に於ける人類學的乃至人間學的な探究と密接に結合せるものである。事實此處に於ても亦、かの「自然人」の思想が極めて重要な役割を果してゐるのであつて(Vgl. Kr. A. X, 117 f.). 佛國革命は謂はゞ彼の人間觀の一大試金石であつたと見る事が出来る。而もその結果は、國家—社會生活に於ける人間の不純動機、愈々以て根深く且つ複雑なものである事が確證せられ、爲に、かの



小説「リーンハルト」の背景をなせる基督教的國家の理念の如きも、今やその現實面からの決定的なる破綻を餘儀なくされるに至つてゐる。(Kr. A. X, 126 ff.)。而して結局此等全體の考察を通じて彼の力強く斷定してゐる事は、革命の原因が世間往々考へられる如き、自由乃至民権等の區々たる思想の動きには存せずして、却つて正しく事態そのもの變遷に歸せらるべきであると云ふ事、及びそれが同時に又思想墮落の原因でもあるといふ事である (Kr. A. X, 129 ff.)。而も彼は「自然の進行」を通じて此の大なる時代的變遷・推移を觀じて曰く、「崇高なる自然の進行 (Der hohe Gang der Natur)」、それこそは一切の生存者をして、享受によつて困憊にもたらし、困憊によつて死にもたらしつゝ一切の生命を維持する。而も又それは富者の子孫をしては貧者の位置に突落す事によつて、その子孫をば再び彼等の祖先の教智と徳にまで高める。げに此の崇高なる自然の進行こそが王者をも亦、再びその地位の教智と徳にまで復歸せしめる事を唯一可能ならしめ得る如き状態に突落するのである。自然が然る事を爲すべきでないとな誰か言はんと欲する云々。」(Kr. A. X, 133. Vgl. auch S. VIII, 28.) と。そこには殆んど絶對者の攝理の響が存する。のみならずそこには、やがて「探究」に現れ来る、謂はゞ歴史哲學的なる大なる構想が既に豫知せられてゐる。我々のなほよく思念すべき問題である。

唯併しながら、彼の立場は何等か觀照的なそれに止るものではない。彼は此の著作後半に及んで、問題の核心たる自由概念を、前半の所述に對應して歴史的に考察・吟味し (Kr. A. X, besonders 14 ff.)、以てそこからして國家・社會生活の新たなる規範づけを試みようとしてゐる。勿論その際、彼の立場は孰れかといへば民衆の

側に置かれてゐるのであるが、併しそれは何等か單なる黨派的なものではなく、却つて正しく「合法的な民力」(gesetzliche Volkskraft) の開示こそ、彼の衷心からの希求なのである。即ち彼の意圖は、一方支配者をしては「專制主義」(Despotie, Despotismus) に走らせ、而して他方民衆をしては「無政府」(Anarchie) へと驅りたる無制約的な「自然自由」(Naturfreiheit) を排して、それに代へるに、真正なる「市民的自由」(bürgerliche Freiheit) を以てしようとするにある。その點彼は一つの規定を與へて曰く、「それ故かゝる自由は、掟によつて禁ぜられざる事は如何なる事でも爲すといふ如き權利では決してない。それは寧ろ市民の陶冶せられたる力であり、而もその力たるや、市民として彼を特に幸福にする事をば爲し、又市民として彼を特に不幸にする事をば避けしめるものである。」(Kr. A. X, 149.—Sperrungen von Pestalozzi selbst.) と。言極めて簡單ではあるが、そこには「偉大なる經驗」(Kr. A. X, 149.) が溢へられてゐる。而して謂ふ所の「自由」に關して注意するべきは、既に明らかな如く、彼が人間陶冶を以てその前提としてゐると云ふ事 (Vgl. auch Kr. A. X, 148.)、及びその根柢に愛の精神を力強く要請してゐるといふ事である。それ故彼は又曰く、「かゝる場合、祖國及びあらゆる國家の福祉の基礎たるべき祖國愛と純粹なる根本則の新しき覺醒以外には何等頼るべきものはない。私が若し死者の復活の像を考案する事が出来るならば、私は祖國が一切の革命の後に於てその復舊に必要とする情緒の像を考案するであらう。革命の精神は消え去らねばならない。併しながら革命を惹起した不正の最後の陰影も亦革命と共に消え去らなければならぬ。」(S. VIII, 44.—Sperrungen von Pestalozzi selbst.) と。而も彼は此處



に至つて、かの基督の出現が異教徒の暴力と猶太の偽瞞的なる無力とに對する一の「革命移行」なる事を想起し、以てそのうちに、現實の革命移行をして眞實の「基督的革命移行」(der christliche Revolutions-Übergang—S. VIII, 45)に轉成せしめんとする、彼の心事を託してゐる。

さて彼ベスタロッチーは革命問題を追究する事によつて、終に革命と基督教といふ問題に突き當り、而もこれに對して、絃上の如き見解に到達したのであるが、併しそれは必ずしも當時そのまゝ一般に承認せられる如きものではなかつた。といふのは、當時基督教は一般に舊制度の側に於て維持せられて居り、従つて革命とは全然相容れないものと思考せられてゐたのみでなく、此の前後革命に伴へる幾多の悲惨事が一般に革命に對する嫌惡を將來しつゝあつたからである。然るに偶、ベスタロッチーは或る會合の席上に於て、革命に關聯して、絃上の如き自己の所信をその周圍の人々に語る機會をもつたのである。だがその結果は自己の所信を理解せしめ得なかつたのみでなく、却つて誤解をすら招いたのである。而も此の事が彼をして、「サンキュロティズムと基督教に就つ」(„Über Sansculotismus und Christentum.“ 1794.)と云ふ極めて簡潔な、併し内容豊かな一つの草稿を物させる機會となつたのである。ところでベスタロッチーは此の草稿に於て、問題の「サンキュロティズム」(過激革命主義)を「市民的サンキュロティズム」(bürgerlicher Sansculotismus)と「道德的サンキュロティズム」(moralischer Sansculotismus)とに區別し、以て彼が革命と基督教とを無造作に同一視してゐるものでない所以を明らかにしてゐる。勿論彼が眞正の基督教的立場を含蓄せしめてゐるのは後者であり、而もその言はんと

する所は「市民的權利に於ける道德的讓歩 (sittliches Lücklassen od. Nachgeben) と、財への執着を愛に従屬せしめんとする寛仁 (Edelmüt.)」(Kr. A. X, 266.)とに存する。そしてその限り、それはひたすら權利と財産とに固執して譲らぬ現實の革命とは凡そ對蹠的な立場に立つものである。此の點又彼は明確に述べて曰く、「初期の基督教徒は明らかに道德的サンキュロティズムの中に生きたのである。即ち彼等は市民的サンキュロティズムの、以て奪ふ所のものを却つて與へたのである。彼等は身を殺したのであるが、市民的サンキュロティズムは他を殺すものである。」(Kr. A. X, 266.)と。そこには明らかに人間自然の內面的淨化を通じての、立場の根本的轉換が意圖せられてゐる。而もこれこそが、やがて「探究」の述作に當つて「道德的狀態」(sittlicher Zustand)なる方式を以て表示せられる境地に外ならない。我々は後再び此の問題に歸り來るであらう。

こゝで我々は少しく溯つて、フィヒテとベスタロッチーの關係に説き及ばねばならない。勿論此の關係は何等か一方的なものではなく、却つて正しく相互的なものであるわけであるが、差當つて問題となるのは、ベスタロッチーの思想發展上に於けるフィヒテの位置如何といふ事である。尤も此の問題は、カント哲學のベスタロッチーへの影響如何といふ極めて重要な問題を含んでゐるが故に、それだけ又多く議論の存する所ではあるが、その點の決定は既に前章の終にも關説して置いた如く、結局、時代特に精神史的背景に對する洞察の廣狹深淺如何に係つてゐるものと言はねばならぬであらう。筆者自身としてはシュタインの所見に納得し得る多くのものを見出



すのであるが、此處では勿論、當面の考察に沿うて一應その間の事情を明らかにする事を以て満足せねばならぬ。ところで問題は主として、フィヒテの二度目の瑞西滞在(一七九三年夏チュ)に關聯するものであるが、當時若きカント學徒であつたフィヒテは、問題の佛國革命に關する述作(„Beitrag Zur Berichtigung der Urtheile des Pulkunns über die französische Revolution.“)の第一部と第二部の一部とを書き上げてゐた。恰も此の頃ペスタロッチー亦時局作「然りや否や?」を物せる事は右既に述べ來つた如くである。而もこの兩者の間に、かのリヒテルスヴィル(Richterswil)に於ける記念すべき會談(一七九三年十二月)に先立つて、何等かの交渉關係の存した事は、ペスタロッチーより若きフェレンベルヒ(Emanuel Fellenberg)に宛てられたる書翰(一七九三年十一月十五日附)によつて明らかである。即ち彼はその中で述べて曰く、「フィヒテも亦、我が政治の哲學を此の著作(然りや否や?)が意味されてゐる——譯者註の出版に先行せしむべきであると述べた。」(Pestalozzblätter XII. S. 26.)と。而も此の文面に關して注意さるべきは、ペスタロッチーをして、當面の時局問題の究明をより根本的な方向へと驅り立てた主要人物こそ、實にフィヒテその人であるといふ事である。たゞ併しながら此の兩者が前掲のリヒテルスヴィルに會した際に、果して如何なる事を話題の中心となしたか、その内容は定かには傳へられてゐない。恐らくそこでは時局問題も將又民衆教育の問題も論ぜられた事であらう。だが結局話題の中心をなしたのは人間の本質問題であつたと言はねばならぬであらう。而も彼は此の對話に於て、フィヒテから受けたる最も力強い衝擊の印象を契機として、以來當該の問題に對する包括的にして而も根本的な基礎づけに没頭したのであ

る。而して此の間に於ける異常なる苦心の過程を跡づける断片乃至草稿(„Ideen und Note zu Rangierung der Freiheitsbegriffe.“ Ende 1793.; „Gefühle bym Jahrwechsel 1794.“ etc.)の中、最も重要なものゝ一「吾々の自然の動物的、社會的及び道德的權利に關する諸見解の論争に於ける人間感情の仲裁」(„Darzwischenkomst des Menschengefühls im Streit einiger Meinungen über das thierische, das gesellschaftliche und das sittliche Recht unserer Natur. Von einem erwehnten französischen Bürger.“ 1794.)と題する一篇である。尤もそれは、右の如き表題の外僅に題寄と序——當時はそれ以上に進められる事はなかつたと考へられる——とを傳へてゐるに過ぎないが(Kr. A. X. 249 ff.)、我々はそこで、「探究」に於ける中核的な考察方式たる「動物的、社會的及び道德的」といふ三分法を極めて明瞭に認める事が出来る。のみならず、そこに用ひられたる「仲裁」(Darzwischenkomst)なる表現は、彼ペスタロッチーの意中を最も端的に表示せるものとして特に注意に價するものである。即ち事態を極めて直覺的に把握するペスタロッチーは、純粹に道德的なものを表示するにあつて、動物的乃至社會的な諸對立の、「その中に入り込む」(darzwischenkommen)と云ふやうに考へたのである。而してかゝる推測は「探究」を通じて十分確認せられる所である(Vgl. Kr. A. XII. 97, 119.)

註

(一) 此の第一の考察に關しては、既にその際述べて置いた如く主としてシェーネハウムの研究に依據したのであるが更に我々はマイエルの研究をも併せて参照する事が出来る(Mathilde Mayer: Die positive Moral bei Pesta-



- Lozzi, 1934. S. 140ff.)
- (二) 佛國革命は唯に「探究」の成立に對して重要な關係をもつてゐるのみでなく、それは更に謂はば危巖的な美談として「探究」の構成の中に深く入り來つてゐる。我々は此の點、かのシェンランガーによつて試みられた「探究」の分析を参照する事が出来る (E. Spranger: Pestalozzis „Nachforschungen“, Eine Analyse, 1935. besonders Inhaltstabelle.)
- (三) Fr. Delekat: Johann Heinrich Pestalozzi, 2. Aufl. 1928. S. 174ff.
- (四) 斯様にヘスタロッチが謂はば歴史主義の方向にその思想を展開せざるを得なかつたのは、結局、十八世紀の精神生活が一種の必然性をもつてその方向に歩まざるを得なかつた道を、ヘスタロッチ自身も歩んだことに外ならないであらうが、此の點に就ては、デレカートが當時多く見られる歴史主義の一般的性格からして「辯論の解決策としての歴史主義」といふ一つの解釋を下してゐる (Fr. Delekat: a. a. O. S. 181 ff.)
- (五) 「然りや否や？」は出版されなかつた代りに、その草稿乃至複寫には種々のものがあり (Vgl. Kr. A. X. 325ff) 而も其等の間には内容的に見て多少出入がある。それで批判版所載のものにない箇處は便宜他の版から引用する事にした。
- (六) この草稿の更に詳しい由來に就てはシェーネバウムの研究を参照 (H. Schönebaum: Pestalozzi, Kampf und Klärung 1931. S. 120f.)
- (七) 一七八九年の佛國革命黨員が貴族に反抗して從來の半ズボン (culotte) を着用せず (sans) 却つて長ズボンを着用したので、その事に因んで、その黨員を Sansculotte と呼び、而してその主義を Sansculotisme と呼ぶ。

至つたのである。

- (八) 此の點に關し、特にフィヒテに於てヘスタロッチが如何なる形で生きてゐるか、結局彼の「獨逸國民に告ぐ」なる講演 (一八〇七年末—一八〇八年初頭) にまで、更に我々の考察を延長せねばならぬわけである。尤も今はその場合ではないが。
- (九) かゝる點に就ては、此の頃彼がラファートル (Lavater)、「フェレンベルグ (Fellenberg)」、「コンス・コンラート・ヘッセル (Hans Konrad Escher) 等」宛て宛つた書翰を参照する事が出来る (H. Schönebaum: a. a. O. S. 243)。



## 第五章 「探究」の結構と思想

## 第一節 全體の構成

「探究」全體の構成に就て一應素描を試みて置く事とする。此の著作は大體三部から成つてゐる。

先づ第一部は「我が探究の根柢」(Kr. A. XII. 7—57)なる章であるが、其處に於ては、我々人間生活の實現の場所たる社會を形成する外的及び内的諸契機の重要なものが取上げられ、而も其等諸々の契機を通じて人間生活の全關聯への概觀が示されてゐる。而してペスタロッチー自身第一部全體に對して豫め與へたる筋書(Kr. A. XII. 7—8)によれば、(一)我欲的系列と(二)好意的系列の二系列に於て之が叙述を遂行しようとする意圖が容易に看取出來る。今前系列に就て見るに、そこには①知識、②取得(Erwerb)、③財産、④社會的狀態、⑤權力、⑥名譽、⑦屈從、⑧支配、⑨社會的正義(權利)、⑩貴族、⑪王權、⑫自由、⑬虐政、⑭暴動、⑮國法(Staatsrecht)の十五項目が攝せられてゐる。勿論此等は、人間の國家—社會生活を可能ならしめる諸形式乃至

はこれに伴へる諸事象であるが、その背後には深く人間の「我欲」(Selbstsucht)が潜んでゐる。我欲的系列に攝せられる所以である。勿論こゝではその意圖上心理的な考察面が著しく前景に現れ、反對に此等社會的諸形式そのもの——勿論そこに取り上げられてゐるものは廣く文化一般の領域から見れば尙一面的なを免れぬであらうが——のもつ客觀的な獨自性が十分なる位置を占めてゐない憾みがあるとは云へ、併し能迄も事態的にその問題面を展開しようとする彼の根本的な態度を見逃すわけにはゆかない(此の點は尙第三部に於ける考察と深い關聯をもつ)。

右の第一の系列に對して、第二の好意(Wohlwollen)的系列には①好意、②愛、③宗教の三項目が攝せられてゐる。此の系列に就て特に我々の注意を拂はねばならぬ事は、此等三者の間に謂はば段階的乃至次元的な相互關聯が存すると云ふ事である。我々は後の考察に於てそこに秘められたる極めて重大なる意義を知る機會があるであらう。

さてペスタロッチーは前掲二系列を順次に叙し來つた後、最後に(三)「余自身の眼に映する人間像」なる題の下に於て「矛盾」(Widersprüche)に満てる人間像を赤裸々に展開し、以て危機に直面せる時代相を徹底的にあらばいてゐる。そしてそこには、老いゆく大陸諸國家の近づける崩壞(Vgl. Kr. A. XII. 50, 52)と云ふ一種終末論的な觀點が支配してゐる。我々は容易にその間に佛國革命的契機の導入せられてゐるのを察知する事が出来る。

## 第五章 「探究」の結構と思想



總じて第一部は(一)我欲的系列と(二)好意的系列の二系列の敘述及び(三)余自身の眼に映する人間像」といふ終末論的歸結の三者より成ると言ひ得る。今此等第一部全體に互つて多少補説を試みるに、上記二系列は之を内容的に見て「探究」に至る彼の全發展過程に於ける重要問題を再び總括的に繰返したものであると云ふ事が出来る。従つて又、それが我々の終始跡づけ來つた「夕暮」以降の中間諸著作に於ける問題系列と、密接不可分の關係に立てるものである事も極めて明瞭である。たゞ全般的に見て「探究」の場合は、前諸著作に比して、その問題の把握と處理の仕方にて一層徹底的となり、そこに纏て又思想的なる一段の進展が見られるわけである。

尙此に併せて關説して置かねばならぬ事は、既に觸れて置いた如く、第一部全體を通じてベスタロッチーの意圖せる所が、國家・社會生活を管む我々人間自然の矛盾錯綜せる姿を在るがまゝに明かるみに出さうとする點に存すると云ふ事である。而もその矛盾相を見る事の深き、洵にベスタロッチー獨特であると言はねばならない。そこで我々としても是非とも先づ此の部分を読んで、彼と共に人間の負はされたる矛盾にまともに突當り、更にその矛盾に徹底的に惱まされ、以て彼と同じ絶望的なる頼りなさを切實に感得すべきであらう。而もその時はじめて我々は身を以て問題の所在を知る事が出来るであらう。

第二部 此の書の本質 (Kr. A. XII, 57—128) は第一部に於て取り上げられた問題に對して謂はばその解決

の爲の必要條件を引出してくる部分であり、此の著作中最も重要な章節を構成してゐる。(一)「我が書の本質的なるものへの移行」、(二)「我が最も本質的なる觀點の最初の敘述」及び(三)「我が書の本質」なる三つの章が之に充當されてゐる。而して此の中先づ(一)「我が書の本質的なるものへの移行」は、ベスタロッチーに於ける決定的なる轉換を示せる中心思想を包含する章として特に我々の注意をひく。即ち彼はそこに於て①人間と環境と云ふ根本問題を持し來つて曰く、「余の先づ見る所では、環境が人間を作る (die Umstände machen den Menschen)。だが同時に又、余の見る事は人間が環境を作る (der Mensch macht die Umstände) と云ふ事である。人間は自らを、自らの意志に従つて様々に御してゆく一つの力を、自己自身の内にもつものである。」(Kr. A. XII, 57)と。言ふまでもなく此の命題は何等か單なる環境思想的なものとして理解さるべきではなく、却つてより一層根底的なものとして理解せられねばならない。實にそこには、「余は如何にして余が現に在る所のものなやうか」(Wie bin ich das, was ich wirklich bin?—Kr. A. XII, 57)と云ふ人間存在の窮極問題が賭けられてゐる。我々は正しく此の立場よりして、前掲命題の後半に盛上れる人間の道徳的自律に對する確信の深大なる意義に觸れるべきであらう。尤もかゝる確信は、これを彼の思想發展過程に即して跡づける事が出来るのであつて、「夕暮」に於ける「自然の内奥」から湧き出づる向上の力、同章稿に於ける「自助」思想 (Kr. A. I, 259 f.)、小説「リーンハルト」第四部第三十一、三二兩節に於ける自律思想 (Kr. A. III, 308—313) 更に一七九〇年代に見らるる人間の高次領域に對する確信の徹底等を想起し得る——それは必ずしも新たなものではな



いが、併し此處に至つて漸くその頂點に達し來つたものと云ふ事が出来るであらう。尙此處で併せて關説して置かねばならぬのは、前掲命題全體のもつ構造關係に就てであるが、此の點に關しては、我々は相反する兩極に開かれたる二つの命題（「環境が人間を作る。」が同時に又「人間が環境を作る。」）が、實は相互に貫き合ふ一種螺旋的なる圓環運動の中に攝せらるべきである事を知らねばならない。尤もかゝる構造性に就ては、「夕暮」（特に「自然の進路」・「個別的地位」・「近接」等の一聯の概念系列に即せる考察）以下の諸考察を通じて我々の注視し來つた生活圏の思想に於て既に明らかに窺ひ知る事が出来るのであるが、それは更に、同じくかゝる線に沿つて開顯される後の「方法」の構造性と極めて密接なる關聯に立てるものである。かゝる點に就ては後尙關説される機會があるであらう。

ところで右の如く人間の道徳的自律にその最後の根據を求むればとて、その事は何等人間の社會的「強制」(Zwang) を無造作に拒否するものではない。何となれば人間はその我欲の故に、社會の存立根據たるべき「真理と正義」(Wahrheit und Recht) に對して「不信實」(Untreue) であるからである。そして正しく此に、彼が一聯の對話を通じて、②「人間の過誤の内面的同一性」に就て語る所以が存する。勿論言ふ所の「不信實」乃至「過誤」(Verirrungen) とは、我々人間が人間の故に正しく落ち込む弱點であるが、之が人間の地位・職分の相違(君主・民衆・門閥・貴族・官吏・商人・職人更に學者・牧師の如き)に應じて社會の中に現れ來る種々相及び之が根本的なる同一性に對する洞察の徹底せる、眞に我々の胸裡に迫り來るものが存する。

右に述べ來つた事から歸結される最も重要な事は、深く我欲に根ざせる人間の「不信實」乃至「過誤」の故に本來之が批判者たるべき「真理と正義」の意味内容が却つて反對に似而非なるものに變化乃至轉倒せしめられると云ふ事である。そして正しく此の矛盾せる社會的事實の徹底的なる究明こそが、(一)「我が最も本質的なる觀點の最初の敘述」の中心問題を形成するのである。彼は此の章の最初にあたつて、かゝる「真理と正義」に對する世人の觀點の相違を注視して曰く、「私には次の事が益々明瞭になつて來た。人間否寧ろ余自身は、真理と正義とを、次の夫々の場合本質的に異つたものとして自身に表象する。即ち①人間が強制と威壓(Zwang und Gewalt) なしに常に感じ、考へ、行ふ(emfinden, denken und handeln) 如く、余が感じ、考へ、行ふ場合、②或は人間が市民的生活の人爲と強制(Kunst und Zwang) とを通じて感じ、考へ、行ふ事を學ぶ如く、余が感じ、考へ、行ふ場合。更に最後に、③余が余の動物欲求と余の社會的欲求とから内面的に獨立する事を、眞理と正義に關する余の判斷の基礎と認める時に余の爲すべき如く、余が感じ、考へ、行ふ場合。」(Kr. A. XII, 68) 一番號と強調點は筆者による。我々はそこに三重の我が、而も單に考へる我としてではなく同時に感じ、且つ働く我として、即ち感じ、考へ、行ふ我として提示せられてゐるのを見る。言ふまでもなくそれは三重の人間の在り方を示すものに外ならぬのであるが、そこには同時に、かゝる在り方と相即せる三重の眞理と正義が客觀の側に於て開かれる事が意味せられてゐる。即ち「人間が……世界を三つの異つた仕方にて表象する」(Kr. A. XII, 67) 事と相對應して、①動物欲、②社會的及び③道徳的と云ふ三重の眞理乃至正義の問題が提起せられ



るのである。此の點彼は述べて曰く、

「余は余自身の内に、①一個の動物的真理 (eine thierische Wahrheit) を有つ。即ち余は此の世界の一切のものを余自身の爲に生存する動物と看做す一つの力を余自身の内に有つ。」

余は②一個の社會的真理 (eine gesellschaftliche Wahrheit) を有つ。即ち余は此の世界の一切のものを隣人との契約及び規約關係の中にある被造物として看做す一つの力を有つ。

余は③一個の道德的真理 (eine sittliche Wahrheit) を有つ。即ち余は余の動物的要求と余の社會的諸關係とは拘泥せず、ひたすら余の内面的醇化に寄與せしめんとする觀點の下に、此の世界の一切のものを眼中に把持しようとする一つの力を有つ。」(Kr. A. XII, 67. 一番號と強調點は筆者による)

と。而も此等三重の眞理には、夫々①動物的正義 (thierisches Recht) ②社會的正義 (gesellschaftliches Recht) 及び③道德的正義 (sittliches Recht) と云ふ三重の正義が之に對應する (Kr. A. XII, 67.)。

ところで彼はかゝる三重の問題を考察するに當つて、かの時代的特色たる人類發展史的思想背景との結合の下に之が遂行を圖つてゐる。従つて問題は、

① 「自然状態に於ける我とは何ぞぞ。」(Was bin ich im Naturstand?)

② 「社會状態に於ける我とは何ぞぞ。」(Was bin ich im gesellschaftlichen Zustand?)

③ 「道德状態に於ける我とは何ぞぞ。」(Was bin ich im sittlichen Zustand?)

と云ふ三重の展開面を取る事となる。實にベスタロッチの心血を注いだ部分であり、それだけに又そこには彼の最も獨自な而も搖ぎなき世界が建立せられてゐる。

一體發展思想 (Entwicklungsgedanke) を最も普通の意味に解するならば、謂ふ所の三状態は第一の「自然状態」から第二の「社會状態」へ、而して更に第三の「道德状態」へと、時間的繼起的に而も必然的に移行するものと考へられねばならず、従つて又その場合三者夫々人類進化過程の一段階としての意味をもち得るに過ぎない事となるであらう。たゞ併し、その外觀の如何に拘らず、彼の思想展開の結局の意義が斯かる點に存したとは到底言ひ得べくもない。否寧ろ斯かる立場の止揚こそ、彼の最後の苦心と念願とが懸けられてゐたと言はねばならない。事實彼は、外見上發展思想 (Entwicklungsgedanke) を追ひつゝも、その内實に於ては却つて進歩思想 (Fortschrittsgedanke) を展開してゐる。即ち彼は不可避的に、歴史の中心問題に突き當つてゐるのである。而してその底には、深く革命期の現實に直面せる者の眞摯なる人生探究が横はつて存する。従つて此の著作は、之を全體として見る時、所謂歴史的世界を形成する複雑多様な構造面に對應すべき考察としては、尙幾多の不備を免れぬであらうが、而も尙、我々はそこに歴史哲學的なる視野と同時にその深さを認めざるを得ない。

尙此處で併せて關説して置かねばならぬのは、前掲三重の提題の眞義及びその相互的構造關係に就てである。

此の點先づ第一に、我々は謂ふ所の「状態」が何等か我々とかけ離れたものとして、従つて單に對象的なものとして取り上げられてゐるのではなく——此の點往々誤解されるのではあるが——却つてそこには同時に又「我」が問



題として取り上げられてゐる事を指摘して置かねばならない。此の事は前既に述べた所ではあるが、實に「探究」理解上決定的に重要な點であり、従つて又我々の十分注視せねばならぬ問題である。尤も此等三重の提題が、言はるゝ如く、飽迄も「我」の一點によつて貫かれ且つ統一せられてゐるとはいへ、それは何等か單なる主觀に墮する事を意味するものでは決してない。否寧ろ此の場合、「状態」と「我」とが謂はば客觀即主觀、主觀即客觀と云ふ主客相即關係に於てある所に、此の提題の眞義が存する事を我々は知らねばならない。そしてこれは單に現實の理論的認識・研究にのみとどまる事を以て満足せず、同時に又實踐的創造・形成を念願とせる、彼の根本的態度と關聯するものであるが、而も亦此處に、やがて三重の提題相互の構造關係を解くべき鍵が存するわけでもある。

一體ベスタロッチーの思想が著しく構造的である事は、既に我々のその都度指摘し來つた所であり、又かゝる構造的なものを統一像として把握しようとする所に、實は我々の努力も存したのであるが、當面問題の三重の提題こそ、正しくかゝる構造的な媒介的に開示すべき重要な手懸りを我々に與へるものである。と云ふのは、此等三状態が、その間に三重の我を介在せしめる事によつて、第一の状态より第二の状态へ、而して更に第三の状态へと移行し轉換すると云ふ、謂はば媒介的な「進行」(Gang)過程がそこに暗示されてゐるからである。勿論之が立入つた究明は尙別に果さるべきであるが、此處に豫め一言して置くならば、謂ふ所の「進行」は何等か單なる「機制的」(mechanisch)乃至「有機的」(organisch)なものに盡きるものでもなく、——かゝる表現はベスタロッチー自身「方法」の敘述にあつて使用してゐる所ではあるが——却つて正しくヘーゲルの意味に於

て「辨證法的」(dialektisch)な性格を擔つてゐるのである。即ち第一の「自然状態」を否定するものは第二の「社會状態」であるが、而も此の兩者を否定するものこそ第三の「道德状态」である。従つて第三の「道德状态」は前二者を同時に否定する事によつて此の兩者を克服する。換言すれば棄却 (Vernichtung) と保存 (Aufrehaltung) と云ふ、正しくヘーゲルの二重の意味に於て前二者をより高次の立場 (aufheben) するのである——従つて又此の三者がその外觀の如何に拘らず、その本質上現實の實踐的形成といふ立場に於て論理的・方法的な前後關係に置かれてゐるものである事もほと明らかである。而も斯様に見れば、彼の思想が高度に辨證法的である事は略々諒解し得られる點であると思ふが、併し斯く言へばとてそれは何等、彼ベスタロッチーがその方法的自覺の不徹底の故に往々辨證法的過程を踏みはずし、而して素朴的・獨斷的な反省に墮してゐる事實を否定しようとするものではない。又彼がその辨證法的に得られた前提を、必ずしも首尾一貫的に遂行してゐない事實を否定しようとするものでもない。併せて附記して置かねばならぬ點である。

尙右に述べ來つた事は、何等かベスタロッチーの思想に對して不當なる變改を加へようとするものでは決してない。否、正しく反對に、事態的に我々は然か言ひ得るのである。のみならず、我々はかゝる見解の正當性を諸家の研究に徴しても亦確信し得るのである。<sup>(八)</sup>

\* 一般に當時の人類發展史的思想に關しては、個體の成長を以て種族の發生を繰返すと考へる、所謂種と個の平行思想がその根柢に存するのであるが、その點は此の場合に於ても亦ほぼ同様であると言はねばならぬであらう。既に我々はその提



題の仕方にて (Vgl. auch Kr. A. XII, 6.) かるるものを暗示されるのであるが、更に謂ふ所の人類發展の三状態と個人の成長過程 (兒童期・修養期及び成人期) との相互關聯的な叙述に於て、又かるる時代の信條が暗々裡に前提されてゐる事を窺ひ知る事が出来る。尤も今かるる點に就て立入つて述べる事は差控へるが、實は此の問題は、教育的には所謂文化段階説 (Kulturstufentheorie) と關聯して考へらるべき問題を含んでゐるのである。一言關説して置く所以である。 (Vgl. H. Leser: Johann Heinrich Pestalozzi, 1908, S. 66 ff.; E. Spranger: Pestalozzis „Nachforschungen“, 1935, S. 5 f.)

(三)「我が書の本質」は第二部の考察結果を方式化したものである。即ちそこには、前掲三重の提題に夫々對應して①「自然の作物として」(Als Werk der Natur) ②「我が種族の作物として、即ち世界の作物として」(Als Werk meines Geschlechts, als Werk der Welt.) 及び③「我自身の作物として」(Als Werk meiner selbst) と云ふ三様の人間の在り方が要約的に示されてゐる。かくてはじめて、人間に可能なる最高の境地が開顯せられるのであるが、それと同時に又、「肉の繫縛の直中にあつて神の如く生く」(Kr. A. XII, 125.) べき謂はば「中間者」(Mittelding—Kr. A. XII, 127.) としての人間の位置・運命が一層明瞭に自覺され來つてゐる。

以上で此の著作の最重要な部分の考察、即ち問題解決の必要條件の究明が果されるわけである。従つて次の課題は此の必要條件が果して十分なる條件なりや否やを吟味・検討する事に懸つてゐる。彼ベスタロッチーは、第三部「最初対象を注視せる際余に浮べる單純なる觀點と余の最も本質的な根本命題との一致」(Kr. A. XII, 129—161.) と云ふ題の下に於て、先に第一部に於て取り上げられたる問題系列に對して——尤も第一部の場合と

第三部の場合とではその問題系列に多少の出入はあるが——斯かる意味の吟味をば逐一入念に遂行してゐる。此處ではその一々の内容には立入らないが、併し特に我々の指摘して置かねばならぬ事は、今や漸く「好意」より「愛」へ而して更に「宗教」へと云ふ、人間生命の本源への溯及が遂行せられ、而もそれと關聯的に彼の「我欲」による異常なる歪が止揚せられるに及んで、社會の生活諸形式そのものの有つ客觀的な獨自性が本來の位置を回復し來つてゐると云ふ事である。而も此の事は彼の後の思想發展に對して極めて重要な關係をもつのである。一體ベスタロッチーはその後期の著作「我が時代及び祖國の純潔、眞摯及び寛容に就て」(An die Unschuld, den Ernst und den Edelmuth meines Zeitalters und meines Vaterlandes, 1815.) に於て、「文明」(Zivilisation) と「文化」(Kultur) と云ふ注自すべき思想を展開してゐるが、我々は正しくその先驅とも見らるべきものを此の第三部に於て認める事が出来る。即ち謂ふ所の「文明」を特質づける「集會的生存」(die kollektive Existenz unsers Geschlechts) とは此の場合の「社會状態」と相通するものであり、それに對して「文化」を特質づける「個體的生存」(die individuelle Existenz unsers Geschlechts) とは此の場合の「道德状態」と相通するものである。一應その間に存する關聯面に言及して置く次第である (Vgl. S. XI, besonders 88—91.)

尙彼は最後に「我が書の最後の歸結」(Kr. A. XII, 161—166.) なる章に於て、謂はば必要にして且つ十分なる條件を要約して此の著作を結んでゐる。



以上我々の見來つた「探究」の構成を要約的に圖示すれば次の如くである。

序 主題——我とは何ぞ？ 人類とは何ぞ？ (Kr. A. XII, 6—7.)

第一部 我が探究の根柢 (7—57.)

(一) 我欲的系列 (8—34) ← (二) 好意的系列 (34—43.)

(1) 知 識 (8) (1) 好 意 (34)

(2) 取 得 Erwerb (10)

(3) 財 産 (10)

(4) 社會的狀態 (13)

(5) 權 力 (14)

(6) 名 譽 (18)

(7) 屈 從 (18)

(8) 支 配 (20)

(9) 社會的正義 (權利) Recht (22)

(10) 貴 族 (23)

(11) 王 權 (25)

(12) 自 由 (26)

(13) 尊 政 (28)

(14) 暴 動 (28)

(15) 國 法 Staatsrecht (31)

(三) 余自身の眼に映する人間像 (44—57.)

(2) 愛 (36)

(3) 宗 教 (38)

第二部 此の書の本質 (57—128.)

(一) 我が書の本質的なるものへの移行 (57—66.)

(1) 人間と環境 (57—62.)

(2) 人間の過誤の内面的同一性 (62—66.)

(二) 我が最も本質的なる觀點の最初の叙述 (66—121.)

(1) 自然狀態に於ける我とは何ぞ？ (68—76.)

(2) 社會狀態に於ける我とは何ぞ？ (76—105.)

(3) 道德狀態に於ける我とは何ぞ？ (105—121.)

(三) 我が書の本質 (121—128.)

(1) 自然の作物として (122)

(2) 我が種族の作物として、即ち世界の作物として (122)

(3) 我自身の作物として (123)

第三部 最初對象を注視せる際余に浮べる單純なる觀點と余の最も本質的なる根本命題との一致 (129—161.)

——三重の觀點が新たなる秩序づけの根據となる——

(一) 第一部の(一)と對照 (132—149) ← (二) 第一部の(二)と對照 (150—157.)

(1) 知 識 (132) (1) 動物的好意 (150)

第五章 「探究」の結構と思想



- (2) 取 得 (134)
  - (3) 財産と有産者 (134)
  - (4) 權 利 (135)
  - (5) 社會的狀態 (137)
  - (6) 權 力 (137)
  - (7) 名 譽 (138)
  - (8) 屈 從 (138)
  - (9) 支 配 (140)
  - (10) 貴 族 (140)
  - (11) 商 取 引 Handlung (將) (141)
  - (12) 王 權 (141)
  - (13) 法的權利 (新) (142)
  - (14) 自 由 (142)
  - (15) 暴 動 (143)
  - (16) 暴動は決して正しきものに非ず (145)
  - (17) 國 法 (149)
- (三) 第三部の歸結——眞理と正義 (157—161)

(2) 愛 (150)

(3) 宗 教 (151)

歸結——我が書の最後の歸結 (161—166.)  
 (尙右の表に關しては、シユフランガーの手になる「探究」の分析表を參照——E. Spranger: Pestalozzis „Nachforschungen“.)

### 第一節 中心思想

#### (一) 自然狀態に於ける我

(自然狀態と自然人——純潔無垢——自然法と社會契約)

一體我々が既に社會生活を營める現在の立場に於て、本來の「自然狀態に於ける我」の實相を突留めようとしても、固よりそれは現實宛がらものと全く同一ではあり得ない(Kr. A. XII, 68)。だが我々はいかゝる不可避的な限界の下に此の狀態に就て考へて見なければならぬ。即ち「自然狀態とはその言葉の眞の意味に於て、最高度の動物的純潔 (tierische Unverdorbenheit) である。此の狀態に於ける人間は純粹に本能の子であり、而も此の本能が單純に且つ無邪氣に一切の感覺的享受へと人間を導く。」(Kr. A. XII, 68)これは感性的に直接的なもの以上に反省しない全くの初の狀態であり、従つて又善惡の彼岸乃至善惡の認識以前の狀態である。ヘスタロッチーはいかゝる原始的な生活の歡喜を更に想像的なものとして捉へて曰く、「彼は溢るる好意 (Wohlvollen) を以て、彼の羚羊、彼のモルモット、彼の妻、彼の子、彼の犬、彼の馬を愛する。彼は何が神であるのか、又何が罪であるのかを知らない。彼は惡魔を怖れない。光と森と野原とが彼にとつては神の創造のまゝに神聖である。だが墾された土地は彼にとつては呪ひである。彼は眠りと享樂との交替の裡に時を過す。心の陶醉と頭のうつろ



な事と踏めくやうな夢想に耽る事とが、彼にとっては生活の歡喜である。云々。」(Kr. A. XII, 68f.) と。これは謂はばルソーの「黄金時代」(l'âge d'or) にも比せらるべく、更に或はキリスト教に於ける墮罪以前、即ち第二のアダムに對する第一のアダムによつて象徴されたる樂園の名残とも見らるべきものを留めてゐると言ひ得るであらう。

孰れにしても斯かる状態が長く續くと考へられない。それ故「墮落せざる自然人」 unverdorbene Natur-menschen (Kr. A. XII, 70) に對して「墮落せる自然人」 verdorbene Naturmenschen (Kr. A. XII, 70) が區別されなければならぬ。事實今日我々が「自然人」と稱するものは、既に早くより本來の「自然状態」に於ては生活してゐなかつたのである。のみならず、そこには「無限に多様な段階」(Kr. A. XII, 70) が経過され來つてゐる。だが「我々は、此の世界の、據つて以て彼の動物の欲求に映する仕方が、既に久しき以前から社會状態への願慮によつて制約されてゐる時でも、なほ彼を自然人と呼ぶのである。」(Kr. A. XII, 70)

二 さて「自然人」が未だ全然墮落しない状態、即ち努力もなく、苦痛もなく、不安もなく、只管安樂であつた全くの「純潔無垢」(Unschuld) の状態が、何等か我々人類の歴史に存在したであらうか。此の點、「自然状態」乃至「自然人」に關して決定的に重要な、而も解決極めて困難な問題が藏されてゐる。ところで此の場合重要な手懸りとなるのは個人の幼兒期であるが、之に關してベスタロッチーは述べて曰く、「固より斯くの如き状態はある。それは幼兒が此の世に生れ出る瞬間である。併し此の瞬間は存在するや否や過ぎ去つて了ふ。幼兒の動物

的無邪氣 (die tierische Harmlosigkeit) の本來なる起點は、最初の産聲に於て既に踏み越されてゐる。」(Kr. A. XII, 71.) と。而も事情は人類一般に就ても亦全然同様である。即ち人間は自然の手から來る時は全くの純潔無垢であり、而も人間の内面的純潔と現實に墮落せざる性質とが、斯かる純潔無垢を起點とする事も争ふ餘地のない事のやうに思はれるが、固より、斯かる點は之を彼に於て豫感するのみで、何等認識すると云ふわけではない。それは存在するや否や過ぎ去つて了ふものである (Vgl. A. XII, 71.)。「かくて我等が自然の動物的墮落は、我々の動物的自然と云ふタクト即ち本能と、我々の動物の調和と云ふ絃即ち動物の好意とが、我々の内に於て無力且つ不確實に成り始める、その點からして始まる。従つて我が動物的自然 (tierische Natur) の墮落してゐないと云ふ事は、我が本能も又我が好意も、なほ我が内に於てその力を失ひはじめる事のなかつた時點に於ける、我自身の状態であらう。」(Kr. A. XII, 72.)

ところで右の如く見來ると、問題の「純潔無垢」の状態は甚だ不確實なものやうに考へられるが、然らばそれは全然架空なものであらうか。此の點ベスタロッチーは述べて曰く、「余はそのやうな時點が現實に存在すると云ふ一種の意識をもつてゐる。余が余の本能の充ち満ちた力と余の好意の全き純潔とを享受せる自己を考へ得る能力をもてる事は、恰も余が母體內に於て一腕・一脚を失つたとしても、なほ余が斯かる肢體を具へてゐる自己を考へ得ると同様である。」(Kr. A. XII, 72.) と。それ故「純潔無垢」の状態は之を單に考へ出す事が出來るといふだけでなく、寧ろ何等か現實に感ずる所のもの、否、否定せんとして否定し得ない根柢深い人間要求ですら



ある。かのルッソーの「自然人」を只管現實的な方向へと還元し來つたペスタロッチーも、終にこれだけは動かす事が出来得なかつたのである。洵に、それは彼の終生の「童心」Kindersinn (Kr. A. XII, 6.) と共に、我々の最も意味深く受取らねばならぬ所のものであるであらう。

此處で我々は更に「純潔無垢」のもつ意味に就て考察して見なければならぬ。一體「純潔無垢」と云ふ事は之を二つの觀點から考察する事が出来る (Vgl. Kr. A. XII, 72f.)。その第一は我々に於て罪惡の印象 (der Eindruck des Uebels) が全然ない場合であり、その第二は一度加へられた罪惡の印象が再び拭ひ去られる場合である。而して前者の場合、全くの「純潔無垢」がそのまゝ持續されるのは固よりであるが、それが我々人間に於て不可能な事も又明らかである。そこで専ら考察すべきは後者となる。即ち「余が余の知り且つ余の求むべき最高貴のもの乃至最高ものを獲ようと努力する力を、此の後者の觀點に結合する時、此の純潔無垢の姿 (das Bild der Unschuld) が余の内に於て余の獲んとする完全性の目標 (das Ziel der Vollkommenheit) となる。即ち余の道德狀態の基礎となるのである。」(Kr. A. XII, 73) 我々はそこに「純潔無垢」と「道德」の基本關係に就て決定的に重要な見解の披瀝されてゐるのを見る。而して此の場合我々の特に注意を拂はねばならぬのは、謂ふ所の「純潔無垢」が人間出現の初發時のそれから理想 (目標) のそれへと振替へられてゐると云ふ事である。(上)

三 ペスタロッチーは前述の如く、「純潔無垢」と「道德」の基本關係を明らかにした後、引續いて同じく「純

潔無垢」と「法」(正義乃至權利) Recht の相互關係に言及して曰く、「但しそれ(純潔無垢)は決して社會的正義(權利)の基礎ではあり得ない。」(Kr. A. XII, 73.) と。而も彼はかかる根本的見解に基いて、當時多く論議された問題である「自然法」(Naturrecht) と「社會契約」(gesellschaftlicher Vertrag) に対する徹底的な究明をなしてゐる。先づ「自然法」<sup>(十二)</sup>に就て見るに、一體「正義(權利) Recht」なる概念は自然狀態の純潔 (Unverdorbenheit) の本來の起點にも、又幼兒期の無邪氣 (Harmlosigkeit) の本來の起點にも結合され得ない。不正の意識なくしては正義(權利)なる概念は余の心に起つて來ないし、又不正に惱む事なくしては正義(權利)の感情は余の心に起つて來ない。それ故一切の正義(權利)概念は社會的概念であり、一切の正義(權利)感情は社會的感情であり、従つて自然法なる概念は、之を純粹に解すれば一個の欺瞞に外ならない。」(Kr. A. XII, 73.) 即ちそれは何等か人間の有史以前に於ける法(權利)秩序を問題としてゐるのではなく、却つて一種の限界概念と見らるべきである (Vgl. Kr. A. XII, 73.)。だが併し他面「我々は、一切の要求と一切の責任との間の媒介概念なる權利と義務に對する我々の觀念が、我々の認め得る最高貴最上ものに矛盾せぬ如き原則の上に立つ事を欲するものである。従つて我々自身の内なる斯かる意志こそが我々の自然法と呼ぶものの源泉である。」(Kr. A. XII, 73.) 而もこれと正しく同様の事が「社會契約」に就ても言ひ得る。即ち「自然」の中には何等所謂「社會契約」の如きものは存在しない、にも拘らず、我々は然る「契約」を「自然」の中に投入する一つの力を自身の中にもつ (Kr. A. XII, 75.)。我々はそこに明らかに、相互に根據を異にする二重の自然(高次と低次)の存在



を見る。而もそこにやがて法（権利）の二重的性格の生ずる根拠が存するわけである。此の點、第二の社會狀態の考察に於て一層明らかにされるであらう。

以上見來つた所を綜合するに、彼ベスタロッチの本來の意圖は、何等か原始的な人間の存在形態そのものを探究しようとするよりは、寧ろ逆に人間の存在を原始的なる一定の段階に投寫し、以てその決定的なる相貌を一層明確に浮き出させようとする所にあると言はねばならぬであらう。所詮その所論は時代的な問題背景の圈内にとどまるものではあるが、併しその中心主題たる原始自然に對する彼の立場は、自ら一般の場合に於けるとは異なるものが存する。先づ第一にそこでは、問題が主として内的自然（innere Natur）の側面に展開され、それに對して外的自然（äussere Natur）の側面は背景に退いてゐる——勿論此の事は著作全體の意圖に由來する事ではあるが、次に第二の點として指摘せねばならぬのは、その所論が絶えず現實の事態に還歸してゐる事である。此の點、問題の「自然」は一面法（正義乃至權利）の始元<sup>(十三)</sup>に、而して他面道德の始元に深く關聯し來つてゐる。而もその事と關聯して「自然」は低次の自然（niedere Natur）——彼の所謂「動物的自然」（tierische Natur）と高次の自然（höhere Natur）と云ふ二重の相面を顯にして來る。但し彼の探究は何よりも先づ前者の側面より進められる。彼の原始自然觀を特色づける點であるが、總じて、此等は徹頭徹尾實人生に立脚せる彼の立場上、當然の歸趨であると言はねばならない。

## (二) 社會狀態に於ける我

（制約と享受—代表と畸形化—黨派心と萬人闘争—信賴の缺如と政道の墜落—社會正義）

一「社會狀態は本質上自然狀態を制約する事に存する。」（Kr. A. XII, 76）勿論此の場合、自然狀態に制約（Einschränkung）を加へ、何等か協同的な生活をなす爲には相互の意志疏通を圖る媒介が是非とも必要なわけである。これを實に「言葉」であり、こゝに又「契約」の始元もあり、且つ社會狀態への通路も存する（Kr. A. XII, 45f.）。固より社會狀態の出現を時代的に精密に確定する事は出來ないが、一體人間は行詰りを感じないうちは自然狀態の歡喜に制約を加へようとなしなうが故に、早くもその動物的好意（tierisches Wohlwollen）を失つて硬化せる墮落的な自然人として社會狀態に現れてくる（Kr. A. XII, 76）。

ところで人間が斯く制約を受ける所以のものを考へて見るに、それはその動物的幸福の阻害を少くし、進んではその動物的自然の要求をより容易に、より確實に、より充分に満たさんが爲である。而も此の目的達成の爲に、社會狀態の人間が用ふるものは、本質に於て自然狀態の場合と同じく動物力（tie. ische Kraft）である（Kr. A. XII, 76）。但し此の場合同じく動物的な享受を目指し、同じく動物的な力を用ゑるとは云へ、その様相は著しく異つたものとして現れてくる。即ち「社會秩序の諸規約は、成程我々の享受（Genuss）を幾層倍にもするが、それと共に我々の負擔をも増加し、延いて自然狀態に於ては殆んど氣附かない不平等をして最も苦痛なる感情にまでも高める。」（Kr. A. XII, 77）



二 かく見來る時、「單純なる享受が自然状態の分である。希望する事と待ち焦れる事とが社會状態の分である。社會生活の全體の仕組は、根本に於ては本來存在しない事柄を觀念する事に基くものに外ならない。即ちそれは代表 (Representation) と云ふ事である。財産、取得、職業、政府、掟、此等總べては動物的自由の闕如に際して、なほ我が動物的自然 (tierische Natur) を満足せしめんとする人爲的手段 (künstliche Mittel) である。」(Kr. A. XII, 77.) 例へば、財産は我が自然力 (Naturkraft) を代表して自己保存 (meine Erhaltung) の役目を果し、又掟と政府とは我が自然力を代表して自己保護 (meine Beschützung) の役目を果すものである。而も斯かる見地に就て判する時は、仕立屋に於ける針、著作家に於けるペン、商人に於ける商略、農夫に於ける家畜、貴族に於ける土地、王者に於ける冠、此等孰れも未開人に於ける棍棒と何等選ぶ所がないわけである (Kr. A. XII, 77.)。唯自然人の場合は飽迄も單純であり直接的であるに對して、社會人の場合は事情が著しく複雑化して居り、それだけに又すべて間接的であると云ふ相違が存するだけである。謂はば前者が直接態であるに對して、後者は媒介態である。而も斯かる移行を可能ならしめてゐるものこそ、謂ふ所の「代表」概念である。特に注意せらるべき重要概念であると言はねばならない。

さて然しながら、斯かる事態が一面的に高度化する時、人間は著しく「社會生活の轡」(das Joch des geistlichen Lebens—Kr. A. XII, 78.) に縛られなければならぬ事となる。一體人間が分業の社會に入り込むのは、「失はれたる自然生活の歡喜を回復しよう」(Kr. A. XII, 77.) とするものに他ならぬが、結果は却つ

て之と反する。即ち「學者は頭の上から足の先に至るまで重苦しさうな體をもち、鍛冶屋はその兩脚よりも強固な腕をもち、仕立屋は歩行の時に踏み、而して農夫は牡牛の如き足取で歩く。」(Kr. A. XII, 78.) かくて一の者は特に「よき耳」として、他の者は「特によき口」として、更に他の者は「特によきタイプライター」として、尙又他の者は「特によき輪」等々として役立ち得るやうに變形せしめられて了ふ。而もその結果は、或る一つの機關のみは特別に研きあげられてゐるが、其他の大部分は不具であると言ふ洵に慘な、Duodezmannschicht<sup>(十四)</sup>が出來上る事となる (Kr. A. XII, 78.)。これこそ明らかに自然人に加へられたる「畸形化」(Verstümmelung) に外ならない。

三 と云ひて、一切の市民的關係の中に行渡れる一般的偏屈 (allgemeine Schiefheit) と一般的硬化 (allgemeine Verhärtung) とは、社會状態に於ける我々人類の自然諸力の内面的畸形化 (innere Verstümmelung der Naturkräfte) の一つの結果である (Kr. A. XII, 78.)。而も又此處からして一切の關係に於ける「黨派心」(Esprit du Corps) と云ふ特別な感情が生じて來る。即ち門閥感情とか貴族感情とか或は政治家感情とか云ふのがそれである。そしてそれと共に、恰も虎がその洞穴を守ると同じやうに、夫々自己の牙城にたてこもらうとする市民的不通が生じてくる。而も此の點上王侯から下一介の仕立屋に至るまで全くその軌を一にしてゐると言はねばならぬ (Kr. A. XII, 78f.)。

かくて「社會状態はその本質上、自然状態の墮落に於て始まれる萬人の萬人に對する鬭争 (der Krieg aller



gegen alle) の繼續である。成程社會状態に於てはその形式こそ變つてゐるが、併しそれが爲に何等激情は滅殺されてゐない。寧ろ反對に、人間は此の状態に於て、その畸形化され且つ不平化されたる自然の負へる全き偏屈と頑固とを以て、此の闘争を遂行するものである。」(Kr. A. XII, 79.) それ故社會人は自然人の如く直接的な他殺はなさずとも、間接的な他殺へ向ふ本來の傾向をもつものである。實に、「社會人そのものは、彼がその本能の血潮の上に、更に又その好意の墳墓の上に座する事、恰も殺害人が被害者の血潮の上に座すると同様である。」(Kr. A. XII, 80.) これこそ正しく變形されたる修羅の巷でなくして何であらう。<sup>(十五)</sup>

叙述は此のあたりより愈々動的な展開を示す。而もそれと共に、佛國革命前後の現實の世相が著しく前景に現れてくる。

四 さて上述の如き事情は政道をも支配してゐる。即ち上司は民衆に向つて、「民衆は信頼 (Zutrauen) をもたねばならぬ。信頼のない所には政道 (Regierung) の成立つ道理がない。」(強調點はハエストロッター自身による) と云ふ。而も上司自らは民衆に對して何等信頼を示さうとする用意がない。(Kr. A. XII, 80.) 一體信頼と好意とは之を私的な德 (Privatugend) として見る時は、それは我等が失へる純潔無垢の永遠に好ましき影である。だが我が人類そのものはかゝる純潔無垢に對して最早何等の權利をも有するものではない。殊に權力ある人間は自體不信頼的なものである。一見逆説的ではあるが、實は「信頼の缺如 (Misstrauen)こそ偉大なるものの性格のうちで第一の特質である。」(Kr. A. XII, 82.) 洵に、彼等と雖も又かゝる階級的精神なくしては全く存立

し得ないのである。而も彼等權力者が往々にしては好意なるマントをすら装うてゐる (Kr. A. XII, 82.)。思ふに人間は我欲的動機に於て動いてゐながらも、自らそれと自覺せず、却つて反對に、何等かより高尚な動機に於て動いてゐるかの如く考へなすものであるが、此の點は權力者に於ても亦全然同様であると言はねばならない (Kr. A. XII, 82f.)。かくて世は擧げて權力を中心とし、之を至上として動いてゆく。即ち學者・著述家・史家等の時流に投ぜる徒輩は孰れも人類の公事を、一般に權力に都合よき欺瞞的な光に投げ込み、以て塗炭の苦しみの中にある多くの民衆の眞理と正義とを雲霧の裡に包みかくしてしまふ (Kr. A. XII, 83f.)。斯くして道徳にせよ、家庭的な力にせよ、將又合法的な權利にせよ、すべては見せかけの國家的秩序の犠牲に供せられ、その結果、世人は専ら「公人」(öffentliche Menschen) となり、何等「私人」(Privatmenschen) としての生活餘地を残さないといふ悲しむべき事態に立至る (Kr. A. XII, 84.)。

此等すべての事は然しながら、ルイ十四世流の遣り方に倣へる全歐諸國が、その目的遂行上是非とも爲さねばならぬ所である。其處に於ては、權勢ある者の動物的傾向が極度に高まつて来る (Kr. A. XII, 84f.)。即ち「不法なる權力 (die gesetzlose Gewalt) が自己自身を以て掟と信じ、且つ掟と法とを以て自己の中にあるものと妄信する事は、恰も牝鶏の懷にある卵を思はしむるものがある。」(Kr. A. XII, 85.) 洵にかゝる權力の前に於ては、一切のものゝ運命が擧げてその掌中に置かれるのである。だが斯くの如きは固より社會正義の許容する所ではない。

五 こゝに至つて、ハエストロッターは謂ふ所の不法なる權力 (die gesetzlose Gewalt) の諸相と對比しつゝ、



社會正義 (das gesellschaftliche Recht) の正にありべき姿を指示し且つ強調してゐる (Kr. A. XII, 85ff.)。曰く。社會正義は信實と眞理とを以て、社會的に結合せる總べての人間の相互的義務となす (Kr. A. XII, 85f.)。社會正義は國家の獨立を市民の獨立に、而して國家の富を個人の確實な福祉に基ける (Kr. A. XII, 86.)。社會正義は個人に於ける以外は何等全體者を認めず、又個人の社會的墮落に基ける全體者の社會的完成の如きは之を認めない (Kr. A. XII, 86.) 等々。その所論の基調をなすものは、言ふまでもなく、人間の尊嚴性に對する烈烈たる彼の根本信條に外ならない。

ところで社會正義の實現は如何にして可能となるのであるか、これが次に考察さるべき問題である。思ふに、「人間はその自然の動物的根本感情を十分に發揮して生活すれば、社會的によきやうに、即ち社會的に見て合法的に治める事は出来ない。人間は過度の社會力を所有する場合、それを社會正義の埒内に限界づける掟の力によつてのみ、然か成り得るものである。」(Kr. A. XII, 90.) 然るに他方「如何なる社會的修練と雖も、人間の内に於て、その根源的にして而も専ら動物的なる發展傾向を消し去る事は不可能である。」(Kr. A. XII, 91.) よしんばそれが王位や刀劍であらうと、或は掟や職業であらうと、かゝる本能を根こそぎ除去する事は出来ぬ (Kr. A. XII, 91.)。即ち「人間自然の根柢は社會生活の一切の關係に於て、依然として同じものとして存する。……(即ち)動物的なものとして常に自己同一的である。」(Kr. A. XII, 92.) 人間の動物的自然はかくも根強いものなるが故、何程社會正義がかゝる動物的自然の要求を棄却し、分離しようと努めても、それは結局甲斐のない事である。

ある。否却つて逆に、動物的我欲が到る處に於て社會正義を食ひ盡してしまふ。かくて自然的自由と社會正義とは永遠に争ふ事となる (Kr. A. XII, 92.)。

かく見來る時、社會正義實現の問題が極めて困難な事が知られる。そこで最後に、「社會正義及び社會秩序の爲に、我が動物的自然の最も内奥の感情を變調せしめ (umstimmen) 且つ變形せしめる (verstümmeln)」(Kr. A. XII, 93.) やうな徹底的な「職業陶冶」を以てしたならばどうであらうか、此の點なほ吟味して見る必要がある。(十) 勿論かゝる術は全然「動物的欺瞞 (tierische Täuschung) の法則」に従ふべきである。即ち「汝の自然の動物性 (Der Tiersein deiner Natur) が、汝の、以てそれを弱める事を感じかねやうにせねばならぬ。汝が彼に許すものだけしか、汝が彼に與へぬと云ふ事を彼が信ぜなければならぬ。汝が彼から奪ふ所のもの、彼が知つてはならない。汝が彼をして惱ましめる所のもの、彼が汝に歸せしめぬやうにせねばならぬ。汝が彼をして差し向はしめる所ものを、彼自ら希望するやうでなければならぬ。汝が彼から作り出す他の自然 (andere Natur) を、彼が、彼の中に既に最初から存するものと殆んど區別せぬやうでなければならぬ。」(Kr. A. XII, 93.) 正しく汝はかくの如くして人間を市民となさねばならぬ。而もかゝる事が十全に遂行されるに於ては人間は自然状態の歡喜を知る事なく、社會生活を謳歌する事となるであらう。だが併し汝は彼を欺瞞したのである (Kr. A. XII, 94.)。それ故かゝる畸形成された人間が一度「自由」の聲を聞いたが最後、我が内奥から現狀に満足する事が果して出来るであらうか。かくて社會正義も社會状態も、窮極的に我等を満足せしめ又完成する



ものではなからず (Kr. A. XII, 96.)。即ち單に「社會的自然」(gesellschaftliche Natur) を媒介とするのみにては、我等が「動物的自然」(tierische Natur) はその根柢からしてより善きものに轉成せしめられ得る事はあり得ない。こゝに何等かより以上の根據乃至立場が求められねばならぬのは必定である。而してこれに答へる最後のものこそ、正しく次節の主題たるべき「道德的自然」(sittliche Natur) である。我々は次に、此の最後の立場及び此等三重の自然の相互關係を明らかにせねばならない。

尙ハスタロッチーは本節の補説に於て、「自由」問題を検討する事によつて、敘上の如き見地を一層明らかにしようとしてゐる (Kr. A. XII, 99—105.)。

以上社會狀態の敘述に於て展開されたる内容を振返つて見るに、それは當時の西歐の歴史地盤の上に立てる「國家問題」を中心とするものであると云ふ事が出来るであらう。國家の存立根據たる「法」の問題が特に考察の中心に置かれる所以である。ところで此の問題に關して注意せらるべきは、既に右の敘述に於て知られる如く、そこに二重の態度乃至法形態即ち不法なる權力 (die gesetzlose Gewalt) と社會的正義 (das gesellschaftliche Recht) とが成立すると云ふ事である。而もかゝる點に關して特別な顧慮を拂へるものとして、我々はヨナッソンの研究を擧げる事が出来る。彼は前者を (das Gewaltrecht とし)、後者を das soziale Recht とし、詳細に互つてこの問題を追究してゐる。參照に價するものである。 (M. Jonasson: a. a. O. S. 51—81.)

### (三) 道德狀態に於ける我

(道德の核心—個人成長の三時期と道德—純粹道德の成否—現實肯定と道德行爲—近接思想)

一 先づ道德の核心に關してハスタロッチーは述べてゐる。「余は此の世の一切の事物を、我が動物的要求にも依存せず、又我が社會的關係にも依存せず、只管我が内面的向上に寄與せしめんとする觀點に於てのみ觀念し、且つ又此の觀點に於てのみ渴望し或は拒否しようとする力を余自身の内にもつ。此の力は我が自然の内奥に獨立してゐる。即ちその本質は決して我が自然の何等か他の力の連續ではない。それは、余が存在するが故に存在し、又余は、それが存在するが故に存在する。それは本質的に余に内在せる感情、即ち余が爲すべき事を余の意欲する事の法則となす時に、余は余自身を完成すると云ふ感情から生ずる。」(Kr. A. XII, 105.) と。我はそこに、最後の念願たる人間生命の内面的醇化と更に之が實現の可能根據としての人間の意志の自律に對する確信の端的なる表示を見る。而も此の點彼は尙曰く、「道德は全然個別的 (individuell) なものであり、それは二者の間に成立するものではない。如何なる人間と雖も余に代つて『我在り』と感ずる事は出来ない。如何なる人間と雖も余に代つて『我道德的なり』と感ずる事は出来ない。」(Kr. A. XII, 106.) と。明らかにそこには、人間の個性性が極度に表面化してゐる。のみならず此等全體を通じて、我々はカントの立場への著しき近接を認めねばならぬであらう。唯併し之を何等か一方的のみに解し去る事はゆるされぬ。<sup>(三十一)</sup>

こゝに我々は「探究」の内容そのものに即して、事態的に彼の眞意を究明せねばならぬわけである。一體上掲の命題は單にそれ自身獨立なものとして解さるべきではなく、却つてより全體的な關聯に於て、即ち「探究」全體に於ける三重の構造關聯に即して解されねばならない。而も此の建前よりする時は、當面問題の命題こそ正し



く斯かる構造關聯に於ける最後の轉換點を指し示すものに外ならない。従つて一見奇異に感ぜられる「道徳は……二者の間に成立するものではない」と云ふ表現の如き、何等か極端な個人主義的立場を意味するものと解せらるべきではなく、却つて正しく、道徳への窮極の轉換が人間的根據を絶した所に成立する事の意味に解せらるべきである。換言すれば、それは形而上的な深淵からの個體の「新生」(Wiedergeburt)乃至「大死一番の飛躍」(salto mortale)に外ならない。かくて事態は深く宗教の領野に關聯し來るわけであるが(Vgl. Kr. A. XII, 38—43, 151—157)。こゝでは一應之が論點の所在をつきとめて置くにとどめる。<sup>(11)</sup>

そこで問題は果して然らば、これを轉機として、その自覺過程に於ける一切の現實否定が如何様に肯定面へと轉成せしめられるかと云ふ事である。我々はベスタロッチーと共に次の二、三の考察を通じてその間の事情を明らかにせねばならない。

二 先づ三状態乃至三重の自覺過程及び此等相互の關係を見る上に重要な手懸りとなるのは、個人成長の三期(幼兒期、青少年期及び成人期)である。思ふに我々は幼兒期に於て我々の動物の純潔に最も近い。だが又それ故にこそ最も動物的でもある。従つて此の期に於ては感覺的享受がすべてであるが、それはやがて、満足されるにつけ又満足されぬにつけ、身を誤るもとなる。其れ故、そこに惹起される災禍を克服し得る如き一つの力が求められねばならぬ。それは子供の快樂(Kinderlust)と大人の權利(Mannsrecht)との中間なる徒弟期(Lehringsstand)に於て求められる。ところで此の期の前後兩時期に對する意味關係を見るに、此處では先づ

幼兒期の一切の魅惑が失はれる。而も他方成人期の自由及び權利を享受する事も未だ出來得ない。謂はば此の期は將來に對する希望の下に、現在の享受を斷念する一約束(Vertrag)の世界である。そしてその限り又、本來の意味に於ける權利の缺如(Rechtlosigkeit)せる時期である。かくて此の期も亦轉ては止揚されねばならぬわけである。だが併し、余が此等の迷夢を通じ又此等權利の缺如といふ束縛を通じてのみ、余が現在の親方たる眞理(Meisterwahrheit)及び余が現在の親方たる權利(Meisterrecht)に到達し得られるものなる事は、之又眞理である。我が幼兒期の迷妄なく又我が徒弟期に於ける權利の缺如なくしては、余にとつて發奮の衝迫と信實(Treue)の力が缺如するでもあらう——實はその故にこそ人間は眞理と正義に於ける自律性にまで自らを高め得るのであるが。(Kr. A. XII, 108)我々はそこに極めて重要な見解の表示を見る。即ち窮極求めらるべきは親方たる境涯であるが、それは前二者を前提し介せずしては到達し得られぬものなる事、従つて又、前二者は終極に於て止揚さるべきものながら夫々固有な存在意義と根據とをもつものであると云ふ事の二點である。勿論此等の事はそれ自身として見ても(特に人間の陶冶形成の立場より見て)極めて重要な意義をもつものであるが、更に又此等「幼兒、徒弟及び成人なる三重の關係に就て眞である以上のすべては、我が動物的、我が社會的及び我が道徳的、自然に就ても亦眞である。」(Kr. A. XII, 108)かくて、問題は我等の主題なる「自然」——三重の自然——に深く關聯し來つたわけである。就中そこに介在せる「社會的自然」<sup>(12)</sup>は、我々の絶えず注視し來つた「自然の進行」の構造性に決定的な關係をもつものとして、特に注意に價する。尙此等の點に關しては、後に再び關説され



る機会があるであらう。

三 個人成長の三時期に關する敍上の考察を通じて知らるゝ如く、動物的及び社會的狀態の「印象は、余の内に於て、余が墓に没するまでも消え去らなむ」(Kr. A. XII, 109)。事は明らかであるからして、勢ひ、我が動物的、自然及び我が社會的關係、乃至社會的、自然)に全然依存せずして感じ、考へ、行ふ事、即ち「純粹に道德的」(rein sittlich)である事は不可能とならざるを得ない。(Kr. A. XII, 103)。従つて「純粹道德 (reine Sittlichkeit) は、動物的、社會的及び道德的諸力が分離せず、却つて相互に最も緊密に織りなされて現れる我が自然のもつ眞理に逆らふものである。」(Kr. A. XII, 109f.)

一體「全然純粹なる道德への要請 (Anspruch) は、我が社會狀態の墮落の中に於て、(實際に) 近づき得るよりは、より一層我が自然の失はれたる純潔無垢に近きものと、余をして(過) 信せしめるに至る。」(Kr. A. XII, 110)かのキリストの山上の垂訓の如き、「汝生活の爲に思ひ煩ふ事勿れ、何を食ひ何を飲まんと思ひ煩ふ事勿れ。——汝持てるものを抛け捨てよ。——妻よ、汝は我に何のかゝはりやある。誰か我が兄弟姉妹ならん」(Kr. A. XII, 110)等々と、極力此の世の一切の煩慮・財・血縁・律法・暴力等の斷念を説く。が併し、斯くの如き道德の全き純粹性は必然的に、その出發點、即ち何等の災禍・罪惡・危難を知らざる余が純潔無垢の狀態に導きゆかざるを得ない。之を譬ふれば、開花前の蕾 (Knospe) にも類へらるべきである。而も此の蕾たるや、實はそのまゝに止まるべきではなく、一度は花 (Blüte) となつて然る後成熟した果實 (Fruchte) となるべきもの

であり、その成熟の極點が實に我が道德的完成の極點にして、謂ふ所の純粹道德亦此の外に存在するを得ないのである (Kr. A. XII, 111)。それ故、「我が動物的純潔無垢と我が道德的完成との間には、未だ發展せぬ蕾の純潔無垢と成熟を遂げた果實の純潔無垢との孰れもが、それに堪へ得ぬ」<sup>(111)</sup>の「世界が存する。」(Kr. A. XII, 111)。洵に「純潔無垢の汚れざる所有と云ふ事は死すべき人間の分ではない。人間はそれを、母の膝に於ける最初の泣聲と共に失ひ、而してこれをその胸に恢復しきらぬ中に、死してゆく。」(Kr. A. XII, 111) されば、人間は正しく斯かる兩つの極の中間をこそ生きぬかねばならぬ運命に置かれてゐる。而もその運命たるや、恰も嵐になやまされる舟人のそれにも比すべきものがある (Kr. A. XII, 111)。

四 さて現實否定的な立場から現實肯定への大いなる轉換をなし來つたベスタロッチーは、更にその立場を徹底せしめて曰く、「余が余の罪惡と余の墮落の本質とを發展し (entwickeln) 得るならば、然る時、余は余の純潔無垢の本質を認識するであらう。」(Kr. A. XII, 111)と。更に又曰く、「若しも彼(人間)が恰も爆發せる火山の如く、罪深き生活に自身没了せる事を知るならば、然る時彼は己が洞窟から脱け出で、而してその動物的墮落の怖しき結果より自己自身を再び淨化しようと、自らの生活を之に振り向ける。正しく此の時こそ余は余自身、否余が自然の廢墟の上に再びほゝるみ、而してその碎破せる殘骸の上に、再び余自身をよりよき生活へと更生せしめる。」(Kr. A. XII, 112)と。これこそ紛れもなく、死して生すべき人間の負へる矛盾相反の姿そのまゝであり、謂ふ所の道德又「かゝる我等が埋没せる自己に即して作爲すること (diese Arbeit an unserm Verschutte-



ten Selbst) (Kr. A. XII, 112.) 以外には本来成立し得ない。洵に「かゝる死を負へる肉體に於ては、道徳はその根源をば墓場に、至るまでおほひかくす影に曇らされてのみ、さすらふものである。」(Kr. A. XII, 112.) 我々は此の見地からして、又道徳行為の具體相を明確にする事が出来る。即ち「道徳はそれ故その自然の結果として (Vermöge ihrer Natur) 決して正義及び眞理といふ如き純粹概念に結合されるものではない。かゝる領域に結合されてゐたのでは、人間は一般に、その動物の直觀方法 (tierische Anschauungsweise) の義的な印象の結果、眞とし或は偽として現れるまともな對象 (die positiven Gegenstände) のみしか知り得ない。」(Kr. A. XII, 112.) 洵に「正及び不正と云ふ斯かる概念は、我が道徳の基礎たり得ずして、却つて反對に、斯かる正乃至不正には何等依存せずして而も行為は道徳的たり得るのである。但し此の場合の行為たるや、我が自然の動物的衝動に對立する信實なる意志の緊張なくしては余にとつて不可能な如き仕方、余の動物的自然の凡ゆる欺瞞から離脱せんとする、眞摯な努力をその基礎となすものである。」(Kr. A. XII, 112.) 此處に至つて、ベスタロッチはその立場を更に一層具體的な相に於て展開して曰く「余の道徳は元來自己を醇化せんとする、或は通俗の言葉で正しい事をなさんとする純粹意志を、一定度の余の認識に、及び一定状態の余の諸關係に結合する仕方に外ならぬ。そして父とし、子とし、有司とし、臣下とし、自由人とし、奴隸として、斯かる一切の諸關係に於て、余自身の便益と余自身の満足とよりは、寧ろ余の確信上、看守・養育・保護・權利並に服従・信實・感謝・歸依なる責を負へる一切の對人の便益と満足とを求めんとする、純粹にして他意なき勞を自らにとらんとする

仕方に外ならぬ。」(Kr. A. XII, 113f.) と。此處で我々の注視せねばならぬのは次の二點である。即ちその一は、説く所、特殊の境遇に處して尙且つ全的に生きる人間の姿であり、而もそこには、かの輻輳的な構造をもつてる生活圏の思想が横はつて存するといふ事である。勿論これは「夕暮」以來彼の思想を貫いて存するものであり「夕暮」に於ける「關係」「地位」「個人分」等の一聯の概念系列を想起せよ、更にシユプランガーの解釋に従へば連續の原理 (Kontinuitätsprinzip) を以て代表さるべきものである。<sup>(三十四)</sup> 次に第二の點として、此等全體を貫く内面的契機に即して言ふならば、それは單なる「好意」乃至「愛」の能くし得る所ではなく、却つて、人間の根柢を絶した所より來る至醇な愛のみ能くし得る所のものである。

五 右の如き立場をとれば、そこに當然彼の所謂近接思想 (Nähe) が問題となるわけである。ベスタロッチは特に道徳への誘導 (Einlenkung) と云ふ觀點から之が重要性を強調して曰く、「自然が我が動物的存在 (Wesen) を道徳的對象に結びつける事が近ければ近い程、又成るべく種々の點から、その動物的快氣並びにその動物的苦痛が余に觸れれば觸れる程、余は愈々多く其處に道徳への刺戟と動機と手段とを見出す。自然が我が動物的存在を道徳的對象から遠ざければ遠ざける程、かゝる道徳への刺戟と動機と手段とをそこに見出す事は愈々少くなる。」(Kr. A. XII, 113.) 而も彼はかくの如き「動物的近接」(tierische Nähe) の思想を、これに續く諸頁に於て繰返し述べてゐる。中に就て注意すべきは、かゝる立場からして社會圏の大小と道徳的關係に言及し (Kr. A. XII, 113f.) 更に進んで、立法のもつべき使命と限界とを明らかにしてゐる事である (Kr. A.



XII, 119ff.)。今此等一々に就て立入つて闡説する事は省略するが、併しこれが果して如何に解さるべきか、その點、我々として一應考察を加へて置かねばならぬであらう。

ところでこれに關しても亦、我々は「自然」問題と關聯的に之が眞義を解明したいと思ふ。尤も此に言ふ「自然」とは、既に知らるゝ如く何等か平板的なそれではなく、却つて、我々が「自然の進路」(夕暮)乃至「自然の進行」(探究)を通じて開き來つた、極めて立體的な構造的なものである(實は我々はこれをヘーゲルの意味に於て辨證法的なものと解するのであるが)。今三重の自然の相互關係を想起して見るに、第一の「動物的自然」(tierische Natur)と第三の「道德的自然」(sittliche Natur)とは中間の「社會的自然」(gesellschaftliche Natur)を介して、相互に否定媒介的關係に立つのであるが、而もその限り又兩者は相互に深い接觸面をもつのである。謂ふ所の「近接」が二重の接觸面(動物的和道德的)を有する所以であり、更に又、その遠近が何等か空間的なものではなく、却つてかゝる全體的な構造に即してのみ然か斷せらるべき所以である。尙此に重ねて述べて置かねばならぬ事は、かゝる「動物的自然」が決してそれ自身道德であるのではなく、却つて飽達も道德への誘導といふ觀點に於てその本來の意味を有するといふ事である(Vgl. Kr. A. XII, 118f.)。と言ふのは、それが眞の道德へと翻へされる爲には、そこに更に「自己否定」(Selbstverleugnung—Kr. A. XII, 127)なる最後の轉換が遂げられねばならぬからである。

以上我々は自然状態、社會状態及び道德状態なる三状態を通じて、そこに三様の人間の存在形態とその相互の移行關係とを知る事が出來た。而して此のうち先づ前者に關しては、ベスタロッチーは之を要約し且つ特色づけるに、「自然の作物」(Werk der Natur)、「種族(乃至世界)の作物」(Werk meines Geschlechts, Werk der Welt)及び「我自身の作物」(Werk meiner selbst)なる三重の表現を以てしてゐる(Kr. A. XII, 121ff.)。尤もそこでは、主として此等三者の相互的區別が強調せられ、その半面、此等相互の移行乃至媒介關係の説述は極めて不備であると言はねばならない。唯併しながら、その方式化の不備如何に拘らず、彼が此等三者の相互的移行乃至媒介關係を、事態的に而も極めて構造的に把握してゐる事は、敍上の考察に照しても知らるゝ如く、何等疑ふ餘地がないのである。而も此の點こそ、實は彼の思想理解に決定的に重要な關係をもつのである。こゝに重ねて強調する所以である。

## 結 語

ほど豫定の考察を果す事を得たので、簡単な結語を附して稿を終る事とする。

茲に改めて述べるまでもなく、我々は終始ベスタロッチーの「自然」を追究する事を以て、本稿の眼目となし

結 語



來つた。而もその際我々は、「自然の進路」(「夕暮」)乃至「自然の進行」「探究」を通じて之が如實の相を開示したのであるが、その結果つきとめ得た事は、動物的・社會的及び道德的なる三重の自然の所在と、同時に此等相互の構造關係とであつた<sup>(二七)</sup>。而も此の結果は、彼の思想の獨自性を解明する手懸りを我々に提示し、従つて又我の最初豫期せる諸點に對して積極的なる意義を有するものである。先づ第一に、我々は此の結果を通じて、兩極(「夕暮」と「探究」)間に於ける思想形成の事實と經過とを知り得たのみならず、更に、兩者の思想内容的呼應關係を一層明確にする事を得た。次に第二に、我々は此の結果を通じて、「方法」の據つて立つ基盤構造を明らかにする事を得たのである。といふのは、前既に説明せる如く、我々はそこに彼の「方法」を特色づける「動物的近接」乃至「物理的近接」(physische Nahe)等——より一般的には「直觀」に關係するが——の眞義を解くべき決定的な根據を得たからである。尤もこの點の立入つた考察は、更に彼の「ゲルトールド子女教育法」(Wie Gertrud ihre Kinder lehrt)の内容と關聯して果さるべきであるが——そしてそれにしては私としても十分な見通しを有するが——今はこれ以上立入らぬ事とする。たゞ一言して置かねばならぬことは、ペスタロッチが人倫に關して近接思想を説く場合、多く「動物的近接」(tierische Nahe)乃至「動物的・感性的近接」(tiersch-sinnliche Nahe)といふ表現を用ふるに對して、悟性認識に關して近接思想を説く場合は、多く「物理的近接」(physische Nahe)乃至「感性的近接」(sinnliche Nahe)といふ表現を用ひてゐることである。勿論前者が「動物的自然」より「道德的自然」への進行に關聯するに對して、後者が「物理的自然」(physische Natur)より

り「知的自然」(geistige Natur)への進行に關聯をもつものである事は明らかであるが、我々はかゝる表現上の變化のうちに、彼の自然の多様性と、同時に彼の近接思想の即事的、且つ構造的性を端的に把握することが出来るといふべきであらう。

以上我々は主題たる「自然」をば、「自然の進行」を通じて構造的に開く事により、そこに終に「合自然」(Naturgemässheit)の教育<sup>(二八)</sup>への通路を見出し得たわけであるが、固より之が詳細な考察はこれを別の機會に留保せねばならない。

## 註

- (一) デレカートは更に一步進めて、ペスタロッチの過去に於ける思想的發展段階を此の「探究」の中に讀みとらうとしてゐる (Fr. Delcat: Johann Heinrich Pestalozzi, 2. Aufl. 1928. S. 190—192)。尙第一部で盛込まれたる内容相互の關係に就てはシュンランガーの研究を參照 (Pestalozzis „Nachforschungen“, 1935. S. 15—18.)
- (二) Vgl. hierzu M. Mayer: Die positive Moral bei Pestalozzi, S. 140ff.
- (三) 一體ペスタロッチの「方法」が著しく構造的である事は、彼自身之が解明に當つて「機械的」(mechanisch)乃至「有機的」(organisch)等の言葉を以てしてゐる事によつても明らかに知り得られる所である。勿論此の場合前

結 語



者よりは後者の方がより一層適切であるわけであるが、問題はそれにとまらず、そこには更に以上の構造關係が藏されてゐる。即ち「辨證法的」(dialektisch)なる構造關係がその根柢に横はつてゐるのである。固よりかゝる表現は彼自身何等用ひてゐるわけではないが、しかし我々は事態的にその事實の存する事を認めねばならない。而も當面問題の命題の如きは、そのよき手懸りを我々に提示するものと言ふべきであらう。

(四) ペスタロッチの「方法」が所謂「心と頭と手」の三領野に即して開かれてゐる事は今更改めて述べるまでもない事であるが、それは此の場合の表現方式たる「感じ・考へ・行ふ」と云ふのと全くその軌を一にせるものと言はねばならない。實にペスタロッチの思想的根柢の存する所である。

(五) 一般に眞理(Wahrheit)は一もつて二あるべきでない筈であり(この點は正義 Recht に於ても同様であるが)、従つて三重の眞理とは普通には瞭解しかねるところであらう。三者のうちいづれか一が窮極の眞理であつて、他の二者はそれに對して、單に二次の眞理乃至假の眞理であるに過ぎないであらう。更に言へば、それは一個の欺瞞乃至は誤謬であるであらう。何も拘らず、それを眞實のものとして確信するところに、現實の人間社會に於ける深刻な問題が存するのであつて、そこをやがてペスタロッチの主題が置かれてゐるわけでもある。これ等の點については、本文の敘述の進むにしたがつて漸次明らかになるであらう。

尙この眞理問題については、ヨナソンの研究を参照のこと。

M. Jonasson: *Recht und Sittlichkeit in Pestalozzis Kulturtheorie*, 1936, S. 13 ff.

(六) Vgl. hierzu P. Natort: *Pestalozzi, Sein Leben und seine Ideen*, 1909, S. 52.

(七) Vgl. hierzu M. Jonasson: a. a. O. S. 81-85.

(八) この點に關して、我々は「探究」中特に「道徳状態に於ける我とは何ぞぞ」(Kr. A. XII, 105-121)と云ふ箇所を精讀して見る必要がある。そこには、前に否定され來つた二重の状態乃至二重の我が回復されてくる過程が明らかである。即ち辨證法的な移行が見られるのである。

尙かゝる見解については左記の書を参照のこと。特に後者はこの點詳細に論述してゐる。

P. Natort: a. a. O. S. 51f., 76ff.

M. Jonasson: a. a. O. Einleitung (S. 9-16).

(九) 我々は此處でルウソウの「エミール」劈頭の句を想起する事が出来る。

(十) 引用文中の用例よりしても知らるゝ如く、ペスタロッチの場合の「動物的」(tierisch)なる語は一義的なものでなく、時には我欲(Selbstsuch)の面を現はし、又時には好意(Wohlwollen)の面を現はす。ペスタロッチ理解上注意せねばならぬ點である。

(十一) 「夕暮」に現はれてゐる「純潔無垢」を此の場合のそれに對比して見るに、前者に於ては後者に於ける如き區別(謂はば自然的「純潔無垢」と道徳的乃至理想的「純潔無垢」との區別)が未だ明瞭には現はれて居らない。而もそれだけに又其處では一方から他方への移行・轉換が自から平板的ならざるを得ないわけでもある。それに對して此の場合、兩者の區別が明らかになる半面、その間の移行轉換が極めて複雑な立體的構造を露呈してきてゐる。同じく「自然の進路」(Bahn der Natur)乃至「自然の進行」(Gang der Natur)と言ひながら、「夕暮」と「探究」との間に於ける相違である。此等の點に關しては、本文の考察の進むにつれて一層明らかになる事と思ふ。

(十二) 「自然法」に關する種々なる解釋に就ては、田中耕太郎博士の論文「自然法の過去及び其の現代的意義」(東京帝國

結語



大學カトリック研究會編「カトリック研究」第一輯所載)を、手近に参照する事が出来る。而して此等に就て見ても知り得られる如く、ペスタロッチの「自然法」解釋は固より一面的なるを免れぬであらうが、併し彼が此の問題に關して一般に輕視乃至無視されてゐる方面(即ち衝動的—非合理的方面)を特に重視した點は十分注意せられねばならぬ。尙此の點に關してはヨナッソンの所説參照(M. Jonasson: a. a. O. S. 24—35.)。

- (十三) 法(正義乃至權利)の始元が所有乃至財産の始元と決定的な關係をもてる事は、ペスタロッチの又十分注意してゐる點であるが、此の場合改めて想起する必要があるであらう(Vgl. M. Jonasson: a. a. O. besonders S. 47ff.)。
- (十四) ペスタロッチは「クリストフとエルゼ」の中に於て(第二十三夜、偏狭な人間(Halbmenschen)と「全人」(ganze Menschen)とを對比して人間の陶冶を論じてゐるが、此處に言ふ「Duodezmen-schlichkeit」は「前者 Halbmenschen」の一層強度のものを意味してゐると云ふ事が出来るであらう。
- (十五) こゝに我々は「かのホブンス(Thomas Hobbes)に於ける「萬人闘争」(bellum omnium contra omnes)の思想の再現を見る。
- (十六) 内容に即して嚴密な用語を用ふれば「das gesetzliche Recht」と言ふべきであらう(Vgl. E. Spranger: Pestalozzie „Nachforschungen“ S. 15.)。
- (十七) ペスタロッチは社會乃至國家を論ずる場合、民衆の(而も個人的)獨立を特別に強調するのであるが、それは何等個人の利己性に加擔するものではない。却つてそこには、彼等をして眞に人間的なる崇高なるものへの具現者たらしめんとする眞摯なる希求と要請とが存するのである。尤も彼が他の多くの思想家と同様、當時の國家に對して全面的なる不信任の情を懷かざるを得ない事情に置かれた事は、此處に併せ考へねばならぬ點である(Vgl. E. Spranger: a. a. O. S. 10.)。

anger: a. a. O. S. 10.)。

尙右の問題と關聯する事ではあるが、彼が、眞の獨逸的統治精神を以て佛蘭西精神に比してより一層社會正義に叶へるものであると見てゐる事は注意せらるべき點である(Kr. A. XII, 87f.; Vgl. auch Kr. A. X, 165ff.)。

(十八) こゝに吟味される所の立場が、かの小説「リンハルト」の中に現はれ来る士官グリュンフイーの立場である事は極めて明瞭である。尙グリュンフイーの立場に就ては前既に我々の考察を加へて置いた所である。

(十九) 三重の自然に關しては、次の道德狀態の考察にあつて、立入つて之に觸れる事にしたと思ふ。たゞ此處に一言するならば、第一の「動物的自然」は既に今迄も度々現はれて來たものであり、又第三の「道德的自然」は本文所論の關係所に於て(Kr. A. XII, 93ff.)漸次現はれ來つてゐる事を注意して置く必要があるであらう。

(二十) こゝに至つて、ペスタロッチがカント倫理學のもつ高さとその特色とに著しく接近し來れる事は、一般に認められてゐる所である。たゞ問題は、かゝる結果に到達する経路が果して如何にあつたかと云ふ事、及びその到達の結果が全然カント的思想内に攝せらるべきものなりや否やと云ふ事の二點に存する。而も此の點、いづれも種々の解釋が存するのであるが、併し第一の點に關しては我々は主としてシュタインの研究・所説に従ふものである。第二の點に關しては併しながら我々は、先づ以てペスタロッチ自身の思想内容そのものを究明し、而して後に之が吟味をなすに至當と考へる。

(二十一) 此の點に關しては尙左記研究を參照。

E. Spranger: a. a. O. S. 18ff.

M. Jonasson: a. a. O. S. 109ff. 144ff.

著 書



Fr. Delekat: a. a. O. S. 207—9.

このうち、デレカートは、フイヒテの自我思想の影響を特に重視する立場をとつてゐる。

(二十二) 「社会的自然」と云ふ表現は「探究」中に於ても極く稀なものではあるが、併し「中間者」としての人間の立場に據しよとするペスタロッチの立場からすれば、かゝる中間的自然の現はれるのは蓋し當然であると言はねばならぬであらう。のみならず、之を一般的な問題としても亦、當時の「自然」が所謂「自然状態」の外に、更に現実界としての「社会状態」(即ち「社会的自然」)をもその中に包攝し得る事は、十分首肯し得られる點である。何となれば、當時「自然」は多く「超自然」(Übernatur)に對する概念として使用せられてゐたからである。

尙右の點に關しては左の諸研究を参照。

P. Natort: Der Idealismus Pestalozzi, S. 27ff., 108ff.

A. Buchenau: Pestalozzi Sozialphilosophie, S. 52.

E. Spranger: a. a. O. S. 8.

K. Riedel: Pestalozzi's Bildungslehre in ihrer Entwicklung, S. 44f.

(二十三) 新様な考へ方は、既に「立法と聖見殺に就て」なる著作に於ても明らかに認められる所である (Vel. Kr. A. IX, 160ff.)。

尙「夕暮」に於ても新様な考へは見られるわけであるが、併し此の場合に於ける程明らかなものではない。その點、「夕暮」に於ける稍々未分的なる「純潔無垢」と、此の場合に於ける兩極に開かれた「純潔無垢」とを對比して見れば、事態は自ら明らかである。

(二十四)

ペスタロッチの思想に於ける特色たる、自然的なるものと道德的なるものととの結合、衝動的なるものと自由との結合、乃至環境所與的なるものと内的自律性との結合を呼ぶに、シュプランガーは連續の原理を以てしてゐる (E. Spranger: a. a. O. S. 12.)。唯にペスタロッチに於ける特色は、道德に關する認識をば、人間の本質に關する認識並びに人間の置かれたる生活諸關係に關する認識と徹底的に結合せる點に存すると云ふ事が出来るであらう (Vel. M. Mayer: Die positive Moral bei Pestalozzi, S. 154.)。尙此の點は、カント倫理學との異同を見る上の一の重要な點と言はねばならぬであらう。

(二十五)

前にも既に關説した點ではあるが、ペスタロッチに於ては、「動物的」と云ふ表現は——それは稍々奇異な感と與へないではないが——必ずしも人間惡をのみ意味するものではない。却つて彼に於ては、それは何よりも先づ善惡の價值判斷の在るがまゝの人間の所與を意味する。かゝる點に就てはデレカートなども既に注意を拂つてゐる所である (Fr. Delekat: a. a. O. besonders S. 105.)。

(二十六)

實は此の點にペスタロッチの近接思想、従つて又直觀思想に對する二様の解釋(下からの立場と上からの立場)の生ずる根據が存する。尤も我々としては寧ろ兩者の構造的なる統一點にペスタロッチの所説の眞義を認めらるものなる事本文中に説き來つた如くである。

(二十七)

我々は此の點からして、ルッソーの「自然」とペスタロッチの「自然」の間に於ける異同關係を探り求める事が出来ると思ふ。

(二十八)

こゝに引合に出されてゐる言葉は一部は「探究」に根據を有するものであるが、他の一部(物理乃至感性的近接、物理的自然及び知的自然)は「ゲルトールド子女教育法」にその根據を有するものである。

結 語



尙一言つけ加へるならば「知的自然」が「頭」(Kopf)の陶冶領域に、「道徳的自然」が「心」(Herz)の陶冶領域に而して更に「身體的堪能」(Fertigkeiten)が「手」(Hand)の陶冶領域にそれ／＼對應するものであつて、こゝにペスタロッチーに於ける人間形成の全相が明らかにされるわけである。勿論その詳細は「ゲルトールド子女教育法」によらなければならぬ。

(二十九) ペスタロッチーは「探究」の中で「教育と立法とは、かゝる自然の進行に従はねばならぬ」(Kr. A. XII, 126.)と述べてゐる。此處に參照すべきものとして關説して置く。

7839

ペスタロッチー研究(完)

昭和二十二年十月十日印刷  
昭和二十二年十月十五日發行



ペスタロッチー研究 定價八拾圓

著者 岩崎喜一

發行者 尾張眞之介  
東京都文京區音羽町三ノ一九

印刷者 井關好彦  
東京都千代田區神田錦町三ノ一

印刷所 大同印刷株式會社  
東京都千代田區神田錦町三ノ一

發行所 株式會社 大日本雄辯會講談社  
東京都文京區音羽町三ノ一九  
電話九段(33)代表一三一・一八六  
麹町區東京三九三〇

配給元 日本出版配給株式會社 東京都千代田區神田淡路町二ノ九



27612

傳統と反省 下程勇吉著

國家と個人とを貫く倫理的根本理念である至誠清和の道は、人道主義的  
理念を歴史的に跡づけたものである。本書は清明にして純一なるかゝる  
理念を二宮尊徳翁を中心にし其他の思想家にも言及した哲學論叢である

A 5 版 285 頁  
定價90圓 送料10圓

愛の哲學 仁戸田六三郎著

一種の悦樂か罪惡の如く考えられていた愛の本質をヒューマニズムの觀  
點から追求し、愛の端的な自然的主張にのみ陥りがちな現代青年子女に  
對し、哲學的思索と正しい人生觀の把握をあらゆる角度から説いている

B 6 版 232 頁  
定價55圓 送料10圓



